

HIJIRIISHI SITE

# 聖石遺跡

——県営ほ場整備事業芹ヶ沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2004. 3

茅野市教育委員会

HIJIRIISHI SITE

# 聖石遺跡

—県営ほ場整備事業芹ヶ沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004. 3

茅野市教育委員会



豊石遺跡と周辺の地形（南西から）



3区と県埋蔵文化財センター調査区（南から）



2区と3区（南から）

巻頭図版 2

3区の被検出状態（北西から）



3区斜面の被検出状態（南東から）



3区の被検出状態（南から）



3区の完掘状態（南から）



4区の完掘状態（西から）



3区斜面の土層断面（縦断面）（南東から）



巻頭図版 4



3区斜面の土層断面 (3断面) (1) 南から (北)



3区12号住居跡P-4付近の標堤と土壤 (3断面) (2) 北から (南)



3区12号住居跡P-4付近の標堤と土壤 (3断面) (3) 北から (南)

## 序 文

茅野市は長野県南東部に位置する風光明媚な高原都市です。東に八ヶ岳連邦、西に赤石山脈から続く山脚、北に霧ヶ峰山塊を擁し、霧ヶ峰の南麓からは遠く富士山を臨むこともできます。

現在、市内には300を超える遺跡が登録されていますが、半数以上は縄文時代の遺跡です。中でも中期には山麓部を中心に遺跡数が激増し、「縄文の里」として全国にその名を知られています。日本で最初に縄文集落の姿が明らかにされた国特別史跡の尖石遺跡をはじめ、上ノ段遺跡、駒形遺跡と3つの縄文時代の国史跡があります。

聖石遺跡は八ヶ岳の西山麓にある、縄文時代と平安時代の集落跡です。県営は場整備事業に伴い、平成9年度から11年度に茅野市教育委員会と長野県埋蔵文化財センターが発掘調査をしました。その結果、台地の平坦面から縄文中期の環状集落、南側斜面から低地では縄文後期の集落跡と平安時代の住居址が発見されました。台地全体と、調査が及びにくい斜面から低地が合わせて記録保存された、市内でも例のない発掘調査となりました。

本書は茅野市教育委員会が調査した台地平坦面の一部と南側斜面から低地の調査成果を報告するものです。遺構中心の内容ですが、これらの成果が多くの方々に活用され、縄文集落研究の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から整理作業にご理解とご協力を賜りました地元委員会と地権者の皆様、長野県教育委員会と長野県埋蔵文化財センターの皆様、そして調査に従事された作業員の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成16年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角 源美

## 例　　言

1. 本書は平成9・10・11・14・15年度県営ほ場整備事業（担い手育成基盤型）芹ヶ沢地区に伴う、長野県茅野市北山芹ヶ沢所在の壘石遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は長野県源訪地方事務所の委託を受け、国庫および県費の補助を得て、茅野市教育委員会が実施した。
3. 試掘調査、発掘調査、整理作業および報告書作成は以下の期間に実施した。

試掘調査 平成8年度：平成9年3月3日～28日

発掘調査 平成9年度：平成9年5月7日～平成10年3月25日

平成10年度：平成10年4月20日～平成11年1月11日

平成11年度：平成11年5月21日～8月10日

整理作業および報告書作成

平成14年度：平成14年10月1日～平成15年3月20日

平成15年度：平成15年10月1日～平成16年3月19日

4. 本調査における委託業務は以下の業者に委託した。

基準点測量 入原測量有限公司

遺跡写真測量 平成9年度：株式会社バスコ

平成10年度：中央航業株式会社

平成11年度：株式会社東京航業研究所

遺構写真撮影 株式会社東京航業研究所

遺構実測 株式会社写真測図研究所

地形測量 株式会社写真測図研究所

5. 本調査に係わる出土品、諸記録は茅野市尖石繩文考古館で収蔵・保管している。

6. 発掘調査から報告書作成までに下記の諸氏からご指導、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

会田 進	青木正洋	石井 寛	石原州一	市川桂子	上田典男	白居直之	白田広之
江原 英	小坂英文	神村 透	川崎 保	河西克造	桐原 健	樋原功一	小林公明
小林秀夫	小松隆史	小宮山隆	五味一郎	五味裕史	佐野 隆	鈴木保彦	高見俊樹
田中慎太郎	田中 繁	田中 基	坪井清足	鶴田典昭	寺内隆夫	戸沢充則	長崎元廣
西 香子	林 賢	林 幸彦	原 明芳	樋口誠司	樋口昇一	平出一治	平林 彰
平林とし美	廣瀬昭弘	福島 水	三上徹也	水沢教子	宮坂 清	宮坂光昭	宮島義和
武藤雄六	百瀬長秀	柳澤 亮	山本暉久	綿田弘美	諫訪考古学研究会		

# 目 次

## 序 文 例 言 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の概要 .....	1
第1節 事業の経緯 .....	1
第2節 調査の方法 .....	4
第3節 調査の体制 .....	5
第4節 遺構の概要 .....	6
第Ⅱ章 遺跡の環境 .....	20
第1節 遺跡の位置と地理的環境 .....	20
第2節 周辺の遺跡 .....	21
第Ⅲ章 遺構と遺物 .....	22
第1節 1区の遺構と遺物 .....	22
(1) 概 要 .....	22
第2節 2区の遺構と遺物 .....	23
(1) 概 要 .....	23
(2) 縄文時代 .....	23
①住居址 .....	23
②方形柱穴列 .....	33
第3節 3区の遺構と遺物 .....	41
(1) 概 要 .....	41
(2) 旧石器時代 .....	41
(3) 縄文時代 .....	41
①住居址 .....	49
②方形柱穴列 .....	88
③配石・列石 .....	97
④埋設土器 .....	99
⑤土器集中 .....	99
(4) 平安時代 .....	99
①住居址 .....	99
第4節 4区の遺構と遺物 .....	102
(1) 概 要 .....	102
(2) 縄文時代 .....	102
①住居址 .....	102

# 第Ⅰ章 発掘調査の概要

## 第1節 事業の経過

聖石遺跡は耕作の際に多くの土器や石器が出土する場所として、地権者の間では古くから知られていた。しかし、大正13年発行の『諏訪史』第一巻「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」の北山村岸ヶ沢の欄に、「聖石」の地名は見当たらない。関係する地名と考えられるのは「ベッタ草」である。出土遺物は薄手式の土器とある。遺跡がある台地の南側には、台地に沿って東西に延びる幅広の谷があり、地元ではその谷を「ベッタ沢」と呼んでいる。その呼称に頼る「ベッタ草」は台地南側の谷にある遺跡と考えられる。

平成11年度に茅野市教育委員会（以下、市教育委員会）と長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋蔵文化財センター）は、聖石遺跡と長峯遺跡（遺跡番号50、平成11・12年度県埋蔵文化財センター調査）の「ベッタ沢」への広がりを確認する試掘調査を実施している。その結果、縄文時代中期終末と後期前半の遺構と遺物が確認され、ベッタ沢遺跡（遺跡番号327）として登録している。遺跡はほ場整備事業の埋土で保存されている。

昭和40年前後に聖石遺跡がある台地は発掘調査されることなく開田工事が行われている。工事関係者の話によると、その時かなりの土器が出土したとのことである。以降、工事によって遺跡は湮滅したと言われてきた。

聖石遺跡一帯のは場整備事業は、台地を削り、その上で谷を埋めて施工するものである。県・市教育委員会と関係部局は複数年度にわたる保護協議で、遺跡がある台地を残した工事の施工を検討してきた。しかし、周囲のは場が完成しつつある中で、台地を残す工事は工法的に難しく、記録保存を前提とする発掘調査が実施されることとなった。

### 平成8年度

今年度は遺跡の広がりと内容を把握する試掘調査を行った。調査は平成9年3月3日に着手した。重機により、遺跡の主体部と目される台地平坦面の最大幅部を中心に試掘した結果、縄文時代中期後半と考えられる住居址14軒、土坑89基ほか多数のピットが検出された。開田工事により遺跡が完全に削平された部分は僅かであることが確認され、遺跡の範囲も当初予測していた10,000m<sup>2</sup>からやや拡大し12,000m<sup>2</sup>以上となった。また、遺跡内の土層堆積状態は良好で、黒褐色土層中に疊や焼土址が遺存することも確認された。これにより部分的に2面の調査が必要と考えられ、調査は長期間を要するものと判断された。

3月7日に聖石遺跡の保護協議が開催された。工事計画とのすり合わせの結果、平成9年度に市教育委員会が直営で発掘調査を行うことになった。面積は試掘範囲の外側にさらなる遺構の広がりを想定し15,000m<sup>2</sup>とした。

### 平成9年度

今年度は発掘調査範囲を確定する試掘調査と、1~3区の発掘調査を行った。

4月15日付け「扱い手育成基盤整備事業岸ヶ沢地区埋蔵文化財発掘業務委託」により長野県諏訪地方事務所長小林俊規と茅野市長矢崎和広で委託契約を締結し、平成9年度の発掘調査に着手した。調査に要する費用は総額31,894,000円(農政部局負担90.5% 28,864,000円・文化財保護部局負担9.5% 3,030,000円)である。

現場作業は5月7日に開始した。遺跡主体部の様相は試掘調査である程度把握されていたが、遺跡の広がりは判然としないままであった。そこで、調査範囲を確定させる試掘調査を表土剥ぎ取り作業前に行うこととした。

5月下旬、台地平坦面最大幅部の南側斜面において、耕作上直下の黒色土層中から人頭大以上の扁平な礫が列をなして検出された。の中には数段に積まれた礫も見受けられた。礫は台地の南側斜面を若干切り崩して設けた道路に沿っていた。道路建設の際、台地平坦面側に据えられた礫とも考えられ、即座に縄文時代の所産である礫と判断することはできなかった。

約1ヶ月にわたり、礫が据えられた時代・時期を特定するための面的な礫の検出作業と、土層断面の調査を行った。礫の間から出土した遺物は縄文土器と黒曜石に限られ、土器の大半は後期前半から中葉であることが確認された。これにより該期に持ち込まれた礫であると判断された。土層断面の調査では、自然堆積と考えられる黒色土層の上にローム塊・パミス・焼土を含む黒褐色土や暗褐色土が堆積し、敷設された板状の礫も確認された。その状態から、斜面を整地する大がかりな土木工事と、そこに構築された敷石住居址の存在が示唆された。さらに、低地では現道から1.5~2m下で数基の土坑と焼土址が確認された。発掘調査面積はさらに広がり、この時点で20,000m<sup>2</sup>を超えていた。

9月1日に芹ヶ沢区公民館で地権者を交えて発掘調査の協議が開催された。市教育委員会では調査の経過と現状を報告し、平成9年度中に発掘調査を終了させることは困難であると伝えた。その結果、平成10年度への継続調査が認められた。しかし、来年度中に発掘調査を終了させるためには複数の調査員を投入する必要があり、調査員の確保に課題を残した。また、平成10年度から計画されていた長峯遺跡の発掘調査は、平成11年度以降に実施することが確認された。協議の中で地権者を対象とする見学会の要望があり、9月15日に斜面から検出された敷石住居址と配石・列石を公開している。

10月に入り調査員を増員し、斜面から低地の調査区（以下3区）と併行して、東側の調査区（以下2区）の調査を開始した。今年度の目標として、2区は12月中旬に調査を終了させ、3区は露出させた礫の記録を終了させることとした。

11月3日に現場を一般公開する。午前と午後の見学とし、約200名の参加がある。

9月の協議以降、市教育委員会では来年度の調査体制を検討していた。来年度も大規模な発掘調査が数本計画され、聖石遺跡に複数の調査員を張り付けることは困難と判断された。11月13日付け「平成10年度茅野市教育委員会実施予定の埋蔵文化財発掘調査に係る協力依頼について（依頼）」が茅野市教育委員会教育長角徹朗から長野県教育委員会教育長戸田正明宛で提出された。平成9年度に引き続き、県埋蔵文化財センターから職員の派遣を依頼する内容である。

11月17日に平成10年度の市内遺跡発掘調査に係る保護協議が開催された。この場で県埋蔵文化財センターから職員を派遣することに代わり、発掘調査の一部を県埋蔵文化財センターへ委託する案が出された。協議の結果、平成10年度の発掘調査は市教育委員会と県埋蔵文化財センターの2者が行うことで合意した。3区は市教育委員会が継続調査し、台地平坦面15,600m<sup>2</sup>の調査を県埋蔵文化財センターへ委託するものであった。なお、県埋蔵文化財センター調査区の西端1,000m<sup>2</sup>は国道299号線の付け替え関連事業であり、15,600m<sup>2</sup>から1,000m<sup>2</sup>を差し引いた14,600m<sup>2</sup>がは場整備事業にかかる発掘調査面積である。調査費用の負担割合は、14,600m<sup>2</sup>の発掘調査費用の90.5%を農政部局が負担し、農家負担分の9.5%は茅野市が負担することとなった。

12月上旬に2区の発掘調査が終了し、下旬に3区の礫の諸記録が終了した。3区の調査は年を越して続いたが、1月8日から翌日まで降り続いた大雪で調査区は完全に埋没し、調査の続行は不可能となった。

1月23日に県埋蔵文化財センターと調査委託に係る協議が開催された。ここでは委託範囲と調査費の負担割合が確認された。協議の結果を受けて、1月26日付け「県営手すき工場整備事業芦ヶ沢地区に係る聖石遺跡発掘調査業務委託について（依頼）」が茅野市長矢崎和広から長野県諏訪地方事務所長小林俊規宛て提出された。内容は台地平垣面の発掘調査を県埋蔵文化財センターへ委託し、南側斜面から低地は市教育委員会が継続調査する。発掘調査は平成10年度に終了させるというものである。

3月13日に県埋蔵文化財センターと調整会議がもたれる。図面上で委託範囲を確認し、作業員の募集方法などが検討された。

3月23日には平成10年度以降の市内遺跡発掘調査に係る保護協議が開催される。ここでは平成10年度の聖石遺跡発掘調査の最終確認がなされた。大雪で中断していた発掘調査を3月上旬に再開し、25日に終了した。

平成9年度の委託業務は平成10年3月25日に完了した。調査に要した費用の総額は31,530,000円（農政部局負担90.5% 28,534,000円・文化財保護部局負担9.5% 2,996,000円）であった。完全に発掘調査が終了した面積は1区の440m<sup>2</sup>と2区の2,800m<sup>2</sup>を合わせた3,240m<sup>2</sup>である。

#### 平成10年度

今年度は3区の継続調査を行った。

4月14日付け「平成10年度手すき工場整備事業芦ヶ沢地区埋蔵文化財発掘業務委託」により長野県諏訪地方事務所長香坂守義と茅野市長矢崎和広で委託契約を締結し、平成10年度の発掘調査に着手した。調査に要する費用は総額20,000,000円（農政部局負担90.5% 18,100,000円・文化財保護部局負担9.5% 1,900,000円）である。

現場作業は4月20日に開始した。3月に調査を再開し、掘るべき箇所が明確にされていたため、調査は順調に進んでいった。

10月27日に平成11年度の市内遺跡発掘調査の保護協議が開催される。この時点において、聖石遺跡の発掘調査は今年度に終了する予定であったが、後に聖石遺跡の範囲が拡大することとなる。

11月28日に県埋蔵文化財センターと共催で現場を一般公開する。約200名の参加がある。

12月上旬から聖石遺跡の発掘調査と並行して、長峯遺跡の試掘調査に着手した。試掘調査は約1ヶ月に及んだ。両遺跡を画す台地の括れ部分から直径1m前後の土坑群が検出された。地形および想定される遺構の性格などから聖石遺跡との関連が示唆され、遺跡の範囲が拡大することになった。

発掘調査は年内の終了を目指していたが、今年度も年越しの調査となった。現場作業を終了したのは1月11日である。

1月14日に平成11年度の市内遺跡発掘調査の保護協議が開催される。長峯遺跡の試掘結果の報告と、今後の進め方が検討された。ここで聖石遺跡の拡大部分は市教育委員会が発掘調査することになった。

今年度の委託業務は平成11年3月25日に完了した。調査に要した費用の総額は12,000,000円（農政部局負担90.5% 10,860,000円・文化財保護部局負担9.5% 1,140,000円）であった。今年度に発掘調査した面積は、低地に入れた5本の試掘トレーン（160m<sup>2</sup>）を含む1,360m<sup>2</sup>である。

#### 平成11年度

今年度は聖石遺跡の拡大部分を4区として発掘調査を行った。

4月15日付け「平成11年度手すき工場整備事業芦ヶ沢地区埋蔵文化財発掘業務委託」により長野県諏訪地方事務所長香坂守義と茅野市長矢崎和広で委託契約を締結し、発掘調査に着手した。調査に要する費用は総額6,000,000円（農政部局負担90.5% 5,430,000円・文化財保護部局負担9.5% 570,000円）である。

現場作業は5月21日に開始し、8月10日に終了した。

今年度の委託業務は平成11年3月21日に完了した。調査に要した費用の総額は4,900,000円(農政部局負担9.0% 4434,000円・文化財保護部局負担9.5% 466,000円)であった。今年度に発掘調査した面積は1,900m<sup>2</sup>である。

#### 平成14年度

今年度は報告書作成に向けて図面と遺物の整理作業を行った。

10月1日付け「平成14年度は場整備事業芹ヶ沢地区埋蔵文化財発掘業務委託」により長野県諏訪地方事務所長古坂和俊と茅野市長矢崎和広で委託契約を締結し、整理作業に着手した。調査に要する費用は総額2,00,000円(農政部局負担90.5% 1810,000円・文化財保護部局負担9.5% 190,000円)である。

今年度の委託業務は平成15年3月20日に完了した。調査に要した費用の総額は2,000,000円であった。

#### 平成15年度

今年度は報告書を刊行した。

10月1日付け「平成15年度は場整備事業芹ヶ沢地区埋蔵文化財発掘業務委託」により長野県諏訪地方事務所長牧野内生義と茅野市長矢崎和広で委託契約を締結し、図版作成と原稿執筆に着手した。調査に要する費用は総額2,000,000円(農政部局負担90.5% 1810,000円・文化財保護部局負担9.5% 190,000円)である。

今年度の委託業務は平成16年3月19日に完了した。調査に要した費用の総額は2,000,000円であった。

## 第2節 調査の方法

### (1) グリッド設定

遺構・遺物の記録の基準となるグリッドは、国家座標第Ⅳ系を用いて設定し、グリッドの単位は2m四方とした。平成9年度の時点では基準軸をX=2770、Y=-23,410に設定した。南西隅を基準に南から北へA・B～、ア・イ～、a・b～、西から東へ1・2～とした。その後、調査区の拡大に伴い基準軸の西側と南側にグリッドを追加した。基準軸から西側は-1・-2～とし、南側は-A・-B～とした。

### (2) 試掘調査

試掘トレーナーの掘削はバックホーを用いて実施した。必要に応じて人力で掘り下げた箇所がある。

### (3) 本調査

表土（耕作土と開田工事に伴う盛土）の除去作業はバックホーを用いて実施した。以下調査区毎に方法を記す。

1・2・4区 3箇所の調査区は台地平坦面にあり、開田工事に伴う切り盛りが随所にみられる。切土部分では表土直下が明黄褐色土層（ローム漸移層～ローム層）または基盤の火碎流堆積物層となり、この面が遺構検出面である。盛土部分では遺構が明確に確認できる面を検出面としている。

2区の北西部には、北西に開口する小規模な谷があり旧地形が残存していた。黒褐色土層面で遺物が散見され精査を行うが遺構は確認されなかった。その後、重機で明黄褐色土層まで掘り下げている。

遺構の断面図と平面図は縮尺を1/20を基本とし、調査補助員および作業員が図化した。遺構の掘削深度は図化の際に計測している。遺構全体図は縮尺を1/100とし、航空測量図面を基に作成した。

3区 北側の調査区境界は2区の台地の南側肩部である。2区との境界から11・25住および19～21住に至る間は、開田工事による切土で南側斜面が大きく削り取られている。これに対し、他の地点では開田工事

や道路建設に伴う盛土によって遺構の保存が極めて良い。表土の除去と、流路跡の覆土上層の掘り下げには重機を使用したが、他の掘り下げはすべて人力で行った。

礫の平面図は縮尺を1/20とし、業者と調査補助員および作業員の2者で図化している。検出状態と上面の礫を外した下面の2面は業者へ委託し、現場で図化されたものを担当者が校正し作成した。下面の礫下から検出された礫は（敷石住居址の敷石や炉址など）、調査補助員および作業員が図化した。

遺構の平面図は縮尺を1/20とし、調査補助員および作業員が図化した。掘削深度は図化の際に計測している。遺構全体図は縮尺を1/100とし、航空測量図面を基に作成した。

遺物の取り上げは遺構またはグリッド単位を基本とした。グリッド単位の取り上げは3区で実施し、必要に応じて1m四方に4分割して取り上げている。この場合、北東から時計回りにa・b・c・dとした（例I-100(a)）。

#### (4) 整理作業

微細な黒曜石片を除く出土遺物には、遺跡番号の51に続けて遺構番号・グリッドなどを注記した。その中に51A・51B・51I・51Ⅲなどと注記したものがある。記号は地点や調査年度を表すが、本書では51Aを2区、51Bと51Iを3区、51Ⅲを4区として報告する。また、報告に際し、現場で付した遺構名や番号を変更したものは、各遺構の記述または土坑計測表の備考に記している。

#### (5) 報告書の作成

作成にあたっては、多くの遺構図面を掲載するように努めた。個別遺構の平面図は1/60を基本に作成した。

遺構の切り合いが著しい3区では、同一遺構の検出面が数面に及ぶものがあり、その表現方法に苦慮した。特に斜面では同一住居址の柱穴が複数の面から検出されたものが多い。したがって、掲載した平面図の多くは同一検出面で図化されたものではない。同一住居址の柱穴でありながら平面規模が大きく異なるのは、検出面の違いによるものである。ただし、掘削深度は任意のレベルを設定し、これを基準に計測している。

### 第3節 調査の体制

本調査は茅野市教育委員会文化財課が実施した。組織は下記のとおりである。

調査組織（平成9～15年度）

- ①調査主体者 両角徹朗（平成9～10年度 教育長）  
両角源美（平成11～15年度 教育長）
- ②事務局 宮下安雄（平成9～10年度 教育次長）  
宮坂泰文（平成11～12年度 教育次長）  
伊藤修平（平成13～14年度 教育部長）  
宮坂耕一（平成15年度 教育部長）
- ③文化財課 矢嶋秀一（平成9～13年度 文化財課長）  
小平廣泰（平成14～15年度 文化財課長）  
鶴飼幸雄（平成9～15年度 文化財係長・平成13～15年度 尖石繩文考古館長）  
守矢昌文（平成9～15年度 文化財課職員・平成13～15年度 文化財係長）

小林深志（平成9～15年度 文化財課職員）  
大谷勝己（平成9～15年度 文化財課職員）  
功刀司（平成9～15年度 文化財課職員）  
小池岳史（平成9～15年度 文化財課職員）  
百瀬一郎（平成9～15年度 文化財課職員）  
小林健治（平成9～15年度 文化財課職員）  
柳川英司（平成9～15年度 文化財課職員、平安土器整理・実測）  
大月三千代（平成9～12年度、平成14～15年度 文化財課職員）  
金井美代子（平成13年度 文化財課職員）

④調査担当 小池岳史（発掘調査・整理報告担当）

河西克造（平成9年度発掘調査担当、長野県埋蔵文化財センター派遣職員）

⑤発掘調査・整理作業参加者

補助員 赤堀彰子 牛山矩子 堀内潭 武居八千代 武藤雄六  
作業員 伊藤益郎 伊東みさを 牛山和男 牛山晴雄 柳沢貞子 柳沢政道 北沢もと  
金子清春 北原きよま 木戸克子 小堀幸恵 小松敏 小松厚子 小松純子  
酒井みさを 大勝弘子 大丸多栄子 竹内美樹 立岩貴江子 田中達朗 田中 実  
花岡照院 藤森三千恵 水谷ちとせ 両角清一 矢崎恵美子 柳沢 優 柳沢友治  
柳平年子

整理作業員 木戸克子 小松純子 酒井みさを 大勝弘子 竹内美樹 立岩貴江子 藤森三千恵

## 第4節 遺構の概要

### （1）調査区と遺構の概要

聖石遺跡の発掘調査は平成9年度に開始され11年度に終了した。市教育委員会では台地平坦面の最大幅部分（平成10年度県埋蔵文化財センター調査区）を除いた地点を発掘調査している。第1章第1節で記した1区～4区の調査区は、調査年度と地形により区分したものである（第1図）。

市教育委員会の調査区から検出された遺構の種類と数は以下のとおりである。

縄文時代：住居址25軒、方形柱穴列4基、土坑379基、配石6基、列石8基、埋設土器1基、焼土址9基、土器集中2箇所、黒曜石集積1箇所 遺物包含流路跡1条、

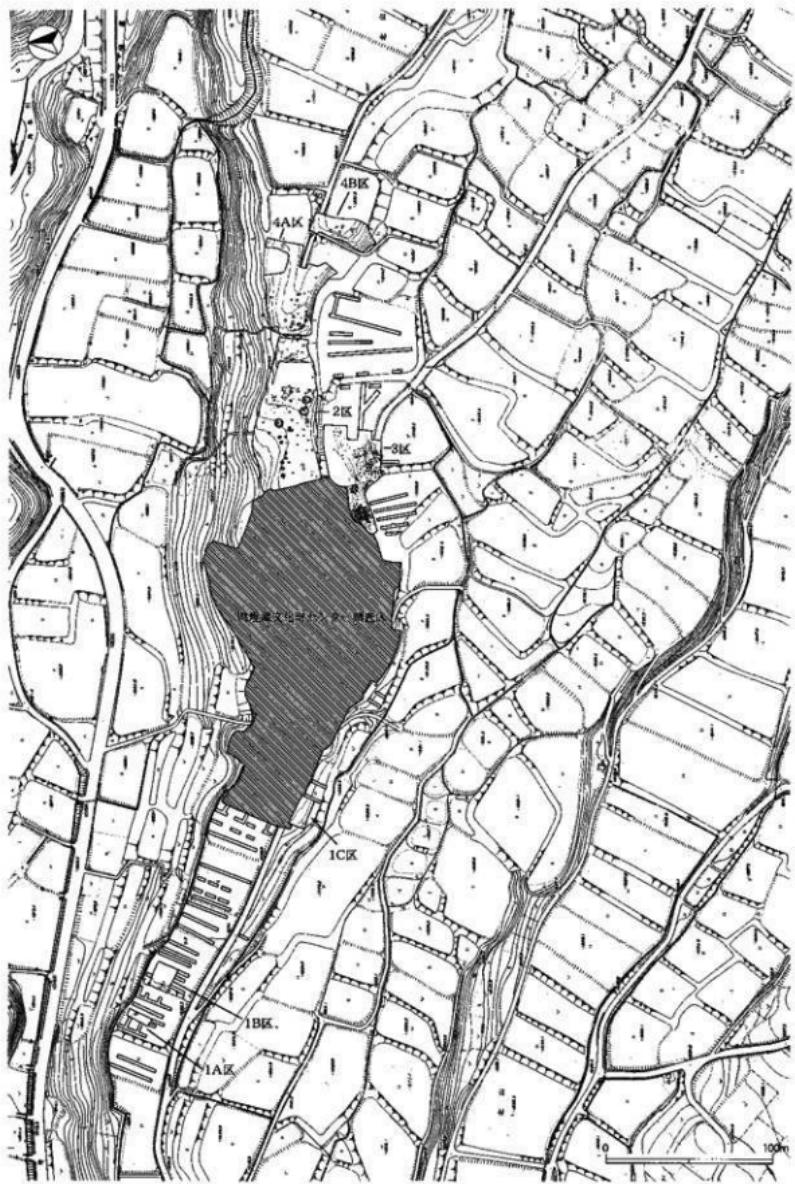
中期後半・後期前半（～中葉）遺物包含層

平安時代：住居址1軒

不明：住居址1軒

#### 1区（第2・3図）

県埋蔵文化財センター調査区に接する南斜面と、西へ約100m離れた台地平坦面である。平成9年度の調査範囲を確定させる試掘調査で土坑が検出され、同年度に土坑周囲を拡張して発掘調査した。調査区は3地点で、西からA・B・C地点とした（以下1A・1B・1C区）。1A区と1B区は隣接している。面積は1A区：70m<sup>2</sup>、1B区：200m<sup>2</sup>、1C区：170m<sup>2</sup>である。3地点から縄文時代と考えられる土坑が7基検出されている。



第1図 発掘調査区 (1/3,000)

## 2 区（第4図）

県埋蔵文化財センター調査区の東に接する台地平坦面で、平成9年度に発掘調査した。調査面積は2,800m<sup>2</sup>である。縄文時代の住居址5軒、方形柱穴列2基、土坑107基、焼土址1基と時期不明の住居址1軒が検出された。

## 3 区（第5～7図）

県埋蔵文化財センター調査区の南に接する斜面で、平成9・10年度に発掘調査した。調査面積は1,360m<sup>2</sup>である。縄文時代は住居址19軒、方形柱穴列2基、土坑219基、配石6基、列石8基、壇設土器1基、焼土址7基、土器集中2箇所、黒曜石集積1箇所、後期前半の土器を包含する流路跡1条と、中期後半・後期前半（～中葉）の遺物包含層が検出された。平安時代は住居址1軒が検出された。

## 4 区（第8・9図）

2区の東に隣接する台地平坦面で、平成11年度に発掘調査した。調査区は2地点からなり、開田工事でローム層から火碎流堆積物層まで削平された箇所を挟み東西に隣接する。西側1,400m<sup>2</sup>をA地点、東側500m<sup>2</sup>をB地点とした（以下4A・4B区）。縄文時代の住居址1軒、土坑46基、焼土址1基が検出された。4B区から長塚遺跡の発掘調査区南端までの距離は約40mである。

### （2）遺構の認定

#### 住居址

竪穴構造で（検出状態から竪穴構造と考えられるものも含む）、炉址があり、その周りに柱穴がめぐるものを作居址とした。ただし、炉址は検出されないが柱穴と敷石が揃って検出されたもの（3区16住）、柱穴が整然と配列し住居址と想定されるもの（3区23・26住など）には番号を付している。

#### 方形柱穴列

6基以上の柱穴の組み合わせで、長軸・短軸とも柱筋が通るものを方形柱穴列とした。柱穴にはビット番号でなく上坑番号を付している。これは現場で方形柱穴列と認識できず、各柱穴を土坑で扱ったためである。

#### 土 坑

作居址に伴わない穴で、人為的に掘削された穴のすべてを土坑とした。

#### 配石・列石

作居址（主体部）内の砾を除き、意図的に置かれた砾、掘方を伴い据えられた砾に番号を付した。形状が列をなすものを列石とした。番号を付した配石・列石は、無数にあると思われるものの中の主だったものである。

#### 壇設土器

作居址や土坑に伴わない土器で、掘方をもつものに番号を付した。

#### 焼土址

検出された場所で形成した焼土で、作居址の炉址を除くものに番号を付した。

#### 土器集中

特定範囲からの土器の集中出土を土器集中とした。

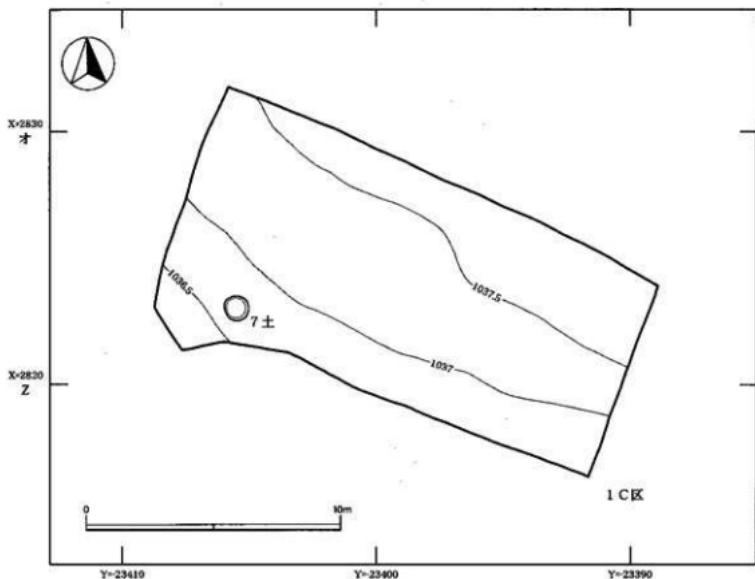
### （3）遺構名と遺構番号

市教育委員会が調査し検出した遺構の番号は、通しで付したものと調査区ごとに付したものがある。通し番号の遺構は作居址と方形柱穴列である。それ以外は調査区ごとに番号を付している。土坑を例にこれ

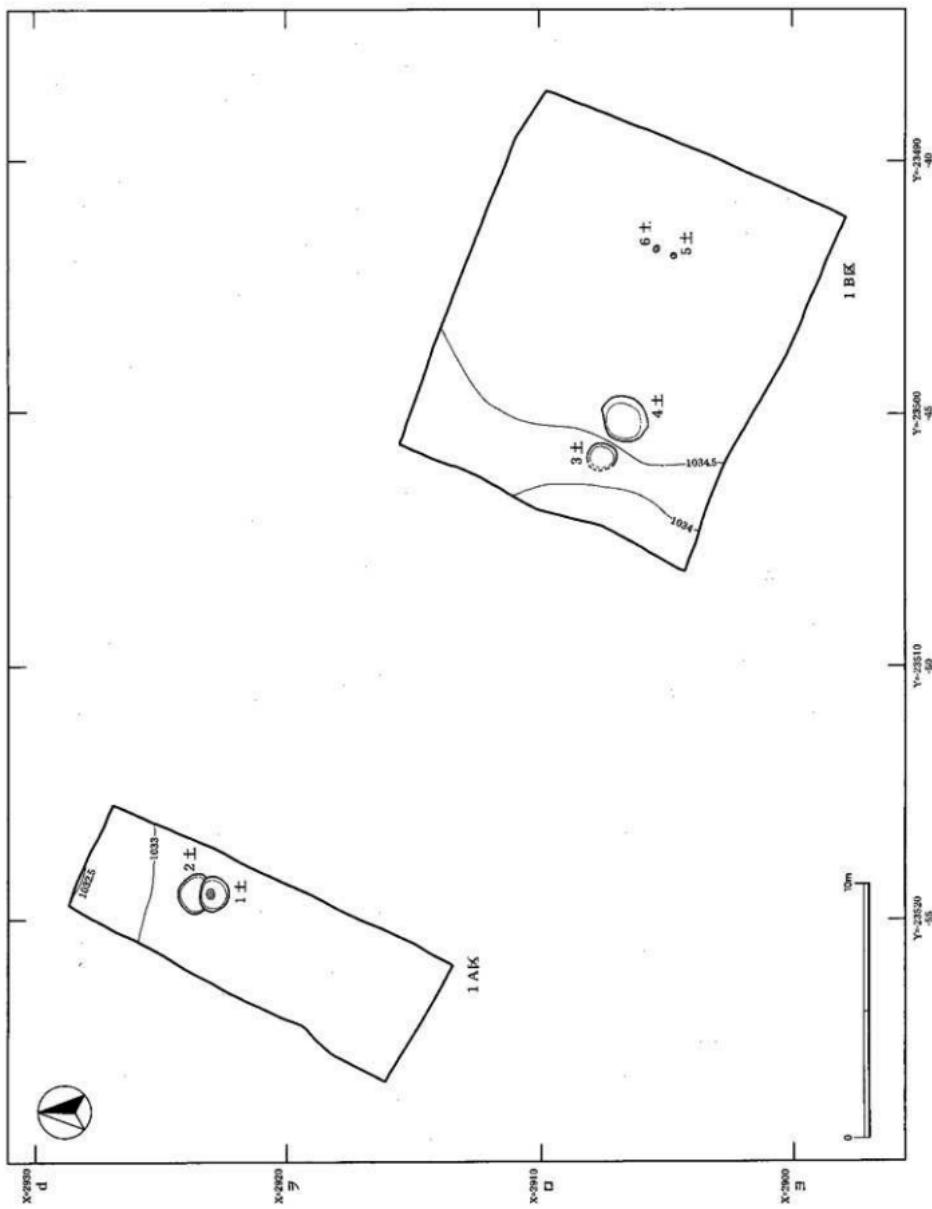
ば、2つの調査区を別の担当者が同時に調査をした年度があり、次々と検出される土坑に対し即座に番号を付す必要があったためである。

整理作業時に、造構番号を変更したものと新たに番号を付したものがある。ここでは住居址に限り記しておく。3 a・3 b・3 c住とした住居址は、3 a住を3住、3 b住を23住、3 c住を24住に変更している。また、11住に重複する住居址を25住、2・17住に重複する住居址を26住と、新たに番号を付している。

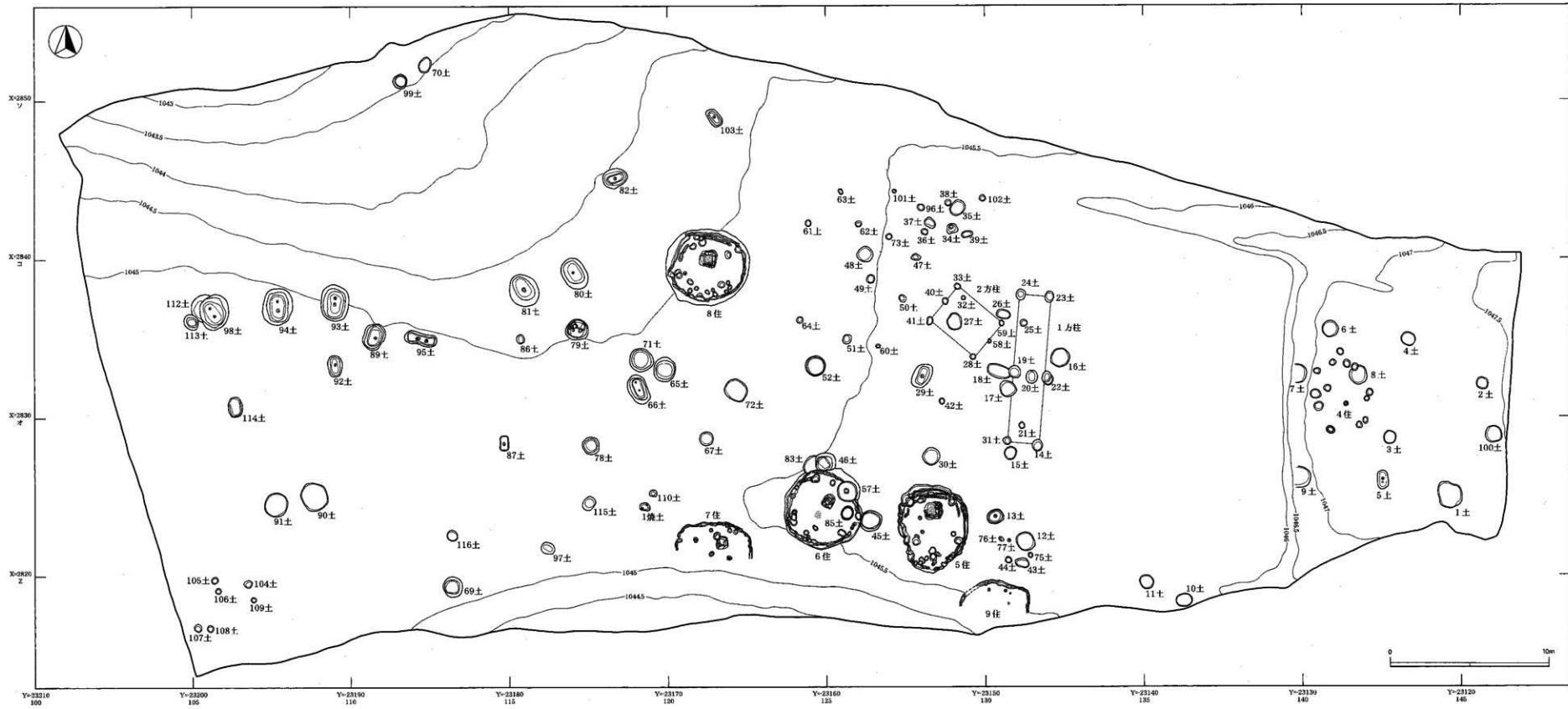
住居址に伴う柱穴および推測されるものには、住居址ごとにピット番号（P1、P2～）を付している。しかし、壁（掘方）が検出されなかった住居址は、柱穴のすべてを特定することができていない。特に住居址の重複が著しい3区の斜面には、整理作業を経た今でも所属不明の柱穴が多数存在する。数が多くて特定できないもの（23・24住の出入口部付近）、重複する住居址のどちらともとれる位置にあるものは（2・17・26住）、該当するすべての住居址番号をピット番号に冠している（例：23・24-P1）。



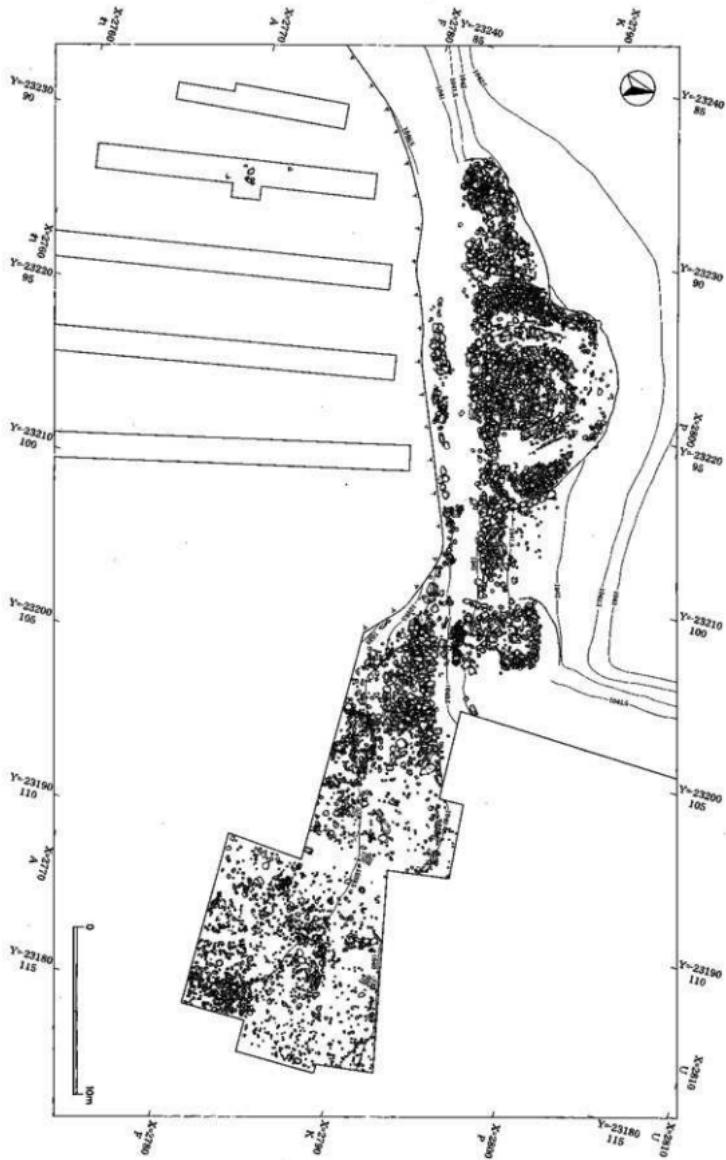
第2図 1C区造構全体図 (1/200)



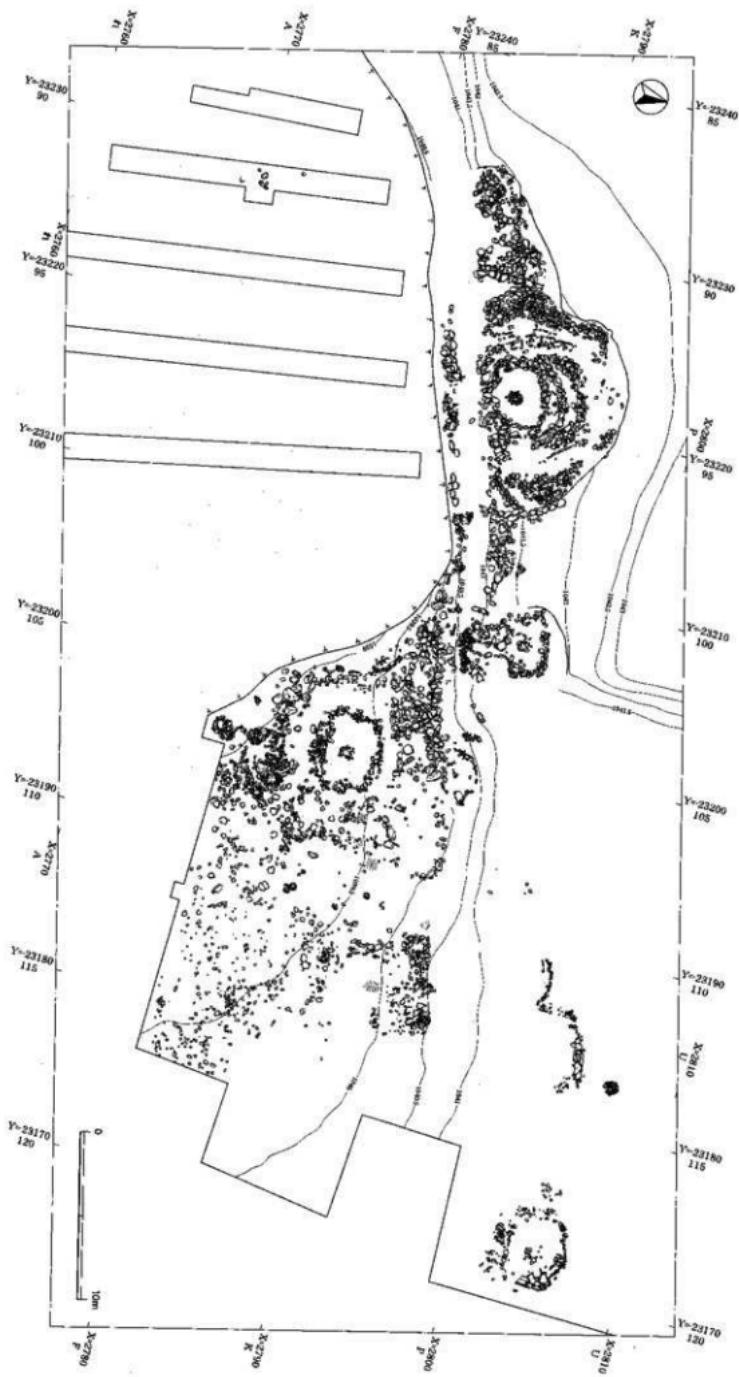
第3図 1A・1B区遺構全体図 (1/200)



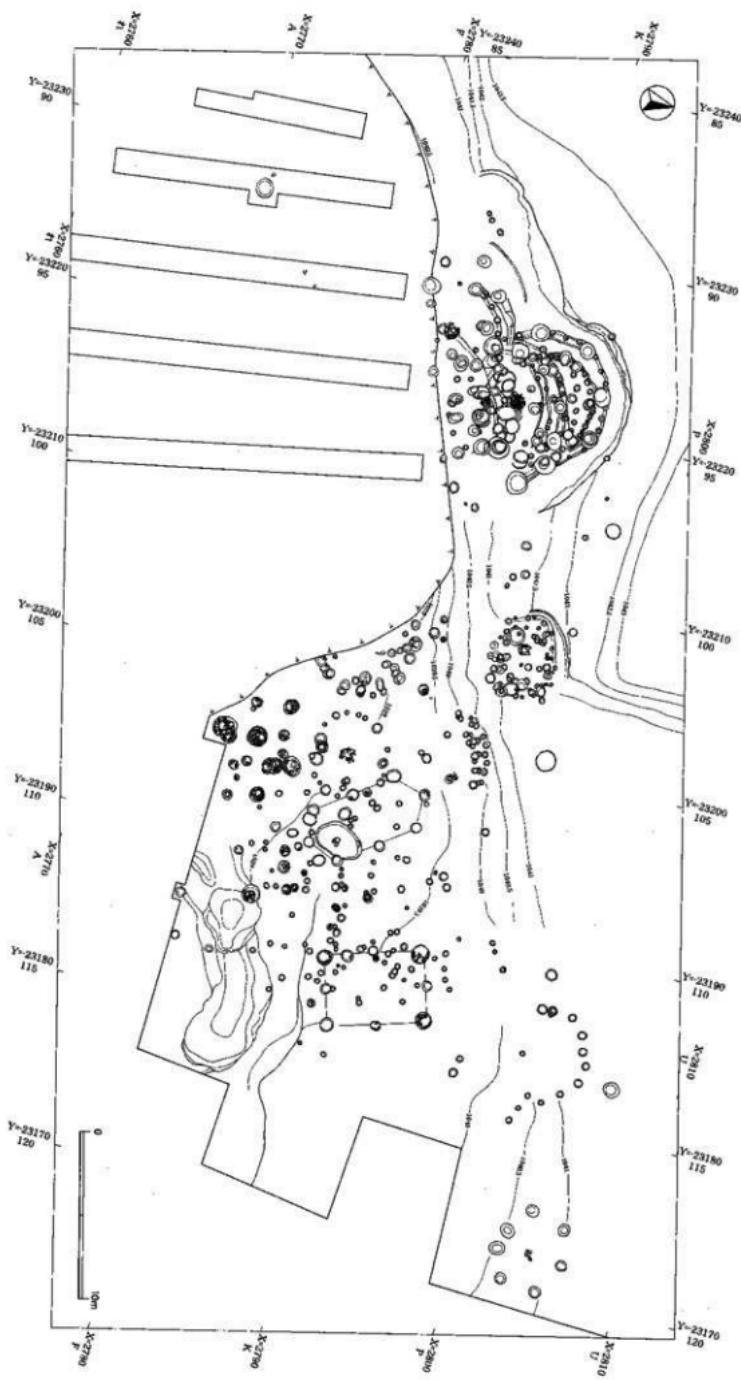
第4図 2区遺構全体図(1/200)



第5図 3区画（上面）検出状態（1/200）

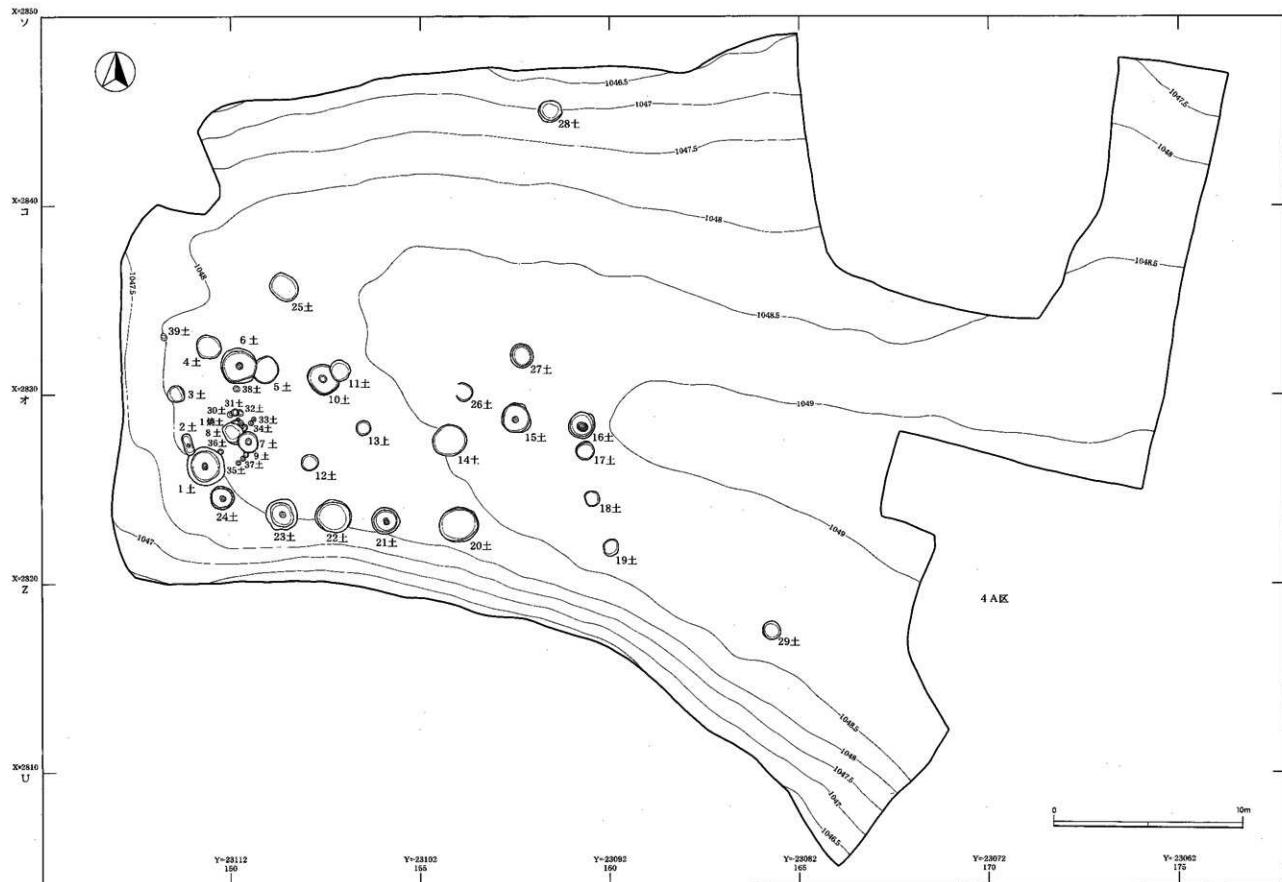


第6図 3区検（下面）検出状態 (1/200)

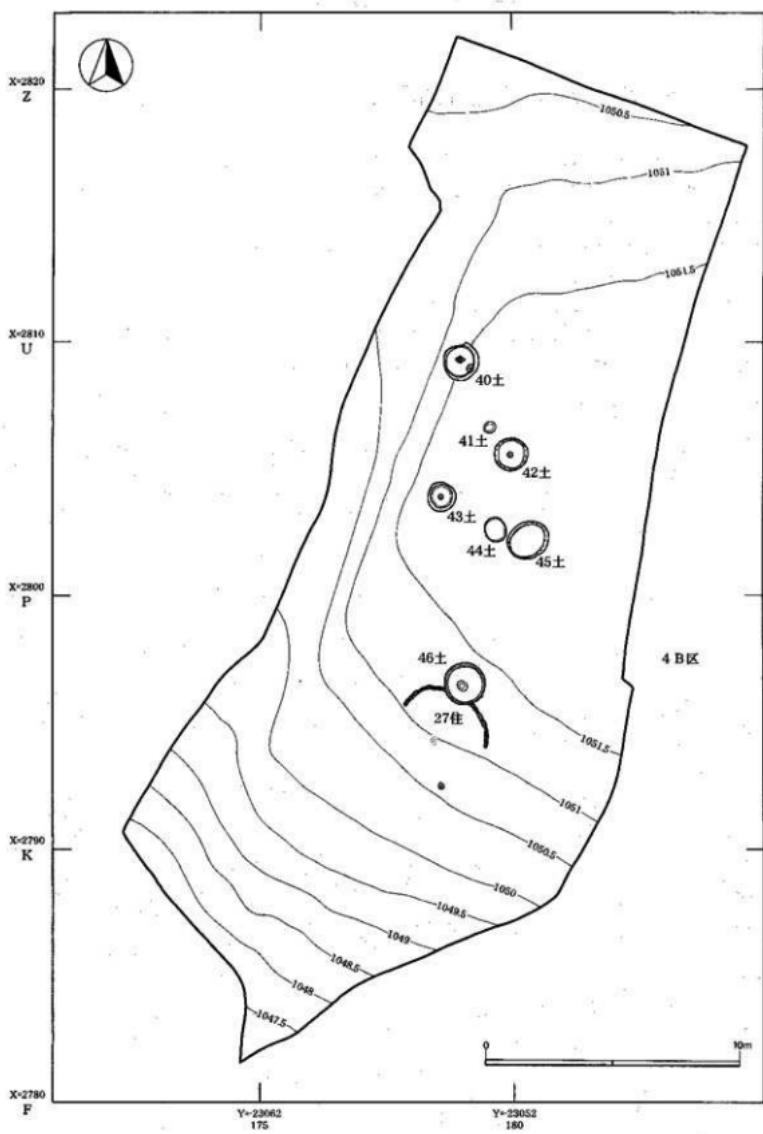


第7図 3区埋葬全体図 (1/200)





第8図 4 A区遺構全体図 (1/200)



第9図 4B区遺構全体図 (1/200)

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

聖石遺跡（遺跡番号51）は長野県茅野市北山芹ヶ沢に所在する。八ヶ岳西麓の裾野に位置し、角名川・渋川に沿った東西に長い細尾根状の台地に立地する。JR茅野駅から北東方面へ約9kmの位置にあり、遺跡内の標高は1031～1051mを測る。

遺跡名は遺跡内にある安山岩の巨石「ヒジリ石」に由来する。遺跡内に畑をもつ地権者によると、「ヒジリ石」は台地平坦面最大幅部の中央付近にあり、昭和40年前後の開田工事の際に台地の南縁辺に沿った道路に接する畑に移されたとのことである。この石は芹ヶ沢区の七石の一つとされている。

台地の平坦面と南北の斜面は、縄文時代から現在に至るまで自然と人工の地形変更を受けている。平坦面の大部分は開田工事でひな壇状に造成され、土手とその法尻周囲はローム層、または下位の火碎流堆積物層



第10図 遺跡の位置 (1/75,000)

まで削り取られている。南北の斜面は河川の浸食や凍結による自然崩落に加え、開田工事と道路建設時の切り盛りにより、平坦面以上に複雑な地形となる。斜面は流失や削平により崖と言い換えられる箇所が多く、相当数の遺構が失われていると考えられる。逆に盛土された部分は遺構の保存状態が極めて良い。市教育委員会が調査した南側斜面から低地では（3区）、縄文時代の地表面とみられる面が広範囲に検出されている。

遺跡内における台地平坦面の最大幅は南北100m弱を測る。ここには直径10m程の遺構の空白域「中央広場」を囲み縄文時代中期後半の環状集落が形成されている（平成10年度県埋文センター調査区）。台地は西側に向かい徐々に幅を狭めながら芦ヶ沢の集落へ続く。東側へは一旦「ベッタ沢」の漫食により、遺跡内で最も台地の幅を狭めるが（4AK）、急激に幅を増して縄文時代中期の著名な長峯遺跡（遺跡番号50、平成11・12年度県埋文化財センター調査）へ至る。

「ベッタ沢」は八ヶ岳西麓の谷の中でも特に幅が広く、谷の傾斜はなだらかである。谷中には台地に平行する微高地が數条ある。上流から供給された土石流の堆積による地形と考えられ、その一つにベッタ沢遺跡がある。調査を開始した頃、谷中には湧水点や湿地があり、セリ・フキ・ナズナなどの山菜が採集できた。また、冬期になると水場に集まる鳥獣を狙う獵師の姿が見受けられた。縄文時代においても「ベッタ沢」は、飲料水や食糧を賄う上で絶好の場所であったと考えられる。

## 第2節 周辺の遺跡

聖石遺跡の周辺には、大小の遺跡が群在する。この地域は農業基盤整備事業により多くの遺跡が発掘調査され、個々の遺跡の内容が明らかにされてきた。遺跡群を研究する上で最適な資料を有する地域となっている。

周辺の遺跡として同一台地の東に長峯遺跡（縄文時代中期～後期）、長峯遺跡からベッタ沢を見下ろした微高地にベッタ沢遺跡（縄文時代中期～後期）がある。ベッタ沢を挟み対峙する台地に北山菖蒲沢A遺跡とB遺跡（縄文時代前期～中期）などがあり、ベッタ沢を遡ると町道下遺跡（縄文時代中期）がある。



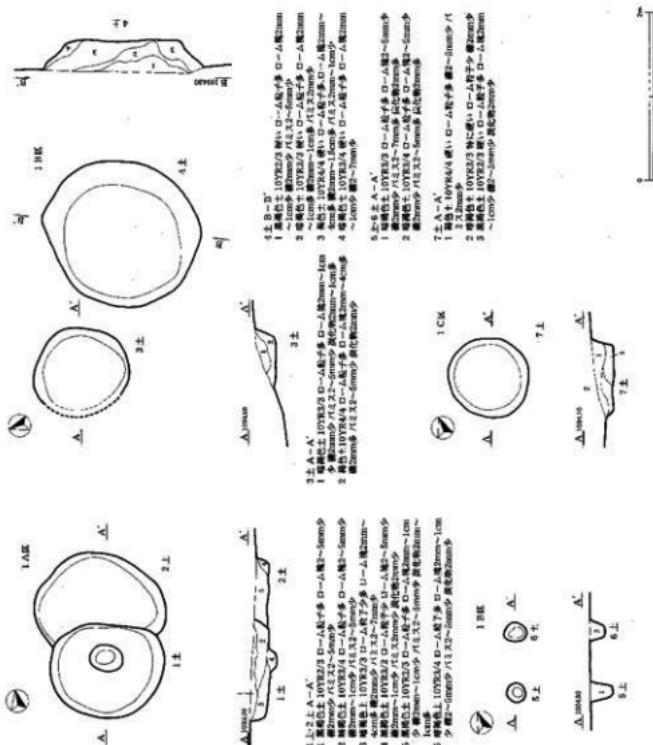
第11図 周辺の遺跡 (1/7,500)

## 第III章 遺構と遺物

### 第1節 1区の遺構と遺物

#### (1) 概要

3地点から縄文時代と考えられる土坑が7基検出された(第12図)。時代を特定した根据は覆土の色調と締まり具合からである。1A区と1B区の土坑は、県埋蔵文化財センター調査区から西へ大きく外れる上に出土遺物もなく、時間的・空間的な位置づけが難しい。形態から1~4土は貯蔵穴と考えられ、5・6土はいわゆる「ピット」である。1C区の土坑も出土遺物がないため時期が特定できないが、位置からみて県埋蔵文化財センター調査区の遺構群に含まれるものである。



第12図 1区土坑 (1/60)

## 第2節 2区の遺構と遺物

### (1) 概要

検出された遺構は住居址・方形柱穴列・土坑・焼土址である。住居址は6軒で5軒は縄文時代である。時期は縄文時代中期後半が4軒、後期前半が1軒、不明が1軒である。方形柱穴列は2基で、出土遺物からみて縄文時代と考えられる。土坑は107基検出されている。出土した土器が縄文土器に限られるため、土器を伴う土坑は縄文時代と判断される。また、出土遺物がない土坑も、覆土の色調と締まり具合などから縄文時代と考えてよいと思われる。形態・覆土・出土遺物などから、墓坑・貯蔵穴・落し穴といった用途を推測できるものがある。墓坑と考えられるものは18・79土など、貯蔵穴と考えられるものは13・65・71土など、落し穴と考えられるものは81・93・94土などである。焼土址は1基である(第21図)。現地で68土とされたものを改名した。平面形が不整で掘り込みが浅く、当初から火を焚く目的で掘り込んだと考えられることによる。

遺物は縄文時代中期後半から後期前半の土器と石器である。土器は図上復元を含め、復元可能なものが約10個体ある。石器は凹石・磨石・敲石・打製石斧・台石などがある。

### (2) 縄文時代

#### ①住居址

##### 4号住居址(第13図)

位 置：エ～カー140～142グリッドに位置する。

重複関係：P13が8土と重複する。P13が新である。

検出状態：遺構検出面はローム層である。開田工事に伴う客土を除去し、若干掘り下げて柱穴を検出した。

形態・規模：平面形態は柱穴配置からみて主軸が短い楕円形と考えられる。平面規模は柱穴の外縁間で、主軸長約4m、副軸長約5mを測る。主軸方向はN-81°-Eである。

覆 土：住居址本体の覆土は不明である。

壁：検出なし。

周 溝：検出なし。

床：面：検出なし。炉址の深さと柱穴覆土の色調からみて、黒色土層から黒褐色土層内にあったと考えられる。

炉 址：埋甕炉であるが、本来炉石を伴っていた可能性がある。甕の胴部下半から底部が残存する。土圧により潰れて出土した。焼土は残存していない。位置は主軸線から南へずれている。

柱 穴：13基にピット番号を付したが、同時存在した柱穴は7基と考えられる(1-P1・2、2-P3・4、3-P5、4-P6、5-P7、6-P9、7-P10・13)。したがって、P8・11・12は本址に伴わないピットの可能性が高い。出入口部の対ピットはP6とP7である。P1・2、P3・4、P10・13はそれぞれ柱の建て替えと考えられる。

付 縫 施 設：なし。

出 土 遺 物：P4とP6から大形の土器片が出土している。

時 期：柱穴から出土した土器からみて、堀之内I式併行と考えられる。

5号住居址（第14図）

位 置：Z～イー-127～129グリッドに位置する。

重複関係：重複なし。

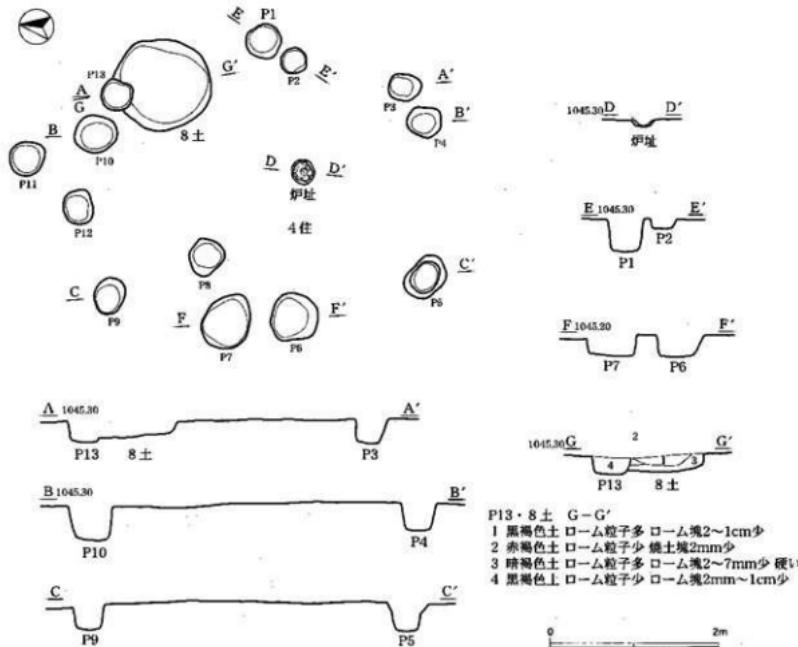
検出状態：遺構検出面はローム漸移層である。

形態・規模：平面形態は出入口部が張り出す隅丸五角形を呈す。平面規模は主軸長5.5m、副軸長4.4mを測る。主軸方向はN-1°-Eである。

覆 土：炉址・柱穴・埋甕を含め、10層に分層された（E-E'）。暗褐色土が主体である。

壁：立ち上がりは南壁と北壁で不明瞭、他は比較的明瞭である。壁の残存高は床上10～20cm前後を測る。

周溝：北壁で3本、東壁と西壁で部分的に2本、南壁で1本の周溝が検出された。北壁内側の2本は貼床されている。

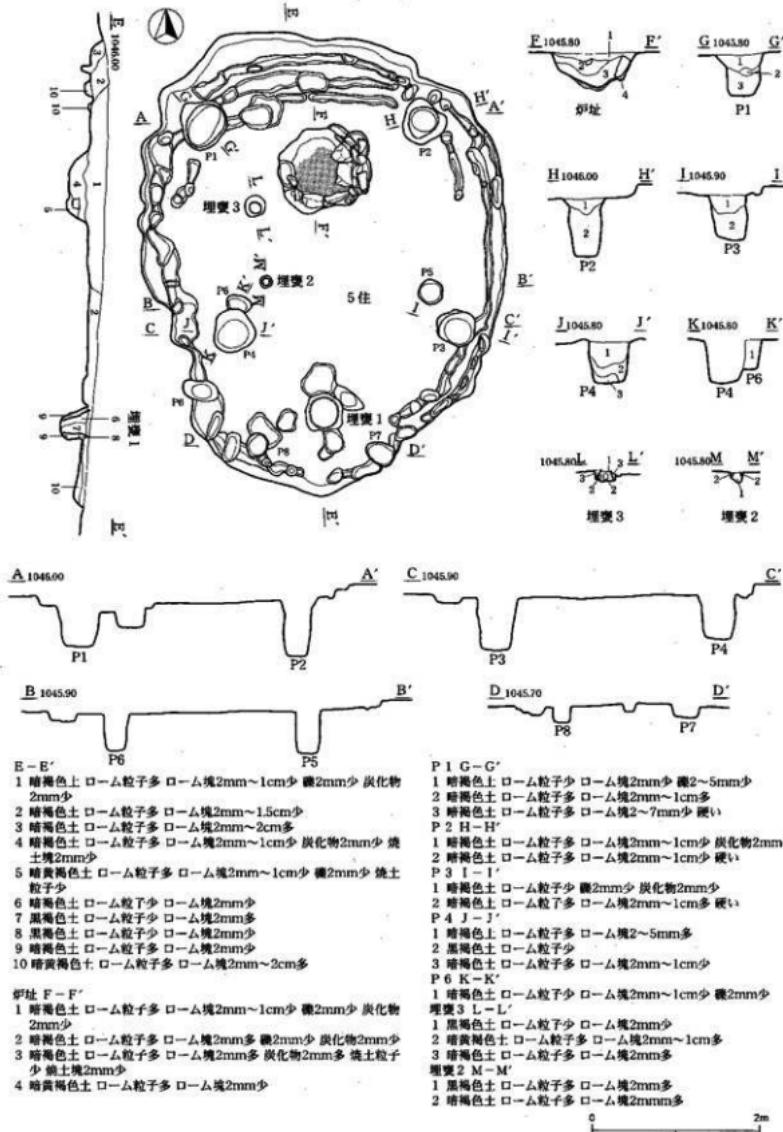


第13図 2区4号住居址、8号土坑 (1/60)

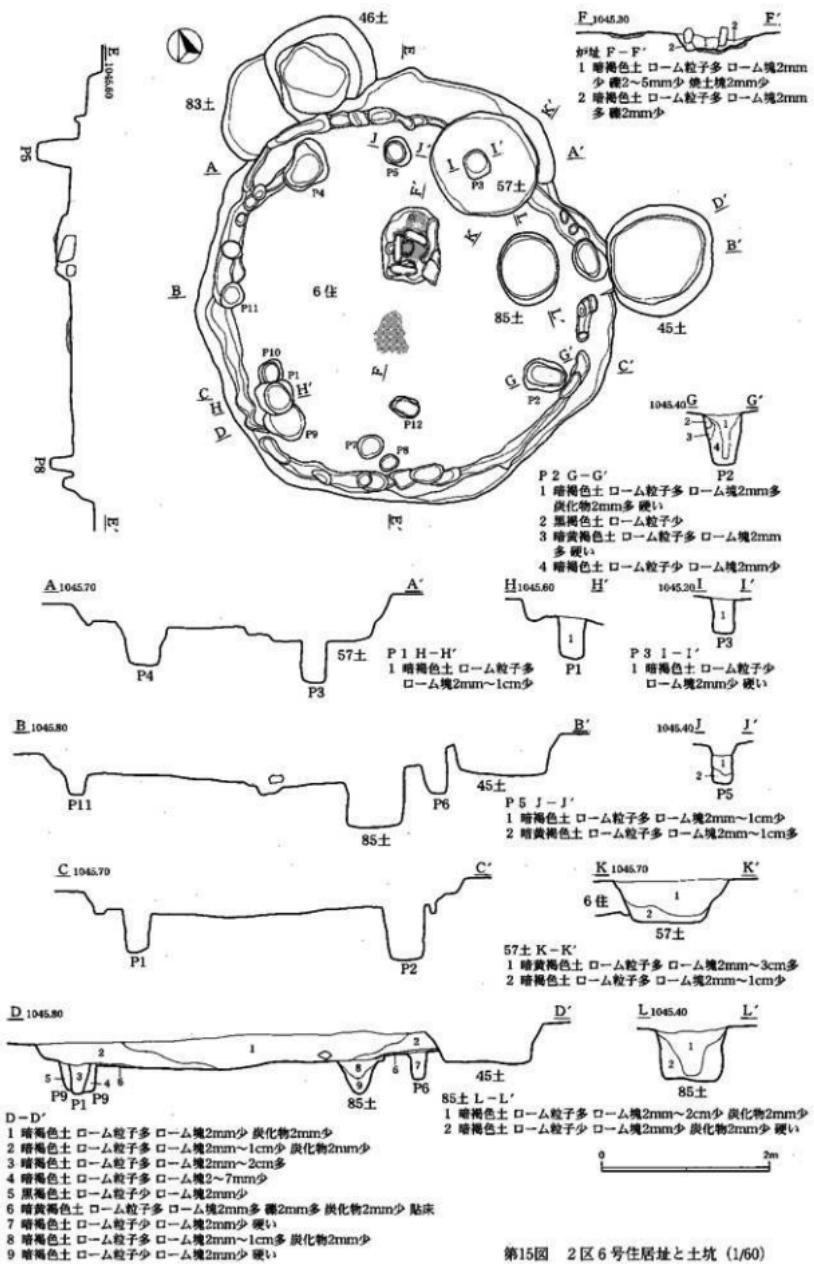
- 床** 面：北から南に緩傾斜する。主柱穴に囲まれた内側が特に硬い。出入口部付近が貼床される。
- 炉** 址：右圓炉である。北壁と西壁の炉石が抜き取られている。火床の焼土は明瞭である。
- 柱** 穴：8基の柱穴にピット番号を付しが、同時存在した柱穴は6基と考えられる（1-P1、2-P2、3-P3・5、4-P7、5-P8、6-P4・6）。P3とP5、P4とP6は同じ柱穴の掘り直しで、ともに内側の柱穴（P5・6）が貼床されていた。P7とP8は対ピットとみられる。深さは他の柱穴の半分以下である。
- 付属施設**：3基の埋甕を伴う。埋甕1は出入口部、埋甕2は住居址中央のやや西、埋甕3は炉址の西脇にある。埋甕1は正位に埋設される。口縁部から胴部下半が残存し、底部が抜かれている。口唇部の内・外端が剥落しているが意図的な打ち欠きであるのか判断に迷う。埋甕2は逆位に埋設される。胴部上半と口縁部の一部が残存し、他は打ち欠かれている。埋甕3は逆位に埋設される。口縁部から胴部上半が残存し、他は打ち欠かれている。
- 出土遺物**：覆土から約60点の土器片が出土している。
- 備考**：周溝が複数本あり内側の周溝が貼床されていたこと、柱穴に位置を変えた掘り直しがあり内側が貼床されていたことなどから、最低1回の拡張があったと考えられる。
- 時期**：3基の埋甕と覆土出土の土器からみて、曾利IV式併行と考えられる。

#### 6号住居址（第15図）

- 位置**：アヘー124・125グリッドに位置する。
- 重複関係**：45・46・57・85土と重複する。45・46・57上に切られ、85土を貼床する。
- 検出状態**：造構検出面はローム漸移層である。
- 形態・規模**：平面形態は円形を基調とするが、北西の櫛が張り出している。出入口部は炉址の位置と柱穴配置からみて、P7・8・12付近と考えられる。平面規模は主軸長5.1m、副軸長が5.0mを測る。主軸方向はN-27°-Eである。
- 覆土**：柱穴を含め、7層に分層された（D-D'）。1・2層はレンズ状の堆積であり、自然堆積と考えられる。
- 壁**：立ち上がりは奥壁を除き明瞭である。壁の残存高は床上15~25cm前後を測る。
- 周溝**：ほぼ全周する。ピット番号は付していないが、出入口部とP2脇の周溝内に床面からの掘削深度が30cmを超す小穴がある。
- 床** 面：炉へ向かい緩傾斜する。主柱穴に囲まれた内側が特に硬い。出入口部付近が貼床される。
- 炉** 址：板状の礫を4辺に立てた石圓炉である。東側の炉石が外側へ倒れている。掘方は石圓に対してもひと回り大きく、火床の焼土が石圓から奥壁側にずれている。奥壁側から出入口部側への炉址のつくり替えと考えられる。
- 柱** 穴：12基にピット番号を付したが、同時存在した柱穴は8基と考えられる（1-P1・9・10、2-P2、3-P3、4-P4、5-P5、6-P6、7-P7・8・12、8-P11）。P1・9・10およびP7・8・12の新旧関係は不明であるが、柱の建て替えに伴う柱穴の掘り直しと考えられる。P2で柱痕が確認されている。
- 付属施設**：主軸線上に不整形の焼土跡が検出された。掘方はない。
- 出土遺物**：覆土から約200点の土器片が出土している。時期は曾利IV式とV式で、V式が多い。



第14図 2区5号住居址 (1/60)



第15図 2区6号住居址と土坑 (1/60)

**備** 考：床下20~25cm間に人頭大の礫が散在する。礫は産地化（2層堆積後）した住居址内に投棄されたものと考えられる。

**時** 期：曾利IV式とV式の土器片が混在するが、V式併行と考えておきたい。

#### 7号住居址（第16図）

**位** 置：Z・A-A' 120~122グリッドに位置する。

**重複関係**：重複なし。

**検出状態**：遺構検出面はローム層である。台地の南側肩部に位置し、約1/2が流失している。

**形態・規模**：平面形態は不明である。出入口部は炉址と壁の位置関係からみて南側と考えられる。平面規模は東西長4.8mを測る。主軸方向はN-10°-E前後と考えられる。

**覆** 土：炉址を含め、3層に分層された（B-B'）。

**壁**：立ち上がりは不明瞭である。礫の残存高は床上5cm前後を測る。

**溝**：小穴が連続する周溝で縦じて浅く不明瞭である。

**床**：面は南側に緩傾斜する。火碎泥堆積物層の上面となり荒れている。

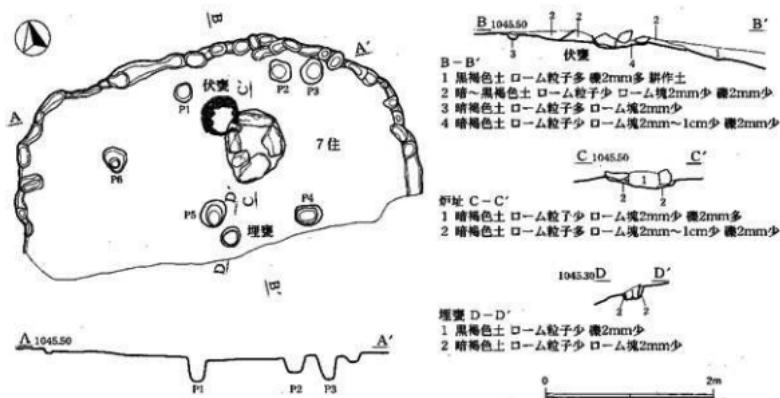
**炉**：板状の礫を4辺に据えた石窯炉である。出入口部側の礫は床面に対し平らに据えられる。

**柱**：穴：6基にピット番号を付したが、位置と深さからみて柱穴であるのか疑問が残る。

**付属施設**：伏壠と埋壠が各1基ある。伏壠は石窯炉の北西角に接して床面に置かれている。胴部中位から下半部が打ち欠かされている。埋壠は炉址の南にある。正位に埋設され、口縁部から胴部中位が残存する。

**出土遺物**：覆土から約20点の土器片が出土した。

**時期**：伏壠と埋壠の時期からみて、曾利V式併行と考えられる。



第16図 2区7号住居址 (1/60)

8号住居址（第17図）

位 置：ケ～コー120～122グリッドに位置する。

重複関係：重複はなし。

検出状態：多量の土器片と焼土の検出から住居址であることが確認された。遺構検出面は他の住居址より高く、暗褐色土層である。

形態・規模：平面形態は円形である。出入口部は炉址の位置と柱穴配置からみて、P7とP16およびP8とP9の間と考えられる。平面規模は主軸長4.8m、副軸長が5.2mを測る。主軸方向はN-15°-Eである。

覆 土：柱穴を含め、11層に分層された（G-G'）。炉址の北側（奥壁側）を中心に、床上5～10cmに焼土層が確認された。焼土の範囲からみて、住居址が窪地化した段階に火焚き行為があつたと考えられる。覆土から大小の礫と一括土器2個体が出土している。住居址内への遺物投棄と考えられる。

壁：立ち上がりは明瞭である。周溝と壁の間には、床面より一段高い幅10～40cm前後の面がある。壁の残存高は床上20～40cm前後を測る。

周 溝：2本ある。外側は全周するが、内側は北壁と西壁に設けられる。2本とも掘方は良好で、深さは平均10cm前後を測る。内側では貼床が確認された。

床 面：炉の周囲と出入口部が皿状に盛み、他より特に硬い。各柱穴から周溝までは貼床される。

炉 址：石圓炉である。焚口部と考えられる南辺に小振りな礫を敷き、他の辺には板状の礫を立てている。西辺の炉石の一部は抜き取られている。火床の焼土は明瞭に残る。

柱 穴：19基にピット番号を付したが、同時存在した柱穴は6基と考えられる（1-P1・2、2-P3・4、3-P7・8、4-P9・16、5-P10～12・17、6-P13～P15・19）。P7・8とP9・16は出入口部の対ピットとみられる。P2・3・10・19では貼床が確認され、P11も覆土からみて貼床されていた可能性がある。それぞれの柱は外側へ向かい建て替えられている可能性が高い。P4で柱痕が確認されている。

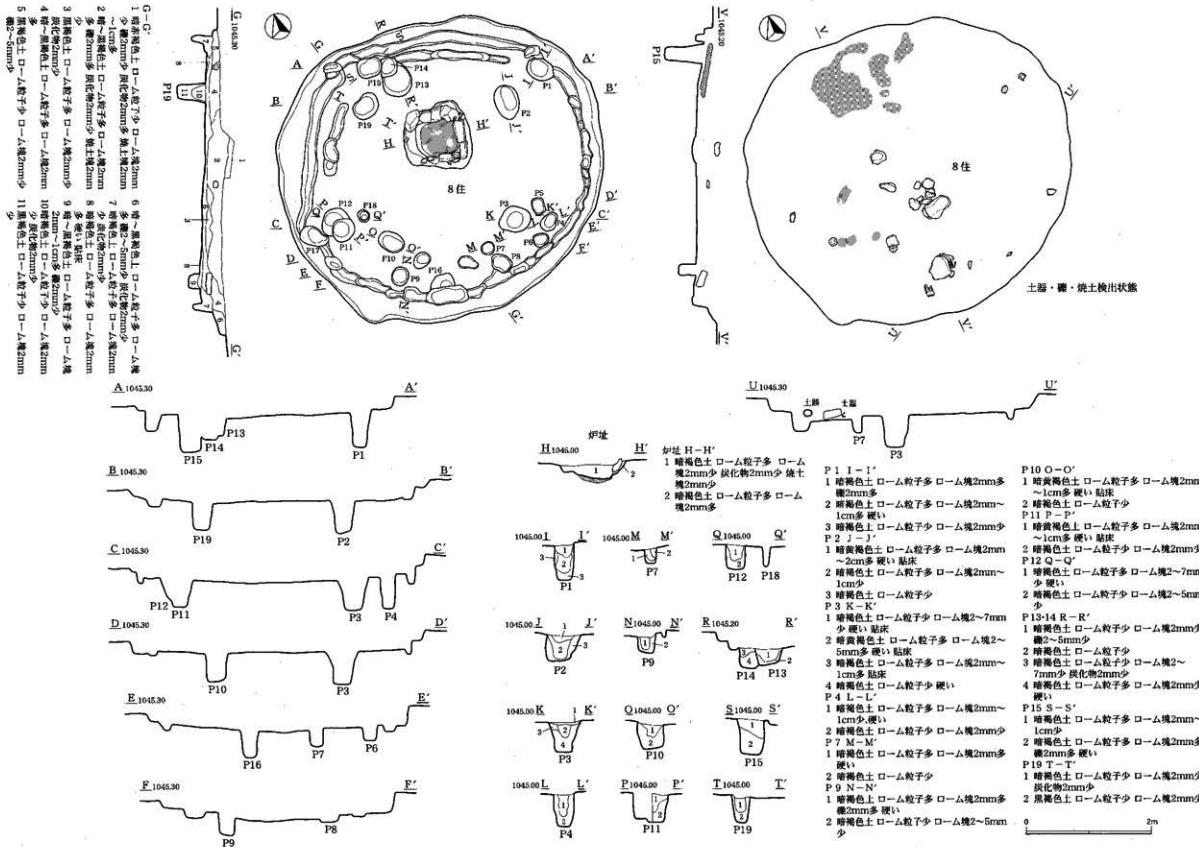
付属施設：なし。

出土遺物：覆土から一括土器2個体と、約200点の土器片が出土している。一括土器の1個体は胴部下半から底部が残存し、もう1個体は底部が抜かれ胴部中位から下半が残存する。

備 考：周溝と柱穴が内側から外側へ掘り直されているため、拡張に伴う住居址の建て替えが考えられる。周溝の本数では1回であるが、柱穴の数では数回の建て替えとなる。

時 期：覆土から出土した一括土器および土器片からみて、曾利Ⅱ式併行と考えられる。





第17圖 2區8號住居址 (1/60)

9号住居址（第18図）

位 置：Y-129~131グリッドに位置する。

重複関係：重複なし。

検出状態：遺構検出面はローム層である。台地の南側肩部に位置し、1/2以上が流失している。

形態・規模：平面形態は不明である。平面規模は東西長4.2mを測る。

覆 土：暗褐色土の單一層である。

壁：立ち上がりは西側で明瞭、他では不明瞭である。壁の残存高は床上5~20cm前後を測る。

周 溝：小穴を伴う周溝である。壁と同様に西側で明瞭、他は不明瞭である。

床 面：南側に傾斜する。火碎流堆積物層の上面となり荒れている。

炉 址：検出なし。

柱 穴：底面から4基の小穴が検出され圓化したが、規模・位置などからみて柱穴とは考えられない。そのためにピット番号は付していない。

付 屬施設：なし。

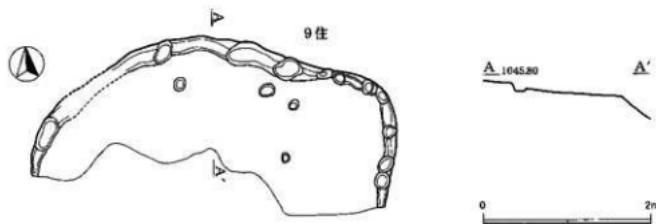
出土遺物：なし。

備 考：炉址は失われたとしても、主柱穴となり得るピットが見当たらない。このような状態から住居址としてよいものか疑問であるが、現場で住居址番号が付されたことを重視し、住居址として報告する。

時 期：不明である。

②方形柱穴列

方形柱穴列の周間に直径30~80cm前後の柱穴状の土坑が集中しているが、第I章第4節で記したとおり、6基以上の組み合わせで長軸・短軸とも柱筋が通る2基に番号を付した。



第18図 2区9号住居址 (1/60)

1号方形柱穴列（第19図）

位 置：エ～クー130～132グリッドに位置する。

重複関係：各柱穴に重複する土坑と、柱穴を結んだ範囲にかかる土坑に、17・18・26・25土がある。

19土と18土は、19土が切られている。20土は長軸線上に位置し、19土と22土を結ぶ線上にも位置するため、本址に伴う柱穴と考えておく。

検出状態：遺構検出面はローム層である。

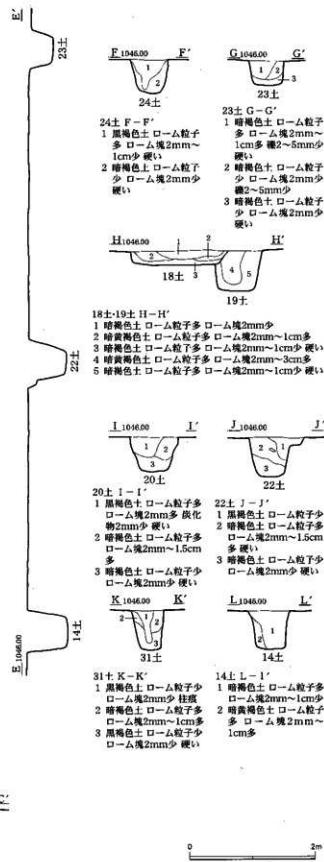
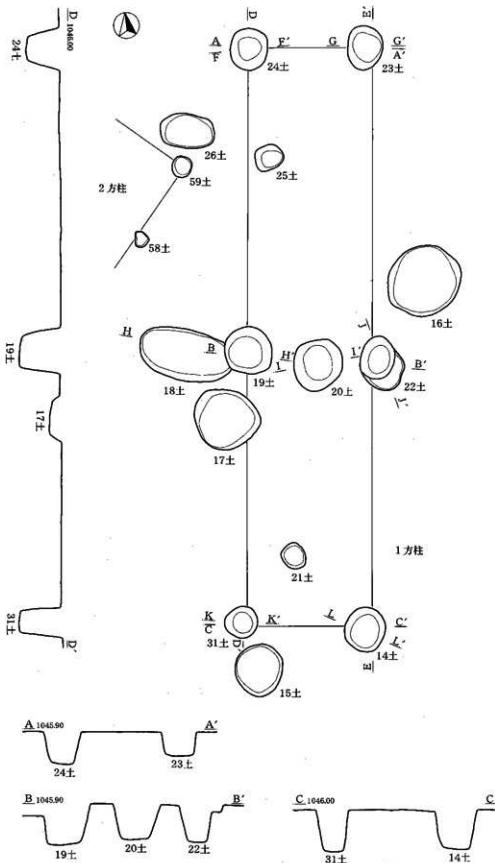
形態・規模：柱穴配置は長方形を呈す。柱間は長軸2間、短軸は2間と1間である。平面規模は長軸長9.3m、短軸長が2.0mを測る。長軸方向はN-6°-Eである。

柱 穴：7基で構成される。柱穴の規模は直径50～80cmほどである。22土の南側は段掘りとなる。31土で柱痕が確認されている。

付属施設：なし。

出土遺物：20土から土器が1点出土している。矢羽状の条線文が確認される。

時期：20土の土器は曾利Ⅲ式以降と考えられる。また、19土を切る18土から出土した土器は堀之内式併行の可能性がある。以上から曾利Ⅲ式以降と考えておく。



第19図 2区1号方形柱穴と周辺の土坑(1/60)

2号方形柱穴列（第20図）

位 置：カ～ケー-128～130グリッドに位置する。

重複関係：柱穴を結んだ範囲にある土坑に、27土と37土がある。

検出状態：遺構検出面はローム層である。

形態・規模：柱穴配置は長方形で、柱間は長軸1間、短軸2間である。長軸線上の40土と58土は「棟持柱」と考えられる。平面規模は長軸長3.6m、短軸長が2.8mを測る。長軸方向はN-49°-Wである。

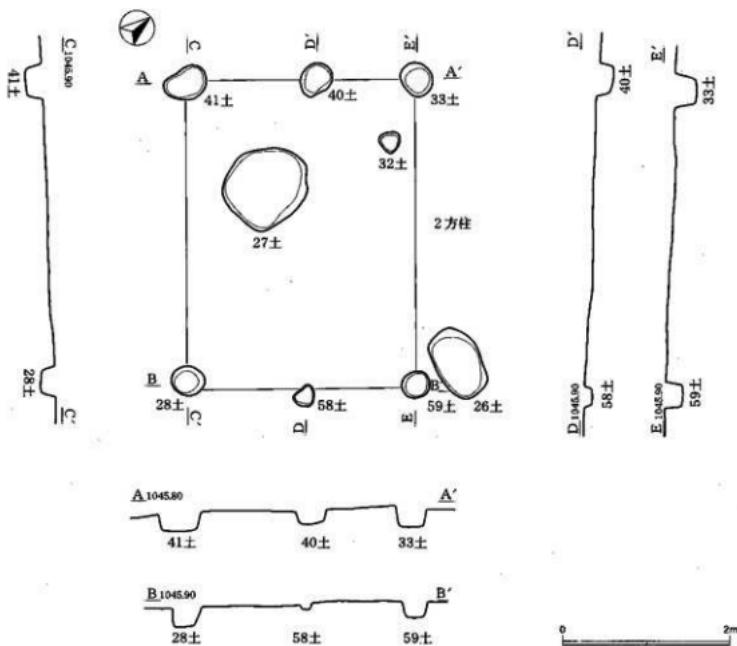
覆 土：暗褐色土ベースである。

柱 穴：6基で構成される。柱穴の規模は直径25～50cmほどである。

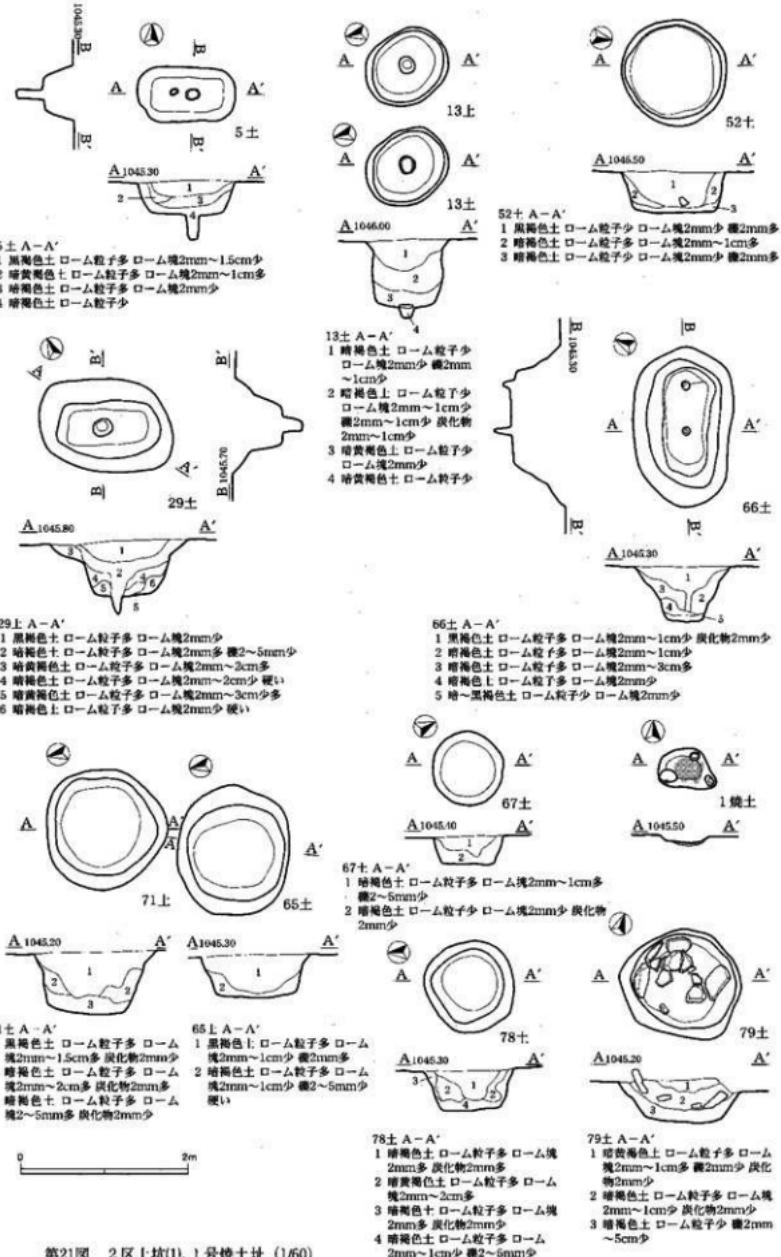
付属施設：なし。

出土遺物：なし。

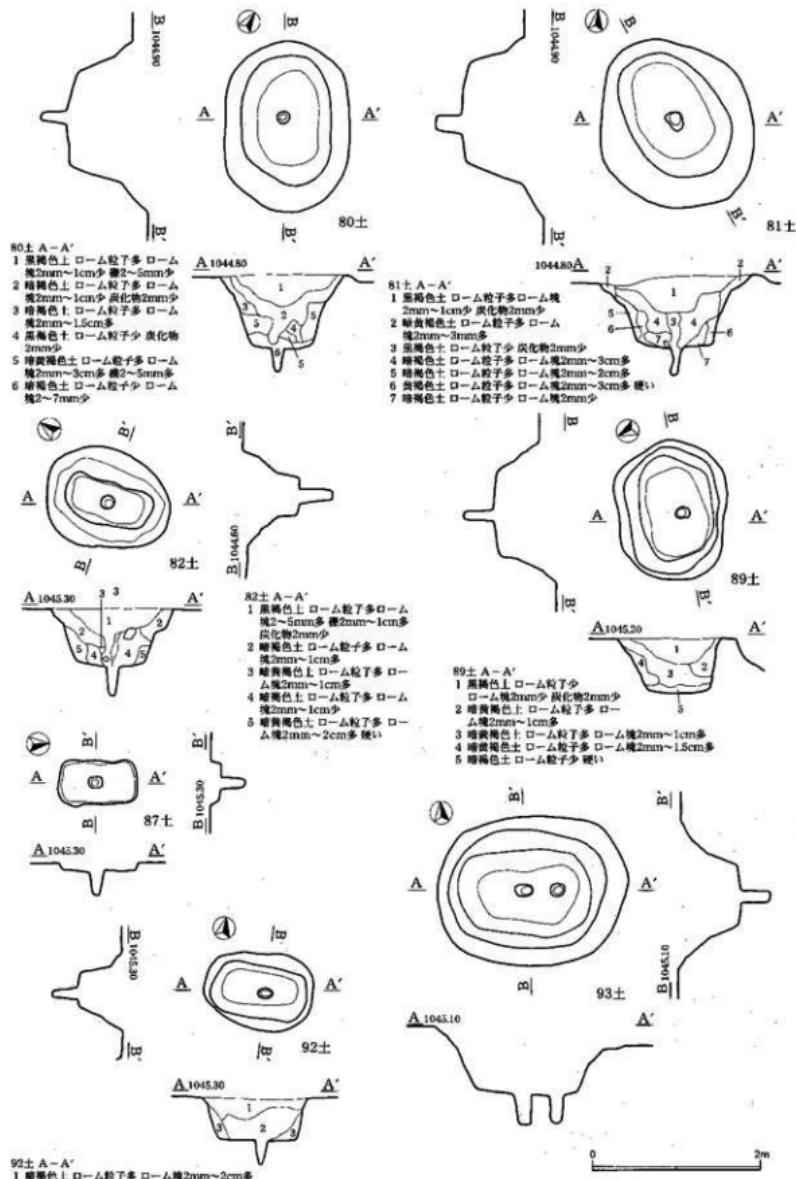
時期：出土遺物がないため時期は特定できないが、覆土からみて縄文時代と考えられる。



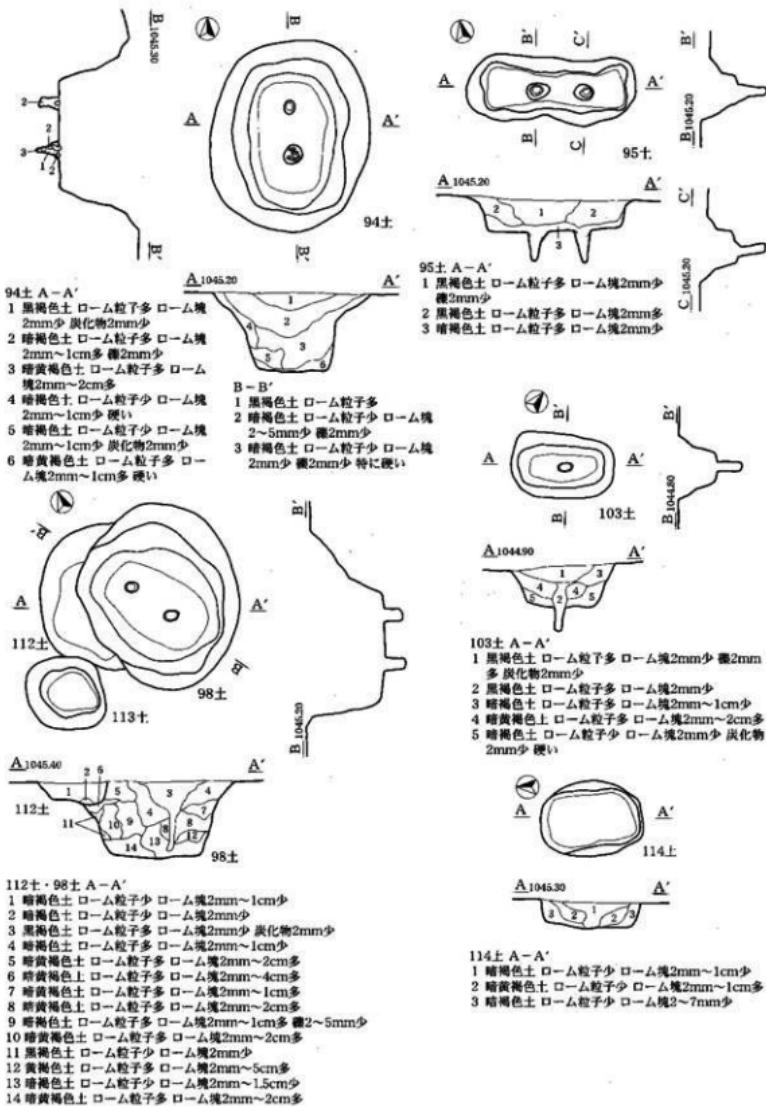
第20図 2区 2号方形柱穴と周辺の土坑 (1/60)



第21図 2区 I坑(1)、1号焼土址 (1/60)



第22図 2区土坑(2) (1/60)



0 2m

第23図 2区土坑(3) (1/60)

### 第3節 3区の遺構と遺物

#### (1) 概要

3区の原地形は開田工事や道路建設により大きく改変されている。残存する旧地形に遺構の位置と検出レベルを重ねて旧地形を推測すると、台地はベッタ沢に面して湾曲し、斜面はベッタ沢へ向かい緩やかに傾斜する地形となる。ベッタ沢から聖石遺跡の台地平坦面に上がるルートを推測するならば、3区が最も適していると言えよう。

3区の報告では調査区内を「斜面」と「低地」で呼び分けたい。その境界は、6配石の長軸線を基軸とし、東は21住、西は開田工事で弓なりに削平された法尻を結ぶ線付近とする。推測される旧斜面は、傾斜の急な斜面と平坦面に近い斜面からなり、その変換点は「斜面」と「低地」の境界付近にあると考えられる。また、急な斜面に住居址と配石・列石、平坦面に近い斜面に方形柱穴列や土坑などが構築され、境界を境に構築される遺構の種類に違いがみられる。地形の変換点を空間利用の境界に利用している可能性があり、この線を重要視したいためである。

3区では3つの時代の遺構と遺物が検出されている。時代ごとに概要を記すが、縄文時代は中期と後期にわけて記す。なお、3区の遺物整理は作業の途上にあり、出土遺物を報告することができない。

#### (2) 旧石器時代

斜面、12住付近からナイフ形石器が1点出土している。覆土に混入したものである。

#### (3) 縄文時代

##### 中期

掘方を作った遺構は検出されていないが、該期の土器が調査区西側の斜面と低地から出土している。

斜面は3・12住などの敷石住居址が繰り返し建て替えられた地点に出土が集中する。出土層位は敷石住居址床面下の自然堆積層で、中期後半が主体である。復元に至った土器は7個体で、時期は曾利I～IV式併行である。土器縁辺に著しい摩滅痕はなく、台地平坦面からの流れ込み、または投棄と考えられる。

低地は5本の試掘トレンチから出土している。総重量は約19kgを測る。土器の出土量は、谷へ向かい数を増す。斜面直下は開田工事で遺物包含層が削平され、谷へ向かうほど遺物包含層の残りが良いためである。1トレンチの南端では約1.6m<sup>2</sup>の範囲から炭化材とともに土器が集中出土した（2土器集中）。点数は174点、重量3.1kgを測るが、復元に至るものはない。時期は曾利I式からV式併行にはば限定され、後期とみられる土器は僅かに9点である。

各トレンチで出土した土器は縁辺に若干の摩滅があるものの、上流から流れてきたと言えるほど摩滅していない。試掘トレンチ以東の調査地点で、該期の土器の集中出土ではなく、上流（東側）から流れてきた土器ではないと考えられる。台地平坦面に居住していた人々による土器の廃棄と考えられる。3区西側の斜面から低地は土器廃棄場であったと考えられる。

##### 後期

3区の特徴は、遺構の時期が縄文時代後期に限定されることである。後期に入ると生活領域を斜面から低地に広げ、様々な遺構を構築することはすでに各地の後期遺跡で示されているが、八ヶ岳西山麓でその姿が明らかにされたのは初めてのことである。

遺構は敷石住居址、方形柱穴列、土坑、配石・列石、埋設土器、焼土址、黒曜石集積、土器集中があり、

該期にみられる遺構が出揃ったような状態である。また、土器を多量に包含する流路跡や、一括土器を含む包含層（当時の地表面？）が低地で確認されている。

個々の遺構では注目すべき点が多い。斜面を数回に亘って整地しながら配石・列石を伴う敷石住居址を構築する様は、該期の大がかりな土木工事の跡を示す好例である。また、低地には敷石住居址・方形柱穴列・根固めを伴う柱穴群・土器集中などの様々な遺構を構築し、その空間に円石・磨石・石皿・台石（第43図）などの石器が残されている。低地における空間利用のあり方を解明する糸口になるものと考える。

#### (4) 平安時代

住居址1軒である。出土した遺物は土師器壺・黒色土器壺・灰釉陶器瓶・土師器・小型壺・長胴壺である。

##### 敷石住居址について

敷石住居址の各部位の呼称は次のとおりとする。

主 体 部：炉を中心で区画された空間。柄鏡形住居址は柄部を除いた空間。

柄 部：主体部から突出した柄鏡形の柄の部分（例：2・10住）。

連 結 部：主体部と柄部が接する部分。

対ビット：柄部に接する2本の対となる柱穴（例：2-P1・3ほか）。

掘 方：主体部の外側をめぐる床面より一段高い掘り込み（例：2・12住など）。

敷 石：床面に敷かれた平石や板状の礫（例：13・15住など）。

縁 石：壁下または柱穴間に横長の礫を並べ区画した礫（例：12・19住など）。

礎 石：柱穴の底面に置かれた平石や板状の礫（例：12-P1・2ほか）。

敷石住居址は保存状態の良いものが多く、壁体に関わる痕跡を確認できたものがある。2・3・12・23・24住の柱穴周囲の調査で得られた所見を以下にまとめてみる。

①各柱穴の内縁を結ぶ線付近から外側へ、土石混合の硬く締まった土を盛上げるものがある（3・23・24住）。礫の大きさは数cmから10cm前後を測る。

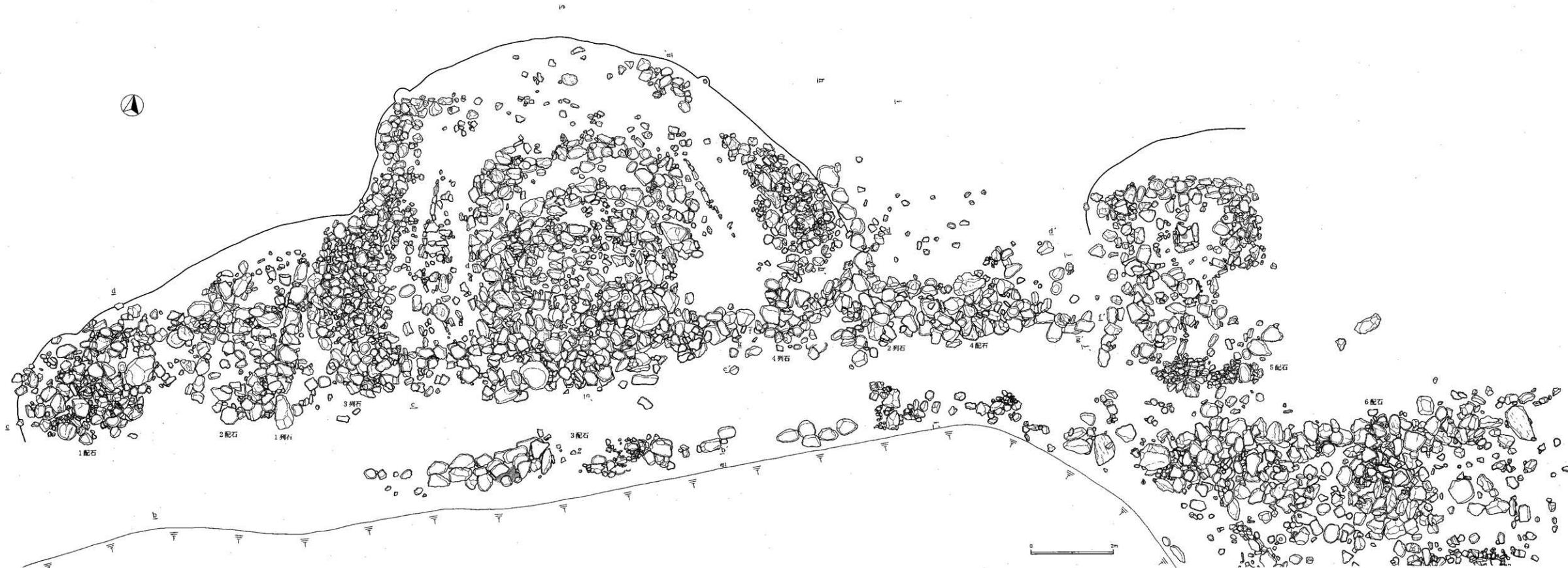
②各柱穴の内縁を結ぶ線付近から外側へ、長さ20cm以上の礫を立てる、また積み上げるものがある（2・3・23・24住）。

③①の上に②をのせ（3・23・24住）、その上に盛土するものがある（3住）。

④掘方に土石混合（所によりローム塊を多量に含む）の硬く締まった土を埋め戻すものがある（2・12住）。また、その土の上に長さ20cm以上の多量の礫を積み上げるものがある（12住）。

⑤掘方に統く平坦面に長さ20cm以上の礫を積み上げ、その上に土石混合の硬く締まった土を盛上げるものがある（12住）。

以上から考えられることは、礫と土で築いた高まりと、柱を組み合わせた壁体の存在である。そこで、柱を結ぶ線に沿い、住居の内と外から礫と上で築いた高まりを礫堤・土堤と呼称し、壁体と捉える。ただし、②は壁体下部の土留めであるのかもしれない。



第24図 3区斜面の構（上面）検出状態（1/60）



第25図 3区斜面の裡（下面）検出状態 (1/60)



第26図 3区斜面の敷石住居群 (1/60)

## ①住居址

### 2号住居址（第27図）

位 置：斜面、J～M-100～102グリッドに位置する。

重複関係：17・26住と重複する。石圍炉が完存し、礫堤が全周すること、また17住の炉址は本址の床面下で検出されたことから、本址が新と考えられる。ただし、重複する2軒の住居址は、本址の主軸線と大きく違わず、僅かに位置をずらして構築されるため、同一住居址による建て替えと考えられる。

検出状態：礫堤が主体部中央に向かい崩れた状態で検出された。東側は開出土事で削平されている。

形態・規模：礫堤を伴う柄鏡形の敷石住居址である。主体部の平面形態は主軸が短い隅丸長方形と考えられる。主体部の平面規模は、主軸長約3.2m、副軸長4m前後と推測される。礫堤に囲まれた主体部の平面規模は、主軸長約2.3m、副軸長約3mを測る。柄部の長さは約1.5m、幅は60～70cmを測る。主軸方向はN-15°～Wである。

柱穴に沿って礫堤がめぐる。主軸線の西側は崩落するが、東側は残りが良い。主体部の壁の外側に、床面より一段高い掘り込みがあり、柱穴の覆土上に酷似する土で埋め戻されている。本址に伴う土堤と考えられるが、古い住居址の土堤を踏襲し利用している可能性がある。

柄部は連続部に敷かれた五角形の敷石から屈曲しながら南へ延びる。柄部を形作る礫は二列に配された柱状の礫と考えられる。

覆 土：礫堤に囲まれた主体部の覆土は4層に分層された。上層の1・2層は黒みの強い黒色土である。ともにローム粒子・塊をほとんど含まないが、2層に地山に入る軽石が多く含まれる。礫は2mm～1cm大である。下層の3・4層は黒褐色土および暗褐色土で、上層との色調差は明瞭である。小石を多量に含み、硬く締まる。礫堤とともに崩れた土堤の可能性がある。

壁：主体部の壁高は、床面から掘方底面まで20～25cmを測る。掘方の壁の残存高は20～30cmを測る。礫堤の残存幅は40cm、残存高は床面60cmまで確認される。土堤を含めた奥壁部の壁体の幅は約130cmを測る。

周 溝：検出なし。

床 面：石围炉周辺が硬い。

敷 石：連続部に五角形に整形された平石が敷かれている。

炉 址：石围炉である。炉石は完存とみられるが、奥壁側の炉石が炉内に倒れ込んでいる。火床の焼土は明瞭である。

柱 穴：本址と17・26住の推測範囲から64基の穴が検出された。長軸1m以上の2基（208・209土）と、推測される柱穴の組み合わせから外れた6基（211・214～218土）を除く53基を柱穴と考えピット番号を付した（2-P1～16、17-P1～23、26-P1～14）。

住居址各部位との位置関係から、本址の柱穴と判断できるものがある（2-P1～16）。連続部の敷石を挟むP1・3は対ピットで、P2・4は柄部に関わる柱穴と考えられる。主体部の壁に接するP5～12は本址の柱穴と判断される。これより東側は17・26住の柱穴と重複するため判然としないが、礫堤との位置関係からみてP13～16などとの組み合わ

せが推測される。覆土は褐色土、にぶい黄褐色土をベースとし、小礫を多量に含んでいる。これは17・26件の柱穴にも共通する。

付属施設：柄部の先端（南）に、地面を10~15cm掘り下げた一段低い面があり、5配石が構築される。主体部・柄部との位置関係からみて、本址に伴う配石と考えられる。柄部の延長線上に10~40cm大の礫を90cm角に敷き詰め、そこから東西方向へ弓なりに小礫を敷き詰める。

備考：柱穴間に結ぶ形で炭化材が検出された。多くは礫堤の下にあり、床面に接している。狭い範囲であるが、P 16・17上の床面レベルに焼土が検出された。炭化材の形成に関わる焼土の可能性がある。

時 期：堀之内Ⅱ式から加曾利B I式併行と考えられる。

### 3号住居址（第28・29図）

位置：斜面、I~K-93~95グリッドに位置する。

重複関係：1（平安住居址）・12~16・23・24住と重複する。1住より古く、12~16・23・24住より新しい。

検出状態：礫堤の内側に大小の礫が隙間なく詰め込まれたような状態で検出された。同心円状に配されているようにも見える。中央部から礫を取り除き、炉址と出入口部の敷石が検出され住居址と判断した。

形態・規模：出入口部が僅かに張り出す柄鏡形の敷石住居址で、礫堤と土堤を伴っている。主体部の平面形態は主軸より副軸が長い梢円形を呈す。礫堤の平面規模は、主軸長3.5m前後、副軸長4.5m前後を測るが、礫堤の外側に続く土堤を含めると、最低1mは規模が大きくなる（付図d断面）。また、礫堤に囲まれた主体部の平面規模は、主軸長3m前後、副軸長3.7mを測る。柄部の長さは約1m、幅は約1.3mを測るが、柄部の先端は削平されている。主軸方向はN-18°-Wである。

覆土：主体部を埋める多量の礫間に、締まりの弱い黒色土が入る。

壁：壁体は礫堤と土堤からなる。壁体の残存幅は約150cm、残存高は床上70cmまで確認される。礫堤は長さ20~60cmの礫を数段積み上げ築かれている。残存幅は70cm、残存高は50cmまで確認される（付図d断面ほか）。

上層断面によると、壁体の構築工程は次のように考えられる。①土堤を柱穴内縁から斜め外側に盛る。②土堤内側の裾から外側へ礫を積み上げる（床上10~15cmからが多い）。③礫堤を土堤で覆う。なお、②と平行して、土石混合土を礫間に充填している。礫の間に数cm大の小礫を多量に含む暗褐色土と褐色土が確認されている。

周溝：検出なし。

床面：全体が硬く締る（付図d断面）。黒色土を5~10cmの厚さで貼床している。

敷石：連続部に平石を敷いている。

炉址：石窯埋甕炉である。炉石は完存とみられる。炉体土器は深鉢の胴部下半から底部である。焼土は広範囲に及ぶが不明瞭である。

柱穴：本址に伴う柱穴は7基である（3-P 1~7）。3-P 5・6で柱痕が確認された（付図a・e断面）。

**備** 考：本址の礫堤と土堤は23・24住の礫堤と土堤と重複している。検出当初は同一住居址の構造物とも考えたが、礫堤の構築面に高低差があり、礫堤の外縁に柱穴、礫堤の内側から2基の炉址が検出されたため、3軒の敷石住居址の重複と判断した。新旧関係は本址の主体部に礫が集中していたこと、炉址が完存すること、礫堤が出入口部の敷石につながり全周することなどから、本址を最も新しい住居址と判断した。

3・23・24住の壁体が、礫堤と土堤により築かれたことは、3軒の住居址より古い12住の構造と深い関わりがある。構築順番は12住→24住→23住→3住となり、ほぼ同じ主軸線上で規模が縮小している。12住より新しい3軒の住居址の床面は、直前に構築された古い住居址の床面を40~50cmの切り盛りの中で設けている。つまり、古い床面を深く掘り込みず、逆に盛土して床面をつくる住居址もあるため、礫や土を盛り上げて壁体を築く必要があったと考えられる。

**時** 期：堀之内II式から加曾利B I式併行と考えられる。

#### 10号住居址（第30図）

**位** 置：低地、F~I-105~107グリッドに位置する。

**重複関係**：4方柱と重複する。礫堤が4方柱の126土に切られるため、本址が古い遺構と考えられる。住居址にかかる土坑は5基ある。対ビットに重複する199土は、礫の残り方から本址より新しい土坑と考えられる。他の土坑との新旧関係は不明である。また、北壁は6配石に近接し、上屋の構造によっては配石との同時存在が難しいと考えられる。

**検出状態**：黒色土層から黒褐色土層において、特定の範囲から礫が集中出土した。この時点で礫堤が確認されている。併せて、礫の少ない空間が住居址の周囲に確認されている。

**規** 模：礫堤を伴う柄鏡形の敷石住居址である。主体部の平面形態は主軸より副軸が長い梢円形を呈す。平面規模は柱穴の外縁間で、主軸長4.6m、副軸長5.3mを測る。礫堤の平面規模は主軸長4.4m、副軸長5.1mを測る。礫堤に囲まれた主体部の平面規模は、主軸長3m前後、副軸長4m前後を測る。柄部の長さは1.8m、幅は1.3mを測る。主軸方向はN-4°-Wである。

**覆** 土：黒色土から黒褐色土である。堆積状態は不明である。

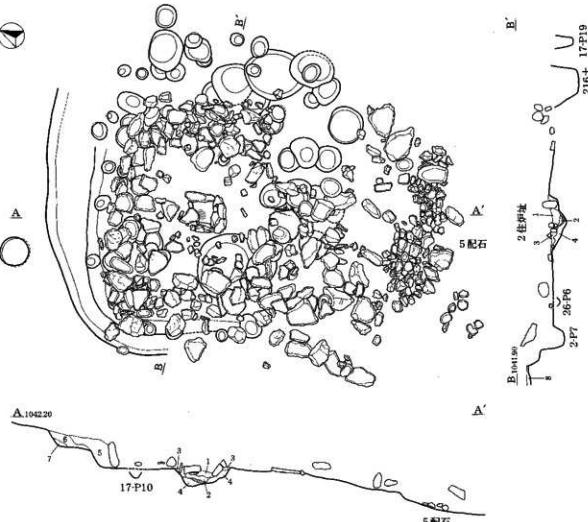
**壁** : 検出段階の礫の平面分布と周囲の礫の検出面からみて、主体部は浅いながらも地山を掘り込んでいると考えられる。奥壁の一部に床面上5~10cmの立ち上がりを検出したが、黒褐色土層中での検出であり、主体部の壁を正確に検出できたとは言い難い。

柱穴の内縁を結ぶ線上に長さ5~30cmの礫が集中する。礫の大きさと配置に規則性がないことから、この礫群は礫堤と考えられる。礫堤の幅は30cm、残存高は床上20cmまで確認される。礫堤の下端は床下10cmほどの位置で確認されている。床面を一旦掘り下げて構築しているのか、柱穴内に沈み込んだものなのか判断に迷う。

**周** 溝：検出なし。

**床** 面：炉址検出面（黒褐色土層）の精査で、炉址の南脇からローム塊が集中する貼床状の硬化面が検出された。また、炉址の南側でも南北に張り出す硬化面（柄部）が検出された。その状態から床面と考えられた。

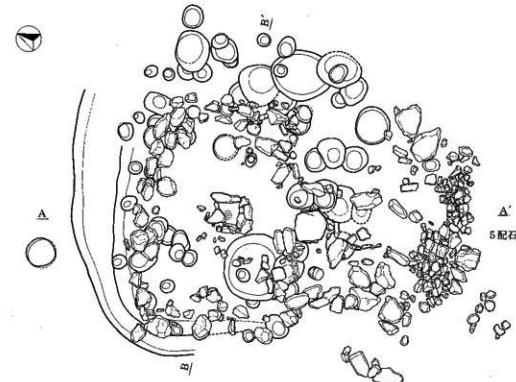




2住 A-A'

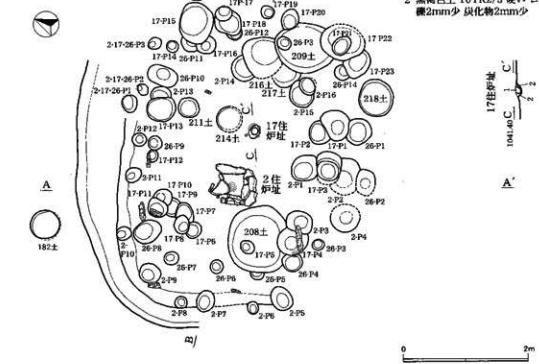
黑褐色土 10YR2/2 黑褐色土 10YR2/1 ローム粒子少 粒2mm少 バミス2mm少 炭化物2~5mm多  
2 黑褐色土 10YR3/3 ローム粒子少 ローム粒2mm少 粒2mm少 バミス2mm少 炭化物2mm少 粒1~1.5mm少  
3 黑褐色土 10YR2/2 ローム粒子少 バミス2mm少 粒2mm少  
4 疏褐色土 10YR3/4 ローム粒子多 ローム粒2mm少 粒2~5mm少 バミス2mm少 炭化物2mm少  
5 黄褐色土 10YR4/4 黄褐色土 10YR4/4 特に硬い ローム粒子多 ローム粒2mm少 粒2mm~1cm多 バミス2mm  
6 疏褐色土 10YR3/3+褐色土 10YR4/4 特に硬い ローム粒子多 ローム粒2mm少 粒2mm~1cm多 バミス2mm  
7 黄褐色土 10YR4/4 特に硬い ローム粒子多 ローム粒2mm少 粒2mm少 バミス2~5mm多 炭化物2mm~1cm少

2住探査ビット深度(厘米)			2-17-26号住居地ビット深度(厘米)			17号住居地ビット深度(厘米)			
基準:104.70m : 2-P10検出レベル			基準:104.70m : 2-P10検出レベル			基準:104.70m : 2-P10検出レベル			
ビット番号	深度	ビット番号	深度	ビット番号	深度	ビット番号	深度	ビット番号	深度
P 1	119	P 14	68	P 1	92	P 1	119	P 14	41
P 2	105	P 15	88	P 2	42	P 2	101	P 15	90
P 3	115	P 16	92	P 3	61	P 3	119	P 16	66
P 4	102					P 4	103	P 17	95
P 5	105					P 5	87	P 18	72
P 6	70	26号住居地ビット深度(厘米)		P 6	96	P 19	72		
P 7	65	基準:104.70m : 2-P10検出レベル		P 7	82	P 20	81		
P 8	65	ビット番号 深度 ビット番号 深度		P 8	102	P 21	116		
P 9	85	P 1	103	P 6	70	P 11	84	P 22	108
P 10	57	P 2	112	P 7	73	P 12	63	P 23	101
P 11	73	P 3	106	P 8	88	P 11	109		
P 12	53	P 4	100	P 9	72	P 14	94	P 12	65
P 13	91	P 5	74	P 10	86	P 13	92		

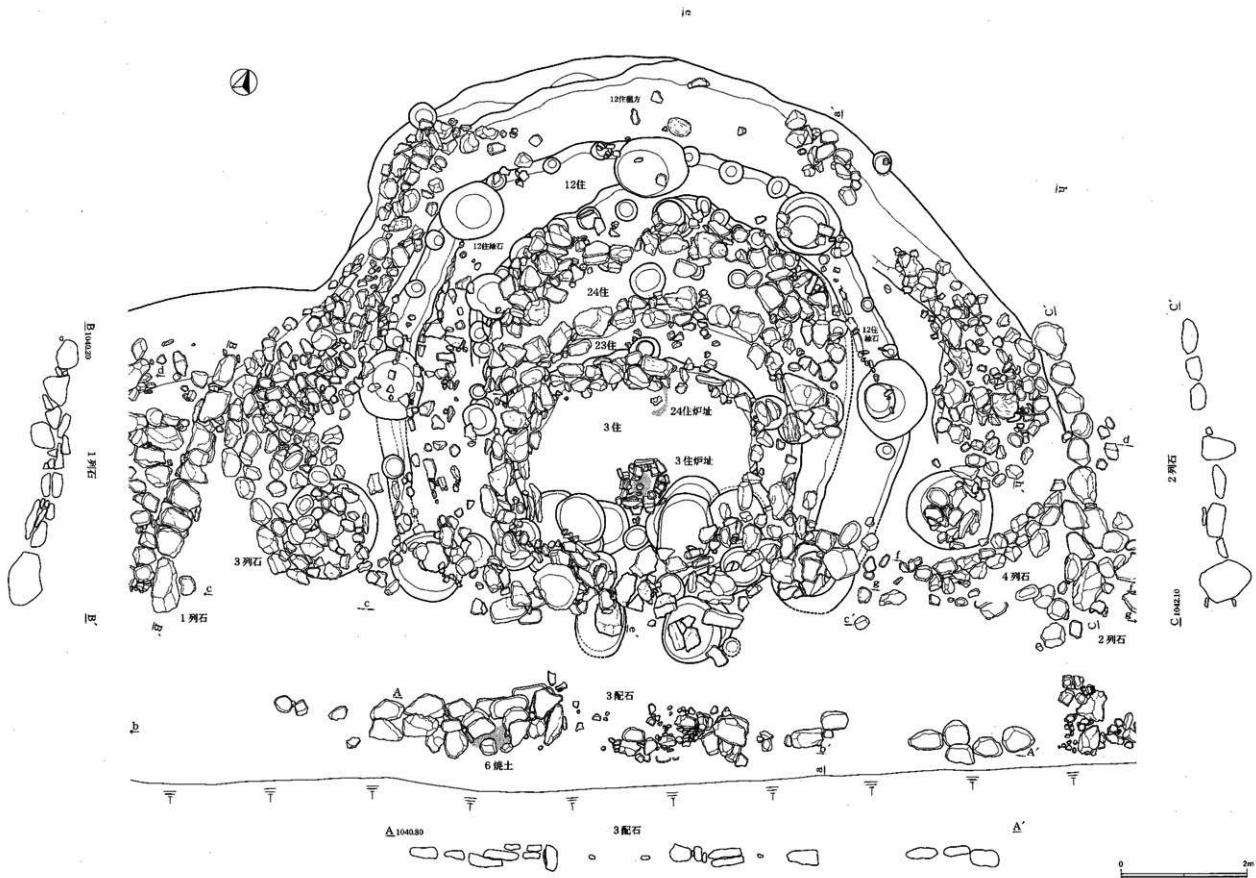


17住居地 C-C'

1 黑褐色土 10YR2/2 硬い ローム粒子多 ローム粒2~5mm少 粒2mm~1cm少 バミス2~5mm少 炭化物2mm少  
2 黑褐色土 10YR2/3 硬い ローム粒子少 粒2mm少 炭化物2mm少

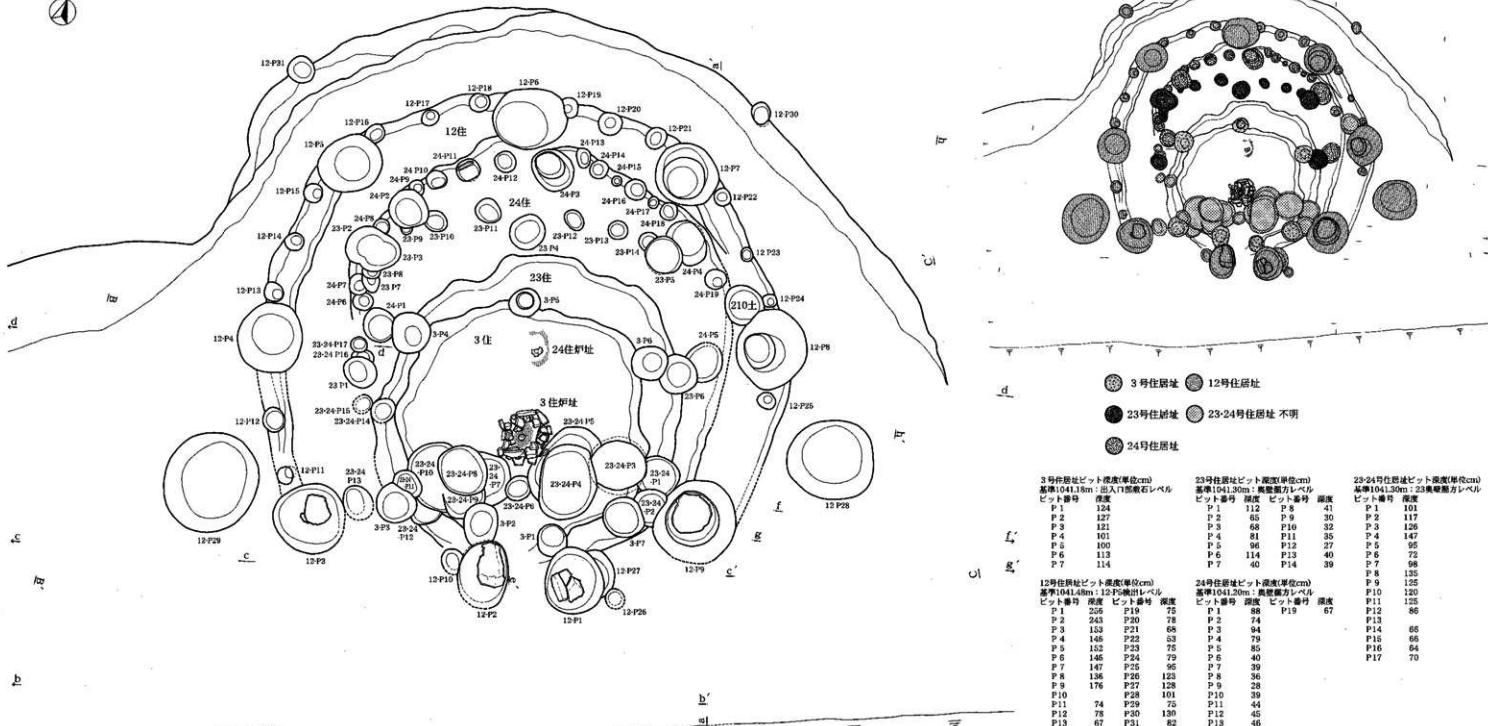


第27図 3区 2-17-26号住居地、5号配石 (1/60)

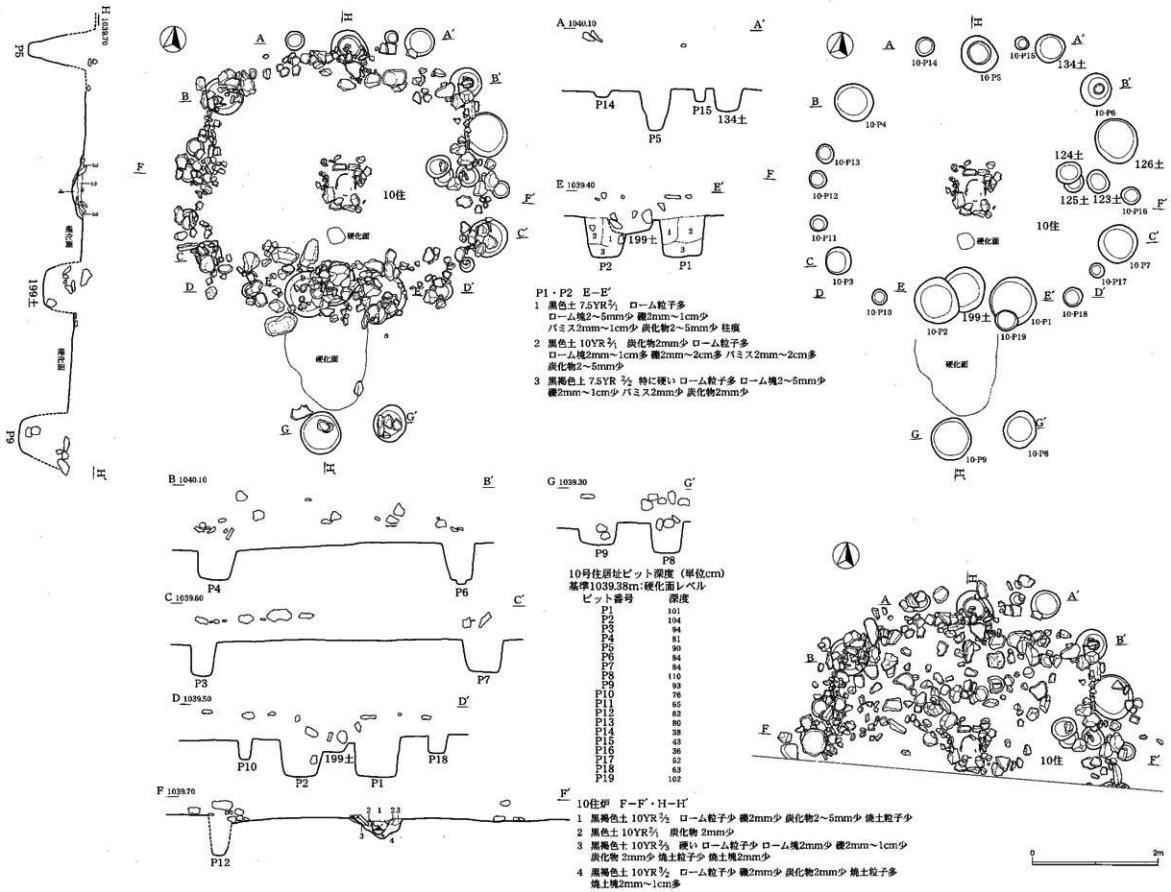


第28図 3・12・23・24号住居址 (1/60)

Ⓐ



第29図 3区3・12・23・24号住居址掘方 (1/60)

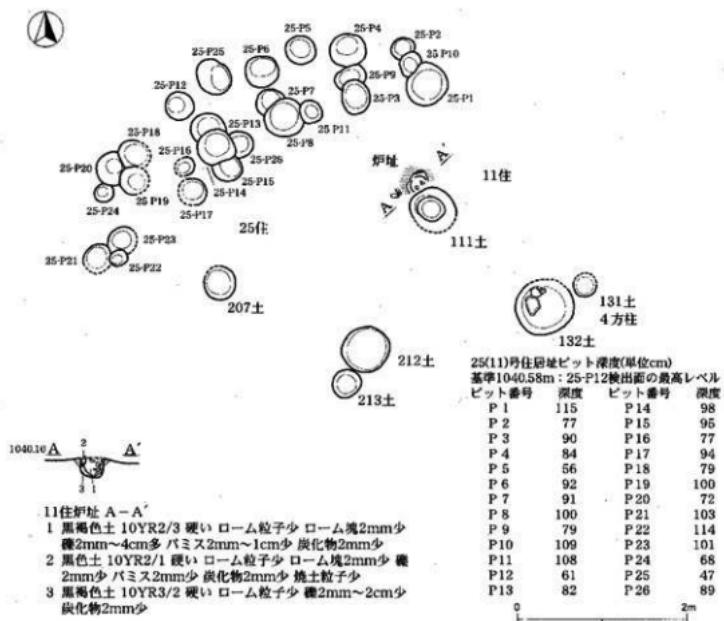
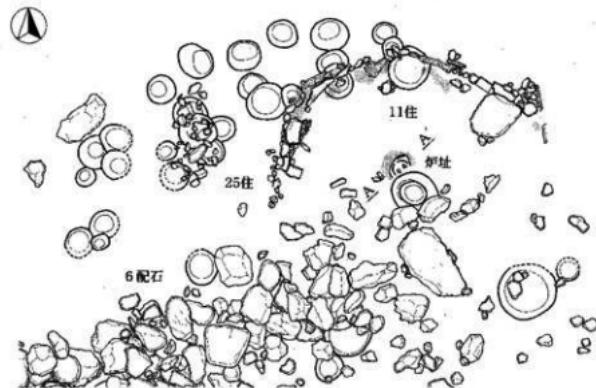


第30圖 3區10號住居址 (1/60)

- 敷 石：連結部に板状の縁が数枚あり、敷石の可能性がある。
- 炉 址：石門埋甕炉である。炉石は方形に配される。東西辺に隙間がみられるが、完存と考えている。炉体土器は2個体あり、ともに深鉢の胴部下半から底部である。埋設状態は正位で上下に重ねている。上側の土器下に平石が水平に置かれていた。火床の焼土は掘方の北側で明瞭である。炉石の下から検出された焼土があり、炉はつくり替えられた可能性がある。
- 柱 穴：本址に伴う柱穴は19基である（10-P1～19）。主柱穴はP1からP7で、主柱穴間に1～3本の支柱穴が入る。P1・2の南にあるP8とP9は、柄部（硬化面）との位置関係から本址に伴う柱穴と判断した。
- 備 考：礫堤とした大小の縁は、縁の残し方次第で縁石となる可能性がある。本址の場合、縁は面をなして規則的に配されたと考えられない状態であった。また、縁間の土が硬く締まるごと、大きな縁の下に小縁の集中する傾向があること、縁間から多くの土器片が出土したことなどから、壁体に関わる構造物の一部と考えている。
- 時 期：壇之内I式併行と考えられる。

#### 11号住居址（第31図）

- 位 置：斜面、K・L-104～106グリッドに位置する。
- 重複関係：25住・6配石・111土と重複する。敷石と炉址の残存状態からみて、25住より新しく、6配石・111土より古いと考えられる。
- 検出状態：6配石の北側で土器が出土し、面的に掘り下げたところ縁石と敷石が検出された。
- 形態・規模：北側は床面近くまで試掘トレンチで掘削され、南側は6配石の掘方が及ぶ。土層断面で壁とみられる立ち上がりが確認されたが、面的な検出はできていない。土層断面で確認された壁、および縁石と敷石の平面分布から、主体部の平面形態は円形または梢円形と考えられる。平面規模は直径4m前後と推測される。
- 覆 土：南北方向の土層断面図を作成しているが、図化していない。覆土は4層に分層され、壁から住居址中央へ向かう堆積状態を示す。1層は褐色土、2層は暗褐色土で、ともにローム塊・縁・パミスを多く含み、硬く締まる。3層は縁石と敷石を直に覆う層である。黒褐色土で炭化物（材）と焼土塊を多量に含む。炭化材は床面に集中するが、10cmほど浮いたものもある。4層は暗褐色土で硬く締まる。
- 壁 ：土層断面図に主体部の壁とみられる立ち上がりが記録されている。床面からの高さは約40cmで立ち上がりは急である。
- 周 構：検出なし。
- 床 面：縁石と敷石の周囲が硬い。縁石と敷石に沿って炭化材と焼土が遺存する。
- 敷 石：縁石と敷石は五角形または六角形に敷かれていたと考えられる。平石・角縁・円縁などに凹石や石棒を組み込んで整然と敷かれている。西側の縁石・敷石は表面が火を受け煤けたもの、赤く変色しているものが目立つ。
- 炉 址：埋甕炉である。断ち割りで炉石の抜き取り痕は確認されていない。縁石と敷石のレベルからみても、当初から埋甕炉であったと考えられる。炉体土器は1個体で、深鉢の胴部上半から底部を正位に埋設している。検出面と土器内部から火を受けて破碎したとみられ小縁



第31図 3区11・25号住居址と周辺の土坑 (1/60)

- が出土した。
- 柱 穴：炉址の北側から西側に、柱穴とみられる穴が26基検出された（25-P1~26）。大半は25住に伴う柱穴と考えられる。P1・2・8・10・11などは本址に伴う可能性もある。本来、南側にも柱穴が存在したであろうが、6配石の掘方と、遺構検出段階の掘り下により削平されたと思われる。
- 備 考：縁石と敷石に沿う炭化材は厚さが3~7cmあり、最長で約60cmを測る。縁石と敷石のない箇所に遺存するため、礫とともに木材が敷設されていたと考えられる。
- 図面の西側にある小礫の集中は、25件のピットに伴う可能性がある。その西にある大きな礫は本址より新しい時期のものと考えられる。
- 時 期：堀之内Ⅱ式併行と考えられる。

#### 12号住居址（第28・29図）

- 位 置：斜面、H-M-92~97グリッドに位置する。
- 重複関係：1・3・13~16・23・24住と重複する。1・3・23・24住より古く、13~16住より新しい。
- 検出状態：P7とP8を結ぶ縁石の検出により、本址の存在が確認された。
- 形態・規模：柄鏡形の敷石住居址と考えられる。対ピットとなるP1・2の南側が道路建設時の削平を受け、柄部は検出されていない。しかし、本址は13住のP1・2と3配石を踏襲し利用することから、13住と同様に短い柄部をもつ住居址と考えられる。主体部の平面形態は主軸より副軸が長い梢円形を呈す。主体部の平面規模は柱穴の外縁間で、主軸長8.3m、副軸長9mを測る。掘方の規模は、北壁から対ピットの外縁間で、主軸長9.5mを測る。主軸方向はN-21°-Wである。
- 本址は大規模な礫堤と土堤を伴う。主柱穴・支柱穴の内縁から外側に築かれているが、北側は掘方の壁、西側は掘方の壁と3列石を結ぶ線、東側は掘方の壁と4列石を結ぶ線までの間に築かれていたと考えられる。礫堤と土堤を含めた住居址の平面規模は、主軸長約9m、副軸長13.2mを測る。また、礫堤と土堤に囲まれた主体部の平面規模は、主軸長6.8m、副軸長6.9mを測る。
- 覆 土：付図a・c断面。
- 壁 主体部の壁高（主柱穴・支柱穴の外縁からの立ち上がり）は、掘方底面まで10~20cmを測る。立ち上がりは明瞭である。掘方の壁の残存高は北壁で70cmを測る。西側へは括れ部を経て、高さを減じながら弧をなし続いている。東側は2列石の内縁にかかる付近から高さを減じ中ほどで不明瞭となる。
- 壁体（礫堤と土堤）の幅は、北壁約2.3m、西壁と東壁で約3mを測る（付図d・e断面）。残存高は床面からの計測で、北壁100cm、西壁80cm、東壁60cmまで確認される（付図d・e断面）。
- 主体部の内周は土堤で築かれている。ローム塊・小礫・軽石を多量に含む土石混合土を外側へ盛り上げている。一方、主体部の外周は礫堤と土堤を併用し築かれているが、12-P4とP8付近を境に、礫堤と土堤の上下関係が逆転している。具体的に言うと、3列石と4列石を境界とする礫堤を12-P4とP8付近まで築き、その上に土堤を築いている。

ここから北側は礫堤と土堤が逆転し、土堤は厚みを増していく。北側の土堤は検出面まで土石混合土で埋め戻し、その上に礫堤を築いていたとみられる。なお、3列石と4列石を境界とする外周の礫堤は、長さ20~40cmほどの礫を積み上げて築かれる。3列石側では4段積みが確認されている（付図d断面）。

周 溝：P 3とP 5間、P 7とP 8間に断続して検出された。幅は40~60cm、床面からの深さは5cm前後を測る。掘方の底面に高さを合わせて埋め戻されていることが確認された（付図a断面）。

床 面：23住により埋められた箇所で床面が確認されている。硬く締まりがある。

敷 石：主柱穴間に繰り石が敷かれている。P 3からP 5、およびP 7からP 8間で検出された。

炉 址：検出なし。

柱 穴：推測を含めて31基に及ぶが（12-P 1~31）、上屋に関する柱穴は27基と考えられる。主柱穴はP 1からP 9である。9基すべてに柱痕が確認され、P 1・3・8では人頭大の根固めの礫が確認された。また、P 1・2・3・9では柱穴の底面に繰り石が据えられている。底面が軟弱な自然堆積層（黒～黒褐色土層）にあるためであろう。支柱穴はP 10からP 26の17基が確認されたが、南側に存在したとみられる5、6基は検出できていない。主柱穴のP 1・2は13住のP 1・2を踏襲し利用したものと考えられる。

付 屬 施 設：P 28とP 29、P 30とP 31は、規模が類似し、主軸に対して左右対称となるため、本址に伴う柱穴と考えられる。P 28とP 29は礫堤に組み込まれる柱穴である。それぞれ根固めの礫と柱痕が確認されている。P 29では底面に繰り石が据えられている。P 30とP 31は掘方（土堤）の壁にかかる柱穴である。P 30には石棒が逆位に埋置されていた。

1列石と2列石は主体部を挟み、主軸に対して左右対称（「ハ」の字）に構築される。礫堤と土堤との位置関係、12住に伴う整地面との関係などからみて、本址に伴う列石と考えられる。検出された長さは1列石が4.2m、2列石が4.6mを測る。どちらも石積みされ、1列石は4段積みされている。

主体部の南側には、東西方向に延びる3配石がある。P 1・2と3配石の間は道路建設により削平され、本址との関係は判然としない。その上、配石設置面と床面の比高差は1m近くあったとみられる（付図a断面）。このような状態であるが、主体部との位置関係から本址に伴う配石と考えている。ただし、3配石の構築は13住の構築時に遡る可能性があり、P 1・2と同様に、13住の配石を踏襲し利用したものと考えている。石積みは4段まで確認され、立石を伴っている（A-A'）。

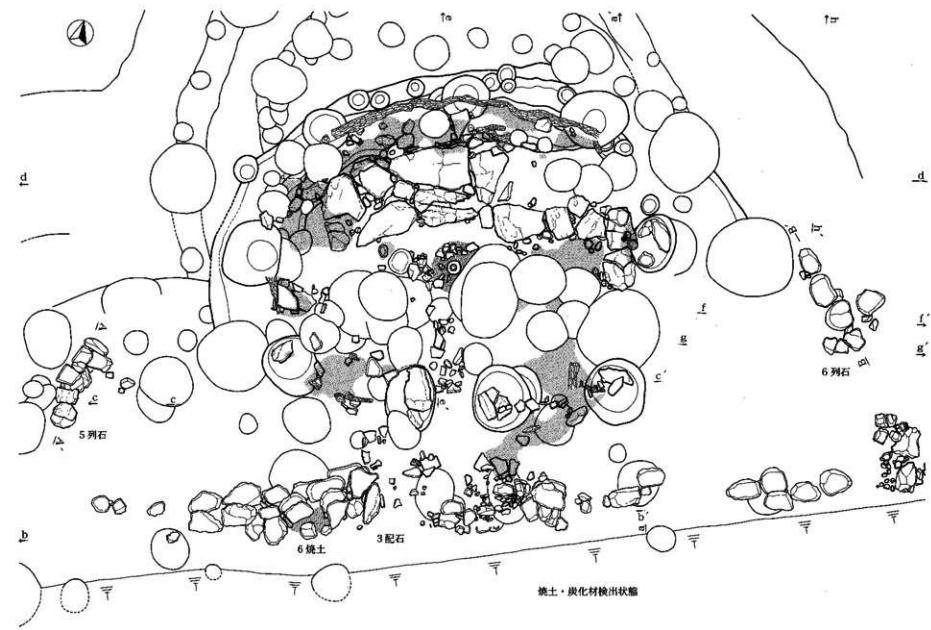
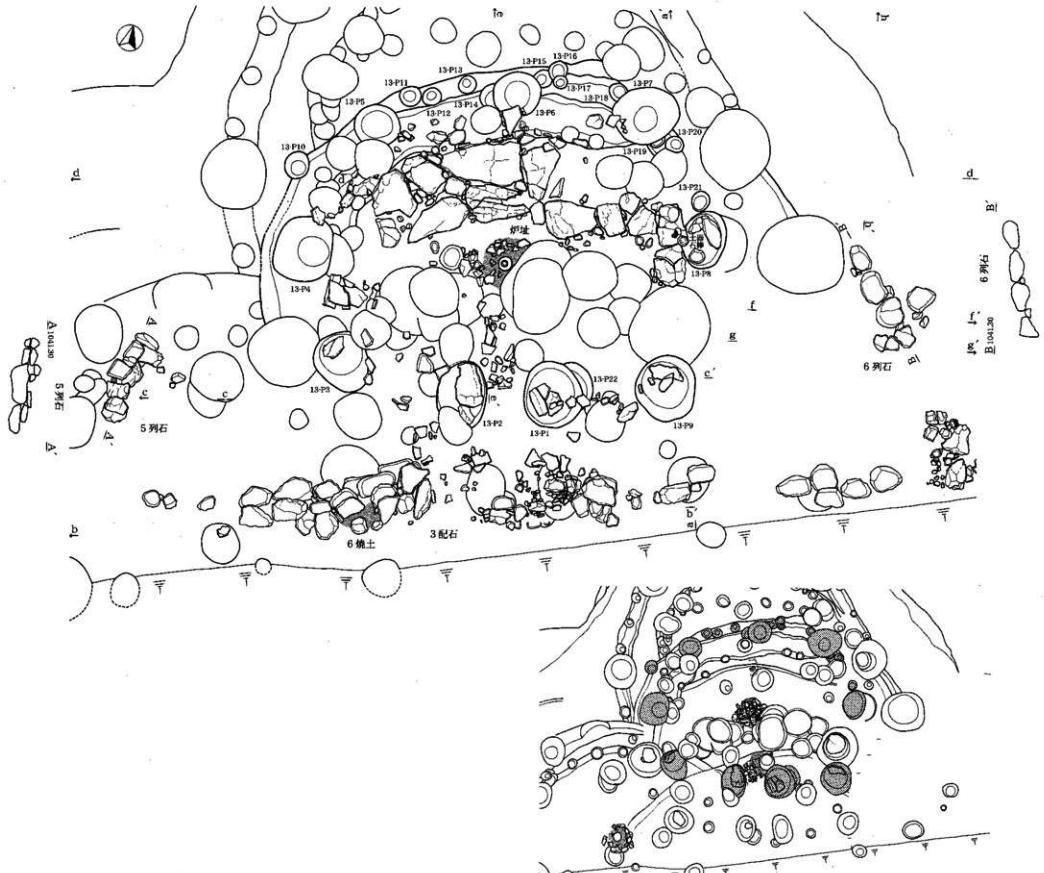
備 考：3列石と4列石は弧状を呈する列石である。3列石は1列で、4列石は2列に礫が配される。4列石の西端に柱状の礫が立てられている。

時 期：堀之内Ⅱ式併行と考えられる。

### 13号住居址（第32図）

位 置：斜面、I-L-93~96グリッドに位置する。

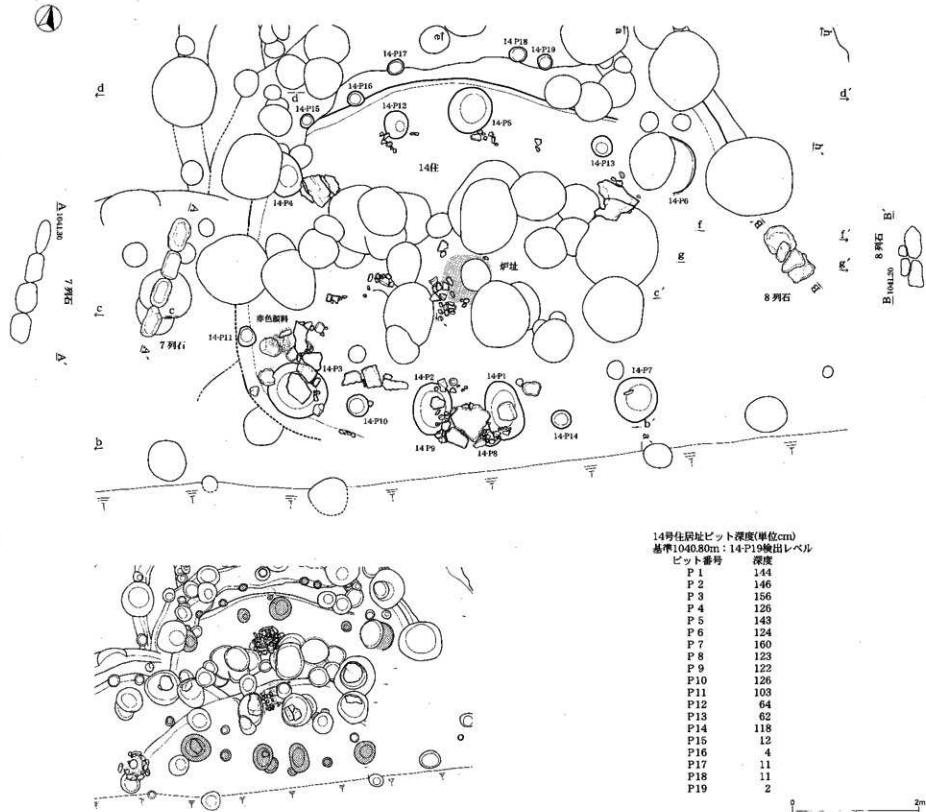
重複関係：1・3・12・14~16・23・24住と重複する。1・3・12・23・24住より古く、14~16住より新しい。



13号住居址ピット深度(単位cm)			
基準1040.64m: 13-P6南の敷石上レベル			
ピット番号	深度	ピット番号	深度
P 1	189	P 12	12
P 2	189	P 13	11
P 3	189	P 14	13
P 4	157	P 15	4
P 5	103	P 16	9
P 6	92	P 17	42
P 7	130	P 18	33
P 8	189	P 19	28
P 9	211	P 20	51
P 10	26	P 21	73
P 11	2	P 22	74



第32図 3区13号住居址、3号配石、5・6号列石 (1/60)



第33図 3区14号住居址、7・8号列石 (1/60)

検出状態：1・3・12・23・24住の床面下から検出された。本址を直に覆う住居址は12住である。12住床面との比高差は約60cmを測る（付図a断面）。

形態・規模：敷石と焼土の平面分布からみて、短い柄部をもつ柄鏡形の敷石住居址と考えられる。主体部の平面形態は主軸より副軸が長い梢円形を呈す。規模は柱穴の外縁間で、主軸長5.7m、副軸長7.3mを測る。また、検出された壁によると、副軸長は8.5m以上と推測される。主軸方向はN-15°-Wである。

覆 上：付図a・c断面。

壁：主体部の壁は、北壁と東・西壁の一部が検出された。北壁は床面から約20cmを測るが、西側の土層断面では約40cmの立ち上がりが確認された（付図c断面）。P7の東にある約20cmの立ち上がりは、掘方の壁の可能性がある。

土堤とみられる盛土は、土層断面で確認されている。北側では周溝から北壁に築かれた土堤があり、残存高は床上約15cmまで確認される。

周溝：北壁直下に周溝がめぐる。幅60~80cmで、床面からの深さは約10cmを測る。覆土は褐色土と暗褐色土の混合土で、ローム塊・礫・バミスを多量に含み、硬く縮まりがある。その状態から埋め戻しと判断される。土堤の土と色調・含有物が酷似している。

床面：火を受けているためか、全体的に硬い。主柱穴を結ぶ形で炭化材がめぐり、炭化材に沿って内側が50~150cmの幅で焼けている。

敷石：平石を多用し、その間を円窓や角窓で詰石する。最も大きい平石は奥壁部の主軸線上に敷かれているようで、長さ約120cm、幅約60cmを測る。

炉址：石圓壇窯炉である。23・24住に伴うピットが南東部を壊し、炉石の残りは不良である。火を受けて剥離した石片が土器を囲み散在する。残存する炉石と焼土範囲からみて、1m角以上の大きな炉址であったと考えられる。炉体土器は大小2個体あり、ともに深鉢の胴部下半から底部である。埋設状態は正位で、小さな土器を入れ子する。火床の焼土は明瞭で、土器の周囲が広く焼けている。

柱穴：推測を含め22基が検出された（13-P1~22）。主柱穴はP1からP9で、P1・2は12住の対ピットに利用されている。主柱穴間に1~4本の支柱穴を設けるが、両側の主柱穴は検出できていない。P1・2・4・7・8で柱痕が確認され、P11では柱とみられる炭化材が立ったまま検出された。P8は根固めの礫、P1・2・11は礫石を伴う。

付属施設：5列石と6列石は主体部を挟み、主軸に対して左右対称（「ハ」の字）に構築される。ともに構築面が13住に伴う整地面と考えられたため、本址に伴う列石と判断した。検出された長さは5列石が1.5m、6列石が1.8mである。どちらも石積みされ、5列石は3段積みされている。

12住で記したとおり、3配石の構築は13住の構築時であると考えられる。

備考：先に記したとおり、主柱穴を結ぶ線の内側が火を受けている。敷石に煤けたもの、赤く変色したものがあるため、火を受けたのは住居の廃絶後と考えられる。焼土の厚さは10cmに及ぶ箇所があり、中途半端な焼け方ではないと思われる。

P8上の敷石には石棒が立てられ、その脇に小型の深鉢が伏せられていた。石棒は無頭で、深鉢は口縁部から底部の約1/2を欠損する。また、深鉢から少し離れて人頭人の自然

礫が置かれている。土器・石棒・自然礫は火を受け、表面が焼けたり赤く変色している。

P8の断面によると、石棒は柱に接して置かれていたと考えられる（付図a断面）。

時 期：堀之内II式併行と考えられる。

#### 14号住居址（第33図）

位 置：斜面、H-K-93~96グリッドに位置する。

重複関係：1・3・12・13・15・16・23・24住、6焼土と重複する。1・3・12・13・23・24住より古く、15・16住と6焼土より新しい。

検出状態：1・3・12・13・23・24住の床面下から検出された。本址を直に覆う住居址は13住である。

13住床面との比高差は10~20cmを測る（付図a・c断面）。新しい住居址の柱穴が多数掘り込まれるが、その割に保存状態は良い。

形態・規模：主体部の平面形態は主軸より副軸が長い楕円形を呈す。平面規模は柱穴の外縁間で、主軸長5.6m、副軸長6.9mを測る。また、検出された掘方の壁によると、主軸長6.1m、副軸長は8m以上と推測される。主軸方向はN-16°-Wである。

覆 上：付図a・b・c断面。

壁：主体部の壁は、北壁と西・南壁の一部が検出された。北壁は床面から約5~10cmを測るが、西側と南側の土層断面で20~40cmの立ち上がりが確認されている（付図b・c断面）。南壁は6焼土を切っている。P5の東に掘方の壁とみられる約30cmの立ち上がりが検出された。

周 溝：検出なし。

床 面：北側の床面は的確に検出できている。硬い面は確認されていない。南側では敷石のレベルと土層断面を手がかりに床面を検出している。

敷 石：北側は数枚の敷石と小礫が残存する程度で、取り除かれた可能性がある。一方、南側は多くの敷石が残存し、特にP1・2とP3の間では良好である。P1とP2間（出入口部）には厚みのある板状の礫が敷かれ、その間に小礫を詰めている。P2とP3間は柱穴の内縁を絶ぶ形で平石と板状の礫が敷かれている。

炉 址：3-P1、12・13-P1などに切られ、残りは不良である。炉石の残骸ともみられる礫と焼土が残存する。石圓炉であるならば、1m角程度の大きな炉址であったと考えられる。

柱 穴：推測を含め19基が検出された（14-P1~19）。主柱穴はP1からP7である。P3とP4間におよびP6とP7間に主柱穴が存在した可能性もある。主柱穴間に支柱穴が設けられるが、検出できないものがあったと考える。主体部の壁の北側にあるP15からP19は、13住の敷石下から検出された。規模が類似し、主体部の壁に沿ってめぐるため、本址に伴う柱穴と考えられる。P1・2・4は柱痕が確認され、P2・3は礫石を伴う。

付 属 施 設：7列石と8列石は主体部を挟み、主軸に対して左右対称（「ハ」の字）に構築される。ともに構築面が14住に伴う整地面と考えられたため、本址に伴う列石と判断した。検出された長さは7列石が1.9m、8列石が1mである。8列石は2段積みされている。

備 考：P3の北に赤色顔料の集中が確認された。

時 期：堀之内II式併行と考えられる。

### 15号住居址（第34・35図）

位 置：斜面、F～I-91～94グリッドに位置する。

重複関係：3・12～14・16・18住と重複する。3・12～14住より古く、16・18住より新しい。

検出状態：開田工事で生じた法面にかかる住居址で、約1/2が残存する。3・12～14住の床面下から検出された。本址を直に覆う住居址は14住である。14住床面との比高差は15～20cmを測る（付図b・c断面）。多くの住居址と切り合わないため、保存状態は良好である。

形態・規模：主体部の平面形態は円形、または主軸より副軸が長い椭円形と考えられる。平面規模は柱穴の外縁間で、副軸長6mを測る。主体部の北側に床面より一段高い面が検出された。本址の掘方で、この面は東側の立ち上がりへ続くものと考えている。掘方の平面規模は副軸長7.5m以上と推測される。主軸方向はN-19°～Wと考えられる。

覆 土：付図b・c断面。

壁：主体部の壁は北壁が検出された。立ち上がりは明瞭で床面から30～45cmを測る。また、主体部の壁は土層断面の西端で確認されている（付図b断面）。掘方の壁は北壁と東壁が検出された。北壁の立ち上がりは明瞭で25～45cm、東側は約15cmを測る。

周 溝：検出なし。

床 面：全体的に硬く締まりがある。

敷 石：新しい住居址と重複しない北・西側で、敷石の残りが良い。主柱穴間の内縁を結ぶ形で敷かれている。

炉 址：石圓埋甕炉である。西辺の炉石が欠落する。炉内に落ち込む板状の礫が炉石の一つと考えられるが、これを戻しても空間は埋まらず、抜き取られた炉石があると考えられる。炉体土器は2個体あり、ともに深鉢の胴部下半から底部である。ともに正位に埋設され、上下に重なり合って出土している。2個体の土器が同時に埋められた可能性もあるが、下側の土器全体が焼土に覆われること、焼土の厚みが約10cmであることなどから、炉のつくり替えと考えておきたい。

柱 穴：12基が検出された（15-P1～12）。主柱穴はP1からP5である。P1は18住のP2と重複する。主柱穴間に支柱穴が設けられるが、検出できなかったものが多い。P5の底面にローム混じりの黒色土の埋土が確認された。厚さは4cmを測る。

備 考：本址では床面（敷石）、および床上5～25cm間から礫が多量に出土した。30～40cm大までの大きなものが目立つ。礫堤の崩落かもしれないが、礫の多くは本址を埋める目的で動かされたものと考えられる。その上に小礫（砂利）を多量に含む整地された層があり、その面から6・7焼土が検出された。

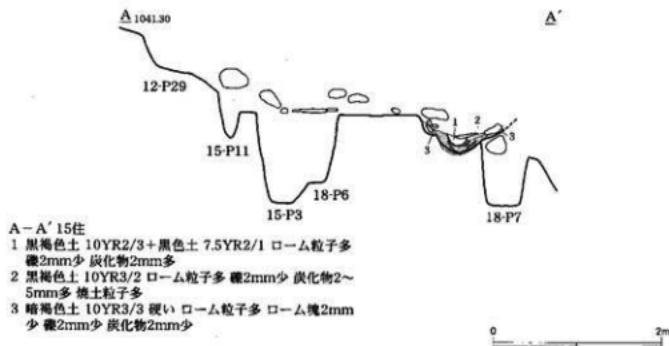
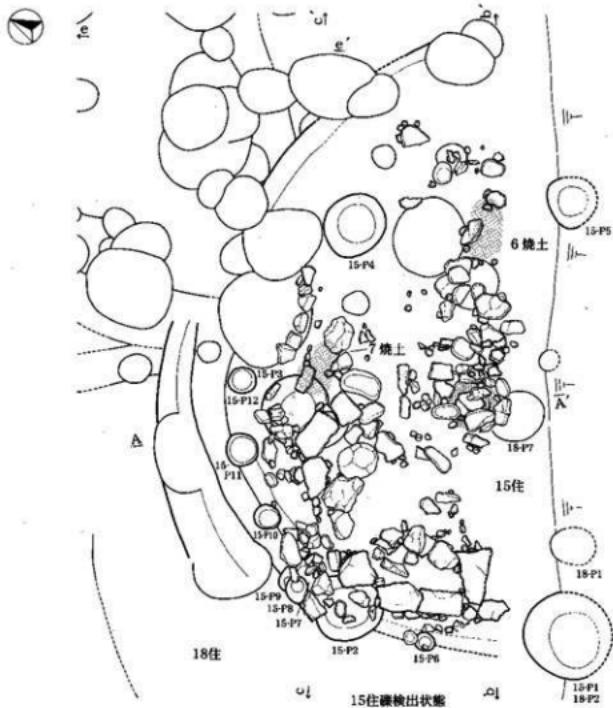
時 期：堀之内I～II式併行と考えられる。

### 16号住居址（第36図）

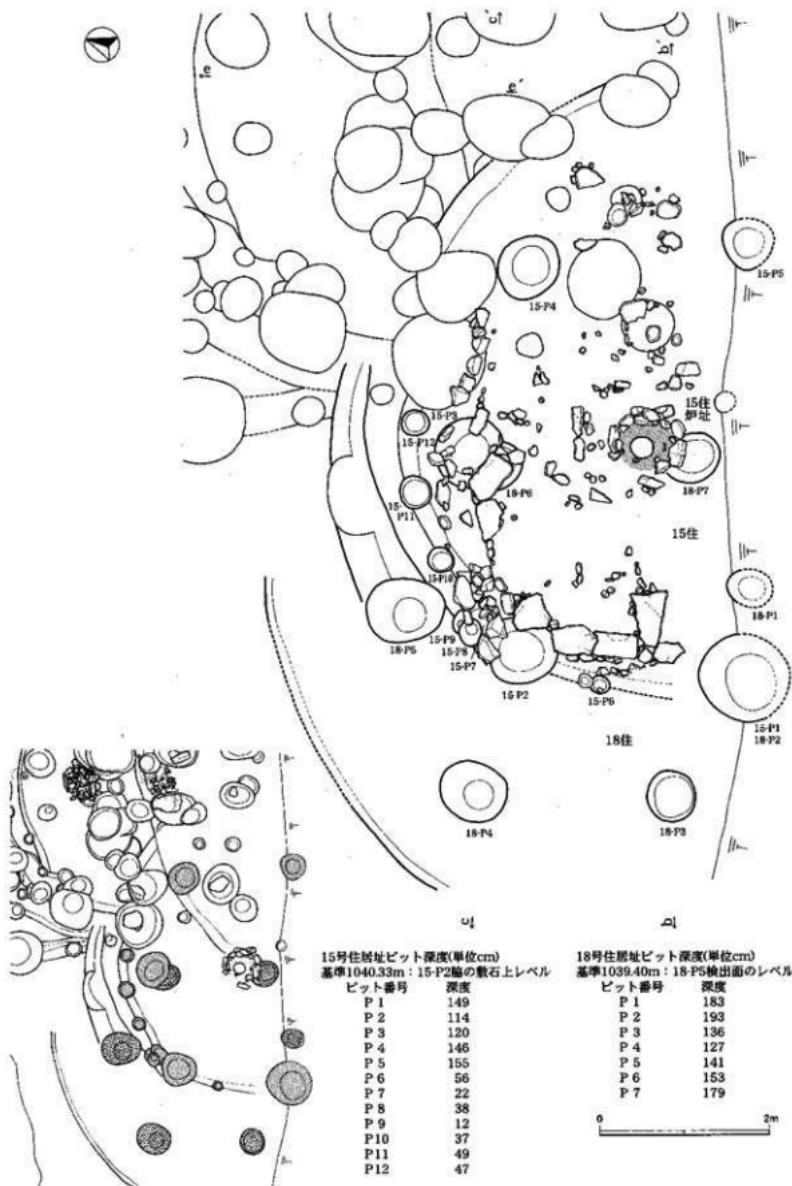
位 置：斜面、G～I-93～97グリッドに位置する。

重複関係：3・12～15・18・23・24住と重複する。3・12～15・23・24住より古く、18住との新旧関係は不明である。

検出状態：開田工事で生じた法面にかかる住居址で、1/4程度が残存する。3・12～15・23・24住の床



第34図 3区15号住居址、6・7号焼土址 (1/60)



第35図 3区15・18号住居址 (1/60)

面下から検出された。本址を直に覆う住居址は14件と15住である。14住床面との比高差は20~30cm(付図a・b・c断面)、15住床面との比高差は15~20cmを測る(付図b・c断面)。

**形態・規模:** 主体部の平面形態は円形、または主軸より副軸が長い橢円形と推測される。規模は主柱穴の本数が少なく推測できない。主体部の壁の北側に床面より一段高い面が検出された。本址の掘方と考えられる。

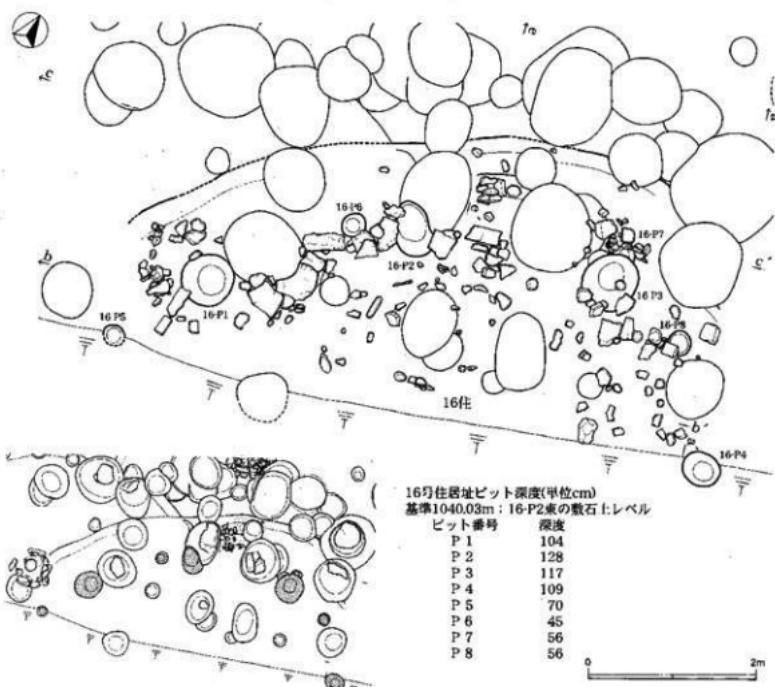
**覆:** 土:付図a・b・c断面。

**壁:** 主体部の壁と掘方の壁が部分的に検出された。ともに立ち上がりは不明瞭である。主体部の壁の残存高は床面から15~20cm、掘方の壁の残存高は約20cmを測る(付図a断面)。主体部の壁際に5~30cm大の礫が集中する箇所があり、土堤の可能性がある。

**周溝:** 検出なし。

**床面:** 全体的に硬く綺まりがある。

**敷石:** 新しい住居址の柱穴が数多く重複するわりに、敷石の残りは良好である。主柱穴を結ぶ形に敷かれている。



第36図 3区16号住居址(1/60)

炉 址：検出なし。  
柱 穴：推測を含め8基が検出された（16-P1～8）。主柱穴はP1からP3である。P6・8は本址の支柱穴と考えられるが、他は検討の余地がある。  
時 期：掘之内I式併行と考えられる。

#### 17号住居址（第27図）

位 置：斜面、L・M-101～103グリッドに位置する。  
重複関係：2・26住と重複する。2住より古く、26住との新旧関係は不明である。  
検出状態：2住の床面を掘り下げ、炉址が検出されたことで存在が確認された。  
形態・規模：推測される柱穴の配置から、主体部の平面形態は主軸より副軸が長い隅丸長方形または梢円形と考えられる。平面規模は柱穴の外縁間で、主軸長3.2m、副軸長4mを測る。主軸方向はN-9°-Wである。  
覆 土：観察なし。  
壁 略：検出なし。  
周 溝：検出なし。  
床 面：検出なし。  
敷 石：検出なし。  
炉 址：埋立炉であるが、炉石を伴っていた可能性がある。土器は深鉢の胴部下半から底部で、正位に埋設される。土器に接して焼土が残存する。  
柱 穴：本址に伴う柱穴は、炉址との位置関係から、23基が推測されている（17-P23）。他に数基の柱穴を伴う可能性もある。主柱穴は7本または9本と考えられる。対ビットはP1・2とP3と考えられる。  
時 期：掘之内II式から加曾利B I式併行と考えられる。

#### 18号住居址（第35図）

位 置：斜面、F～I-90～93グリッドに位置する。  
重複関係：12～16住と重複する。12～15住より古く、16住との新旧関係は不明である。  
検出状態：開田工事で生じた法面にかかる住居址で、南側の一部が削平されている。15住の炉址の調査で、炉址に重複する古い柱穴の存在が確認されていた。炉址の西側法面にかかる2基の柱穴との関連が示唆され周辺を調査した。その結果、整然と配置する7基の柱穴が検出され、住居址の存在が明らかとなった。

形態・規模：僅かに検出された壁からみて、主体部の平面形態は円形と推測される。平面規模は柱穴の外縁間で、主軸長5m、副軸長4.6mを測る。主軸方向はN-16°-Wである。

覆 土：観察なし。  
壁 略：北壁と西壁の一部が検出された。立ち上がりは明瞭で、残存高は床面から5～10cmを測る。  
周 溝：検出なし。  
床 面：一部が北側で検出された。硬く締まりがある。  
敷 石：検出なし。

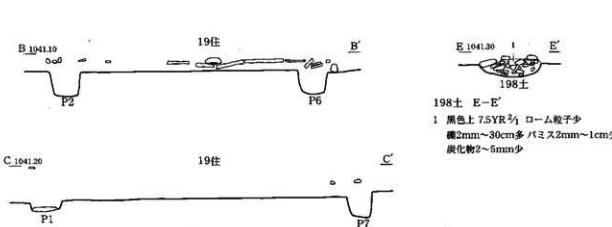
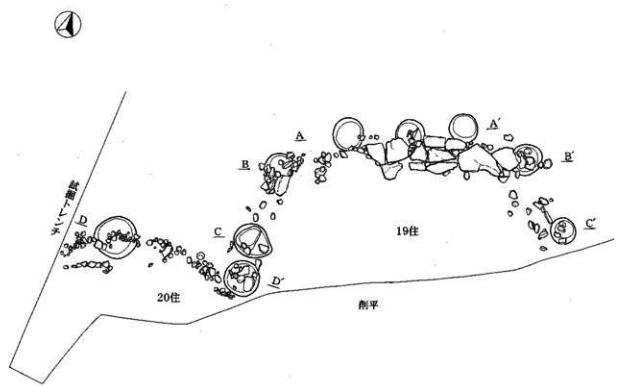
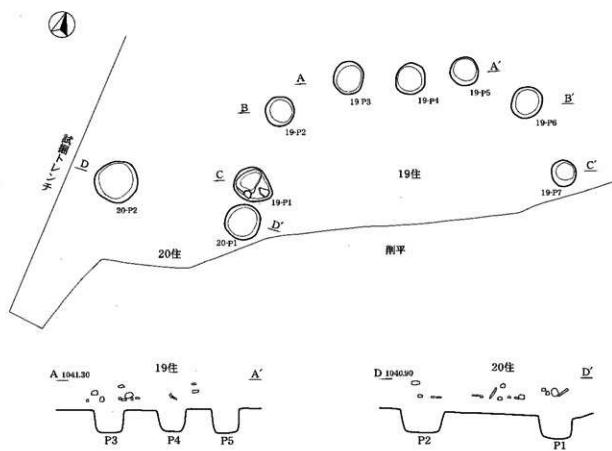
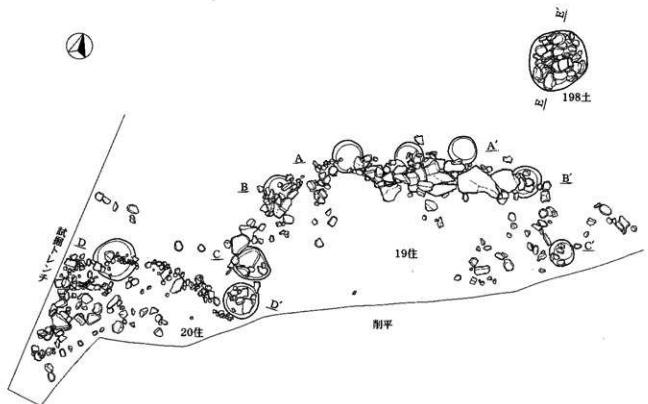
- 炉 址：検出なし。
- 柱 穴：7基検出され、すべて主柱穴である（18-P1～P7）。P2は15住-P1と同一地点で重複する。P2で柱痕が確認されている。またP5からP7の底面にローム混じりの黒色土の埋土が確認されている。厚さはP5で約10cm、P6で約20cm、P7で約10cmを測る。
- 時 期：堀之内式併行と考えられる。

#### 19号住居址（第37図）

- 位 置：斜面、P-R-111～114グリッドに位置する。
- 重複関係：20住と重複する。礫の切り合いからみると、本址が新と思われる。
- 検出状態：開田工事で生じた法面にかかる住居址で、約1/2が残存する。開田工事の客土に覆われ、保存状態は良好である。
- 形態・規模：主体部の平面形態は敷石の平面分布からみて、円形または主軸が副軸より短い梢円形と推測される。平面規模は柱穴の外縁間で、直径5.5mと推測される。
- 覆 土：検出なし
- 壁 壁：検出なし。
- 周 溝：検出なし。
- 床 面：特に硬い面はない。
- 敷 石：柱穴の内縁を結ぶように敷かれている。北側は平石が整然と敷かれ、他は5～10cm大の円礫や角礫などが敷かれる。P3の南は小さな礫が弧状に敷かれるが、本来、ここには平石が敷かれていたと考えられる。
- 炉 坂：検出なし。
- 柱 穴：7基検出された（19-P1～7）。規模にほとんど差がなく、すべて主柱穴と考えられる。P1の底面にある板状の礫は、台地平坦面から自然供給されたものと考えられる。
- 備 考：敷石より10～30cm高い位置から、大小の礫が多量に出土している。壁際のものは礫堤の崩落かもしれないが、住居址中ほどの礫は投棄されたものと考えられる。一方、北側の敷石上に20～30cm大の礫10数個が遺存していた。礫の中には石棒が含まれている。これらの礫は投棄されたものではなく、意図して置かれたものと考えられる。
- 時 期：称名寺式併行と堀之内式併行の土器が混在している。時期決定は保留したい。

#### 20号住居址（第37図）

- 位 置：斜面、P-110～112グリッドに位置する。
- 重複関係：19住と重複する。
- 検出状態：住居址の南側は開田工事で生じた法面にかかり、西側を試掘トレンチで尖っている。残存範囲は1/5ほどと思われる。残存部は開田時の客土に覆われ、保存状態は良好である。
- 形態・規模：平面形態は礫の平面分布からみて、円形と推測される。
- 覆 土：観察なし。
- 壁 壁：礫堤（土堤）と考えられる礫集中が柱穴間に確認された。礫の大きさは2～10cm大で、残存高は20～30cmを測る。



第37図 3区19・20号住居址と土坑 (1/60)

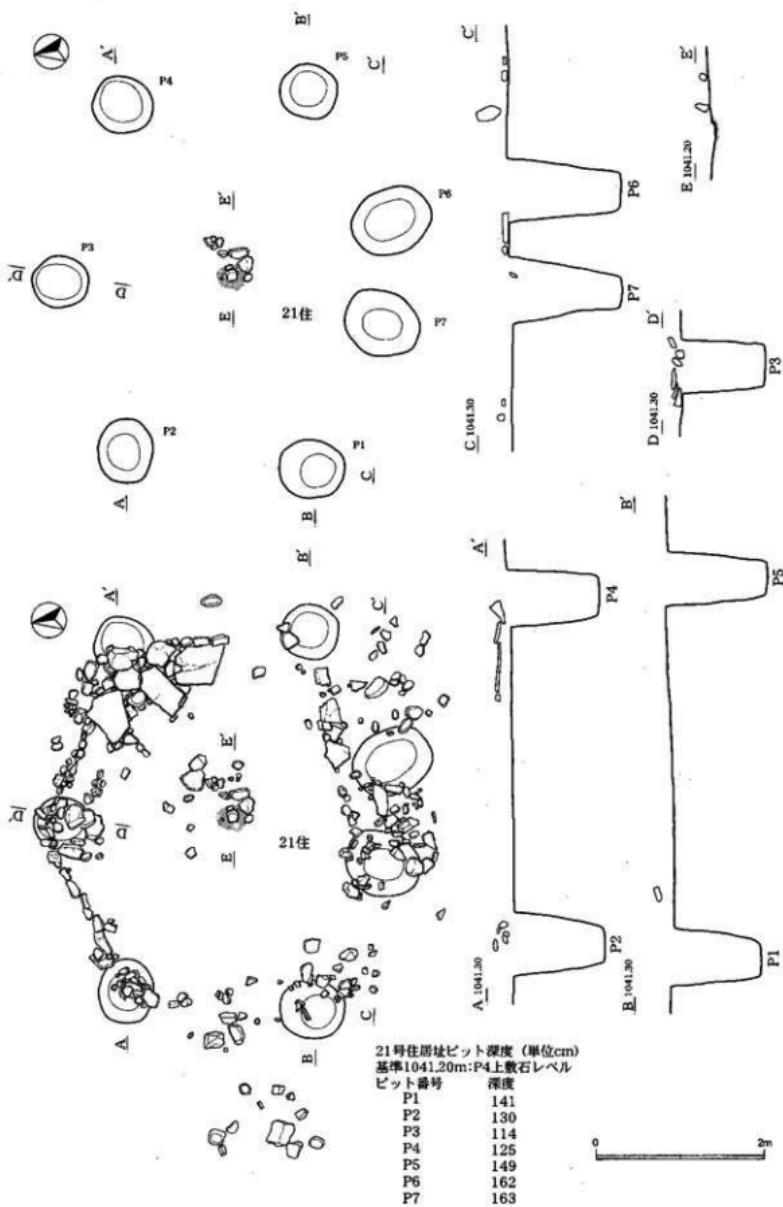
- 周 溝：検出なし。
- 床 面：確認できていない。
- 敷 石：柱穴間に列状に残存する小礫を、縁石とみるか判断に迷う。一部に縁石とみられる礫がある。しかし、数cm大の礫を多く含み、すべての礫が敷かれていたとは思われないため、縁石とともに礫堤（土堤）が構築されていたと考えておく。
- 炉 址：検出なし。
- 柱 穴：2基検出された（20-P1・2）。主柱穴と考えられる。
- 備 考：残存範囲から大小の礫が多量に出土した。大きな礫は中ほどに多く、小さな礫は壁際に多い。
- 時 期：称名寺式併行と堀之内式併行の土器が混在している。時期決定は保留したい。

#### 21号住居址（第38図）

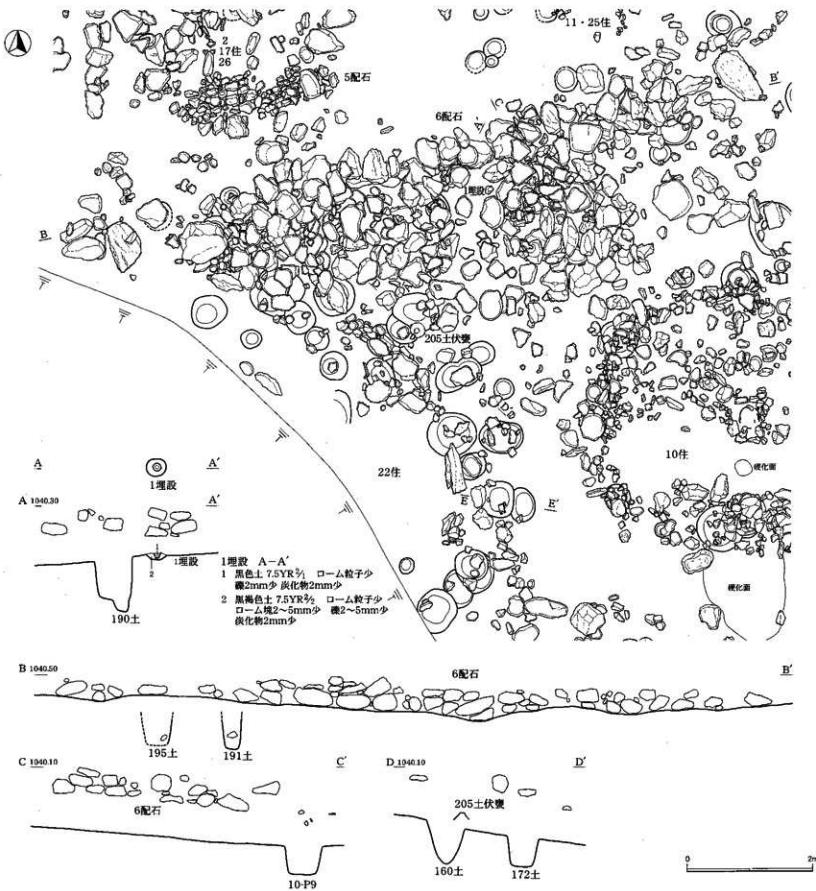
- 位 置：斜面、Q～S-117～120グリッドに位置する。
- 重複関係：重複なし。
- 検出状態：開田工事の客土に覆われ、保存状態は良好である。
- 形態・規模：平面形は主軸が副軸より短い楕円形を呈す。規模は柱穴の外縁間で、主軸長5.2m、副軸長4.7mを測る。主軸方向はN-10°-Eである。
- 覆 土：観察なし。
- 壁 壁：検出なし。
- 周 溝：検出なし。
- 床 面：特に硬い面はない。
- 敷 石：柱穴間を結ぶように縁石と敷石が敷かれている。
- 炉 坯：石圓埋壙炉である。炉石の残りは不良で、多くは抜き取られている。炉体土器は深鉢の底部で、正位に埋設される。火床の焼土は不明瞭である。
- 柱 穴：7基検出された（21-P1～7）。すべて主柱穴である。
- 備 考：P5とP6間に骨片の散布が確認された。幅は柱穴幅よりやや広い。
- 時 期：堀之内I式併行と考えられる

#### 22号住居址（第39・40図）

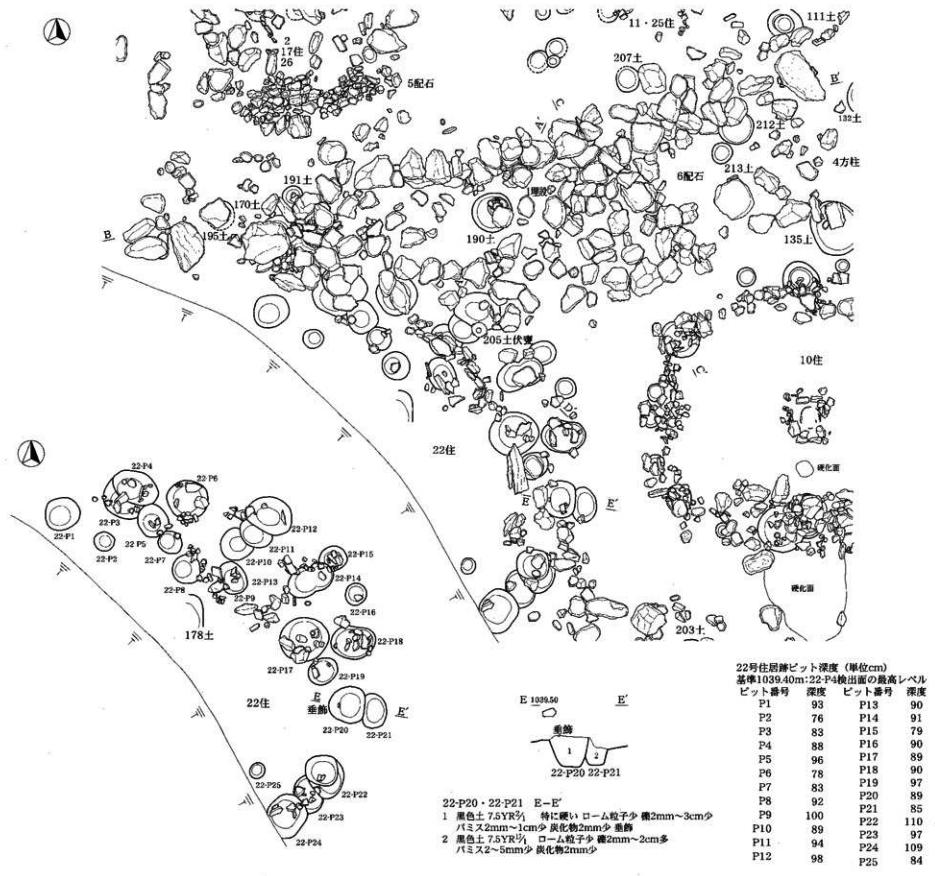
- 位 置：低地、G～I-102～104グリッドに位置する。
- 重複関係：3配石と僅かに重複する。本址の柱穴（P3・4・6）を3配石の礫が覆うため、本址が古と考えられる。
- 検出状態：開田工事で生じた法面にかかり、1/2以上は削平されている。遺構検出当初、法面にかかる大小の礫が多数検出された。礫を覆う土に締まりがなく、工事の際に動かされた礫と判断し取り除いている。本来、住居址内に多くの礫が存在したと考えられる。
- 形態・規模：柱穴の配置からみて、平面形態は円形または主軸が副軸より短い楕円形と推測される。平面規模は柱穴の外縁間で、直径7m前後と推測される。
- 覆 土：観察なし。



第38図 21号住居址 (1/60)



第39図 3区22号住居址、土坑、5・6号配石、1号埋設土器 (1/60)



第40図 3区22号住居址、土坑、5・6号配石 (1/60)

- 壁** : 檜出された礫の中に、柱穴に沿う列状の礫群がある。礫は南北方向に傾斜し、板状の礫は立てられているように見える。本址の礫堤と考えられる一方、205土とした伏堀に伴う石垣の一部とも考えられる。
- 周** 構: 檜出なし。
- 床** 面: 檜出なし。
- 敷** 石: 明らかに敷石といえる礫は見当たらない。
- 炉** 址: 檜出なし。
- 柱** 穴: 25基に番号を付している (22-P1~25)。2重または3重に配列するよう見えるが、数が多く、失われた柱穴もあるために、組み合わせを特定することは難しい。
- 備** 考: P20内から垂飾りが出土している。形状は石鏡形で最大長6.5cm、最大幅4cm、最大厚2.4cm、重さ103.2gを測る。穿孔は長軸方向(縦方向)である。P20の上に構築された別の浅い穴に伴う遺物の可能性もあるが、それを積極的に裏付ける根拠がないため、本址の柱穴に伴う遺物と捉えておく。
- 時** 期: 堀之内I式併行と考えられる。

#### 23号住居址 (第28・29図)

- 位** 置: 斜面、J~L-93~95グリッドに位置する。
- 重複関係**: 1・3・12~16・24住と重複する。1・3住より古く、12~16・24住より新しい。
- 検出状態**: 1住(平安住居址)により礫堤の上部が削平されている可能性がある。検出当初から礫堤のプランが確認できている。
- 敷石は検出されていないが、廃絶後に抜き取られた可能性が高いことから、敷石住居址と考える。しかし柄鏡形であるのかは判然としない。
- 主体部の平面形態は主軸より副軸が長い楕円形を呈す。礫堤の平面規模は、主軸長4.8m前後、副軸長5.5m前後を測る。礫堤に囲まれた主体部の平面規模は、主軸長4.2m前後、副軸長4.5mを測る。主軸方向は N-19° -Wである。
- 覆** 上: 暗褐色土や褐色土で硬く締まりがある。
- 壁** : 壁体は礫堤と土堤で築かれている。壁体の残存高は床上約80cmまで確認されている。残存幅は土層断面の解釈によって、最大150cmほどとなる可能性がある。礫堤は長さ20~70cmの礫で築かれているが、本来は数段の石積みであったと考えられる。残存幅は70cm、残存高は40cmまで確認される(付図d断面ほか)。
- 土層断面によると、壁体の構築工程は3住と同様であると考えられる。
- 周** 構: 檜出なし。
- 床** 面: 暗褐色土で硬く締まる。
- 敷** 石: 檜出なし。
- 炉** 址: 檜出なし。本址の廃絶後に構築された3住により削平されたと考えられる。
- 柱** 穴: 北側では主柱穴と支柱穴が特定されている (23-P1~14)。主柱穴はP1からP6、支柱穴はP7からP14である。一方、南側ではプランが推測され、出入口部が特定されたにも関わらず、他柱穴と激しく切り合うために特定できていない。対ビットの候補は23・24-P

3~5とP7~10などである。P4・6で柱痕が確認されている（付図d・e断面）。

**備考**：本址と3・24住は、ほぼ同じ地点で連続して構築された住居址である。土堤の上に礫堤を築き壁体とする構造からも、同じ仕様で構築された住居址と考えられる。柱穴と礫堤の位置に着目すると、柱穴は礫堤の外側に設置されるという共通点が見出せる。本址の場合、柱穴が礫堤の外縁に接するものと、やや外側に間隔をもつものがあり、3・24住のように礫堤の輪郭線と柱穴間を結ぶ線は同心円とならない。柱穴を設置したい位置に古い住居址（24住）の礫堤があり、位置をずらした結果であるのか、それともより強固な壁体を構築するために礫堤から距離をおいたものなのか、また、他に理由があるのかもしれない。

**時期**：堀之内II式から加曾利B I式併行と考えられる。

#### 24号住居址（第28・29図）

**位置**：斜面、J～L-93～95グリッドに位置する。

**重複関係**：1・3・12～16・23住と重複する。1・3・23住より古く、12～16住より新しい。

**検出状態**：3・23住の礫（礫堤）を検出した段階では、本址の礫堤は確認できていない。

**形態・規模**：敷石は検出されていないが、構築後に抜き取られた可能性が高いことから、敷石住居址と考える。しかし柄鏡形であるのかは判然としない。礫堤および柱穴配置は3・23住に類似し、規模は最大である。

主体部の平面形態は円形を呈す。礫堤の平面規模は、主軸長5.6m前後、副軸長6m前後を測る。礫堤に囲まれた主体部の平面規模は、主軸長5m前後、副軸長5.2m前後を測る。主軸方向はN-15°-Wである。

**覆土**：付図a断面。

**壁**：壁体は礫堤と土堤で築かれている。壁体の残存高は床上70cmまで確認される。残存幅は土層断面の解釈によって、最大200cmほどとなる可能性がある。礫堤は長さ20～50cmの礫を積み上げて築かれる。残存幅は100cm、残存高は50cmまで確認される（付図d断面ほか）。礫の多くは水平か内側に傾いた状態で検出されたが、外側へ傾くものも散見される。積まれた礫が多く、北西コーナーでは4段積みが確認されている。

土層断面によると、壁体の構築工程は3・23住と同様であると考えられる。土堤に使われる土は炭化材と焼土塊を多量に含んでいる。

**周溝**：検出なし。

**床面**：炭化物・焼土塊を多量に含む黒褐色土の貼床面と考えられるが、的確に検出したとは言い難い。

**敷石**：検出なし。

**炉址**：13住の敷石上数cmで検出された。埋甕炉であるが、炉石を伴っていた可能性がある。深鉢の胴部下半から底部が正位に埋設される。火床の焼土は明瞭で広範囲に分布する。なお、本址の炉址は、12住の炉址としても良い位置と検出レベルにある。12住の炉址は13・14住と同様に1m角以上の大きさと推測されるが、検出された焼土範囲からみて1m角以上の炉址であるとは言い難い。根拠に乏しいが本址の炉址と考えておく。

**柱穴**：23住と同様に、他柱穴との切り合いが少ない北側で柱穴が特定され、他柱穴と激しく切り

合の南側は特定できていない。特定された柱穴は14基である（24-P1～P14）。主柱穴はP1からP5、支柱穴はP6からP14である。対ピットの候補は23住と同様である。P1・3で柱痕が確認されている（付図d・e断面）。

付属施設：検出なし。

時期：堀之内II式（～加曾利B I式？）併行と考えられる。

#### 25号住居址（第31図）

位置：斜面、K・L-104～106グリッドに位置する。

重複関係：11住・6配石と111・207土と重複する。11住・6配石・111土より古く、207土より新しいと考えられる。

検出状態：11住の柱穴検出作業において、本址の柱穴が検出された。

形態・規模：25住とした柱穴の配置は南東に面して弧をなし、最低2列に配列するように見える。それに住居址番号を付すべきかもしれないが、炉の位置はそのままで拡張または縮小（同心円状の拡張または縮小）した住居址の可能性もあり、ここでは1軒として考えたい。平面形態は円形と推測される。

覆土：観察なし。

壁：検出なし。

周溝：検出なし。

床面：検出なし。

敷石：検出なし。

炉址：検出なし。

柱穴：26基（25-P1～26）の大半は本址の柱穴と考えられる。本来、南側にも柱穴が存在したであろうが、6配石の構築と遺構検出段階の掘り下げで削平されたと思われる。

付属施設：なし。

備考：柱穴の検出面が11住の床面より高いため、本址の床面は11住の床面より上層となる。

時期：称名寺式併行から堀之内I式併行の可能性があるが、時期決定は保留したい。

#### 26号住居址（第24図）

位置：斜面、K-M-101～103グリッドに位置する。

重複関係：2・17住と重複する。2住より古く、17住との新旧関係は不明である。

検出状態：2住の床面を掘り下げ検出された。

形態・規模：推測される柱穴の配置から、主体部の平面形態は主軸より副軸が長い隅丸長方形か梢円形と考えられる。平面規模は柱穴の外縁間で、主軸長3.5m前後、副軸長4mを測る。主軸方向はN-21°-Wである。

覆土：観察なし。

壁：検出なし。

周溝：検出なし。

床面：検出なし。

- 敷 石：検出なし。
- 炉 址：検出なし。
- 柱 穴：14基が推測された（26-P1～14）。他に数基の柱穴を伴う可能性もある。対ビットはP1・2と考えられる。
- 時 期：堀之内II式（～加曾利B I式？）併行と考えられる。

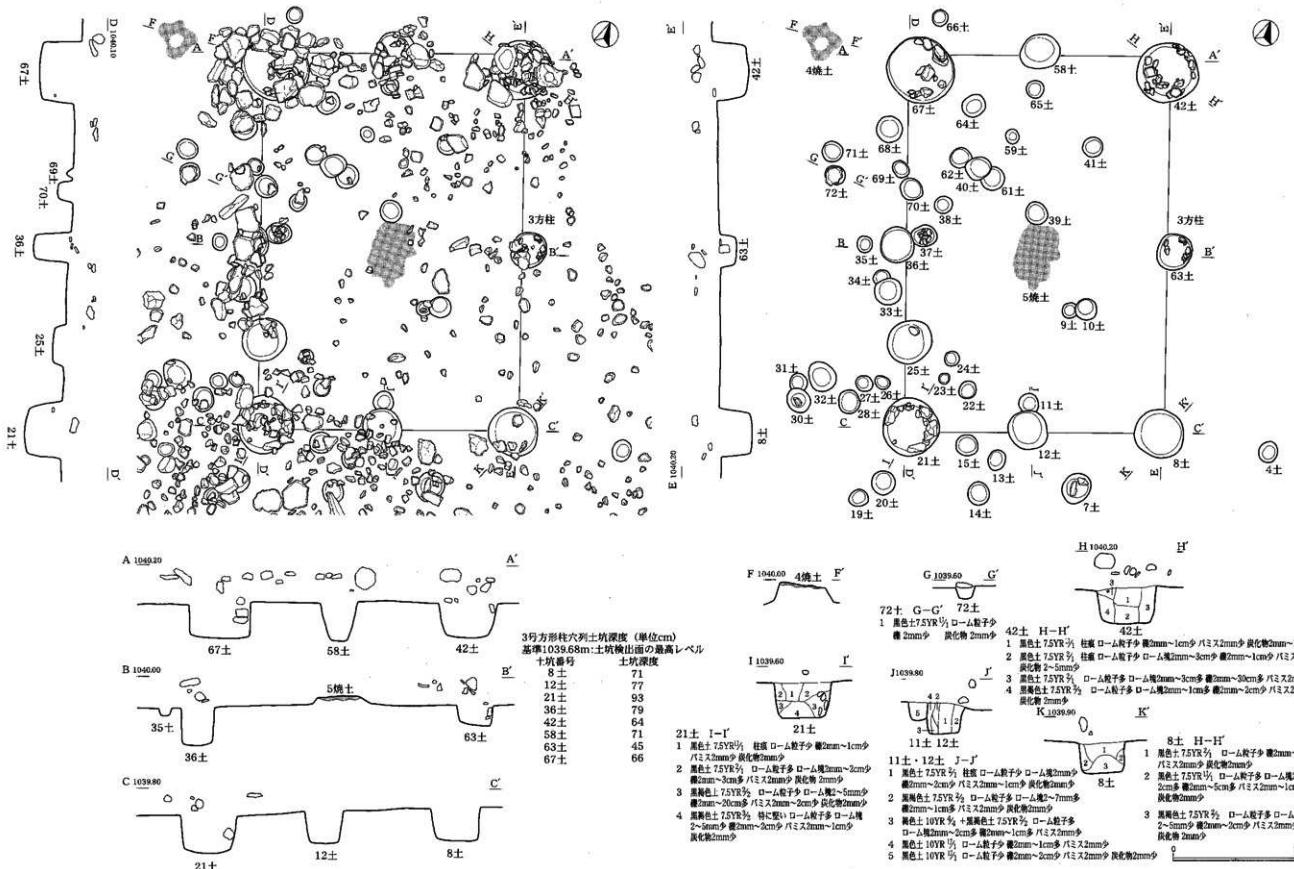
## ②方形柱穴列

### 3号方形柱穴列（第41図）

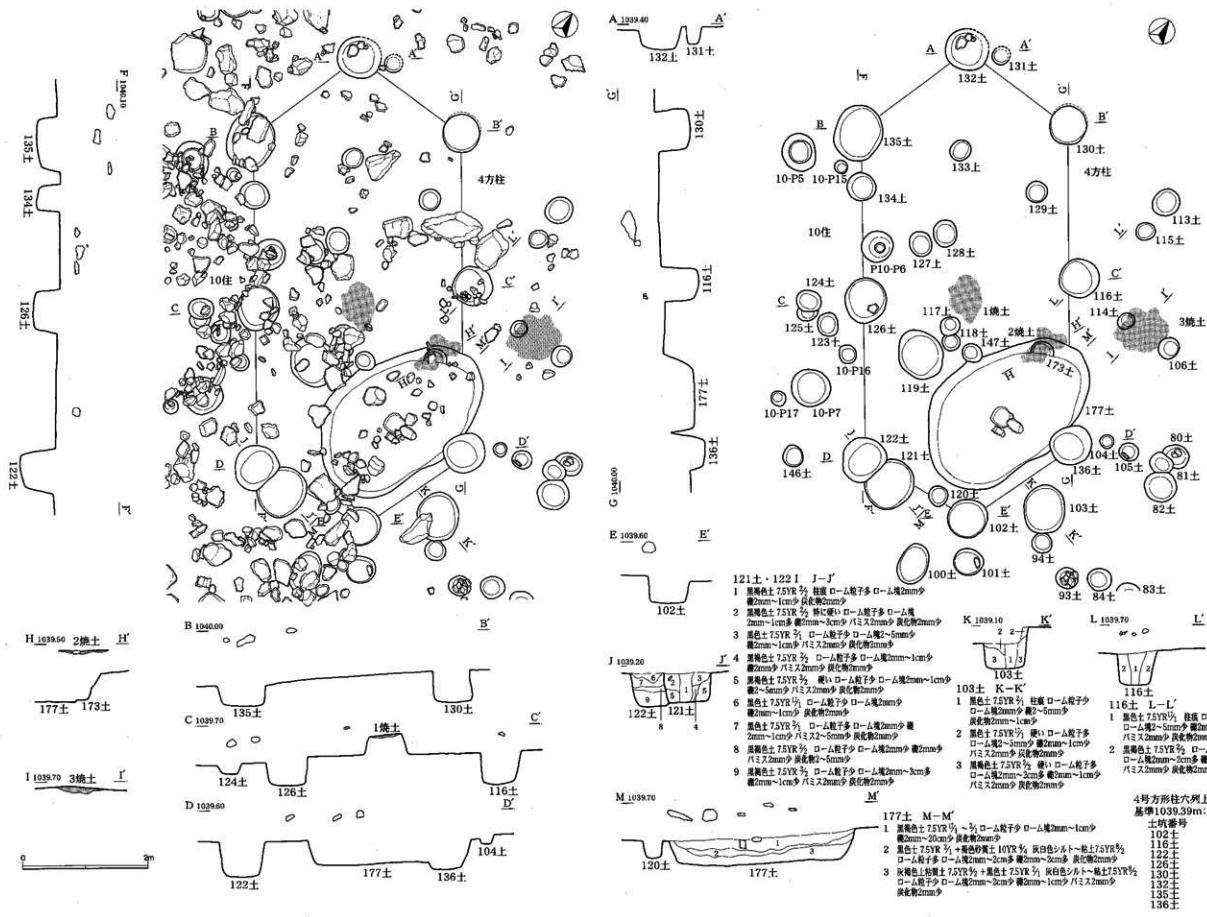
- 位 置：低地、I～M-111～114グリッドに位置する。
- 重複関係：3方柱の柱穴に重複する土坑、および柱穴を結んだ範囲内にある土坑は20基ほどある。また、長軸線上に5焼土がある。
- 検出状態：本址に伴う大小の礫は、黒色土層から黒褐色土層で検出され、柱穴は明黄褐色土層（2次堆積ローム層）で検出された。調査時に方形柱穴列としての認識はなく、整理においてその存在が確認された。
- 形態・規模：柱穴配置は長方形を呈し、柱間は長軸・短軸とも2間である。長軸線上にある12土と58土は「棟持柱」と考えられる。平面規模は長軸長5.8m、短軸長4.1mを測る。長軸方向はN-18°～Wである。
- 柱 穴：8基で構成される。平面規模は四隅の柱穴で直径80～110cm、中間の柱穴で直径50～60cmを測る。21・42・63・67土では掘方の壁に沿って礫が積まれている。これらの礫は柱の根固めと考えられる。覆土の断ち割りで柱痕が確認されたものは、12・21・42土である。
- 付属施設：5焼土は位置からみて、本址に伴うものと考えられる。平面規模は長軸100cm、短軸70cmを測る。検出面は黒褐色土層である。
- 備 考：黒色土層から黒褐色土層で検出された大小の礫に、柱穴を囲み分布するものがある。21・42・67土は明瞭で、礫の平面分布と柱穴の位置からみると、下位の礫は柱の根固めと考えられる。しかし、67土を囲む上位の礫は柱穴の範囲から大きく外れるものが多い。柱穴と礫の検出面の差約20cmを考慮しても、掘方に収まらないと思われる多くの礫がある。柱穴を囲むすべての礫は掘方に収まっていたかは疑問で、礫は柱穴の掘り込み面に置かれた、または積まれたものと考えられる。さらに、礫の平面分布と柱穴の配列が一致する箇所があることから、礫は遺構の内と外を区画する構造物である可能性がある。
- 時 期：堀之内I式以降と考えられる。

### 4号方形柱穴列（第42図）

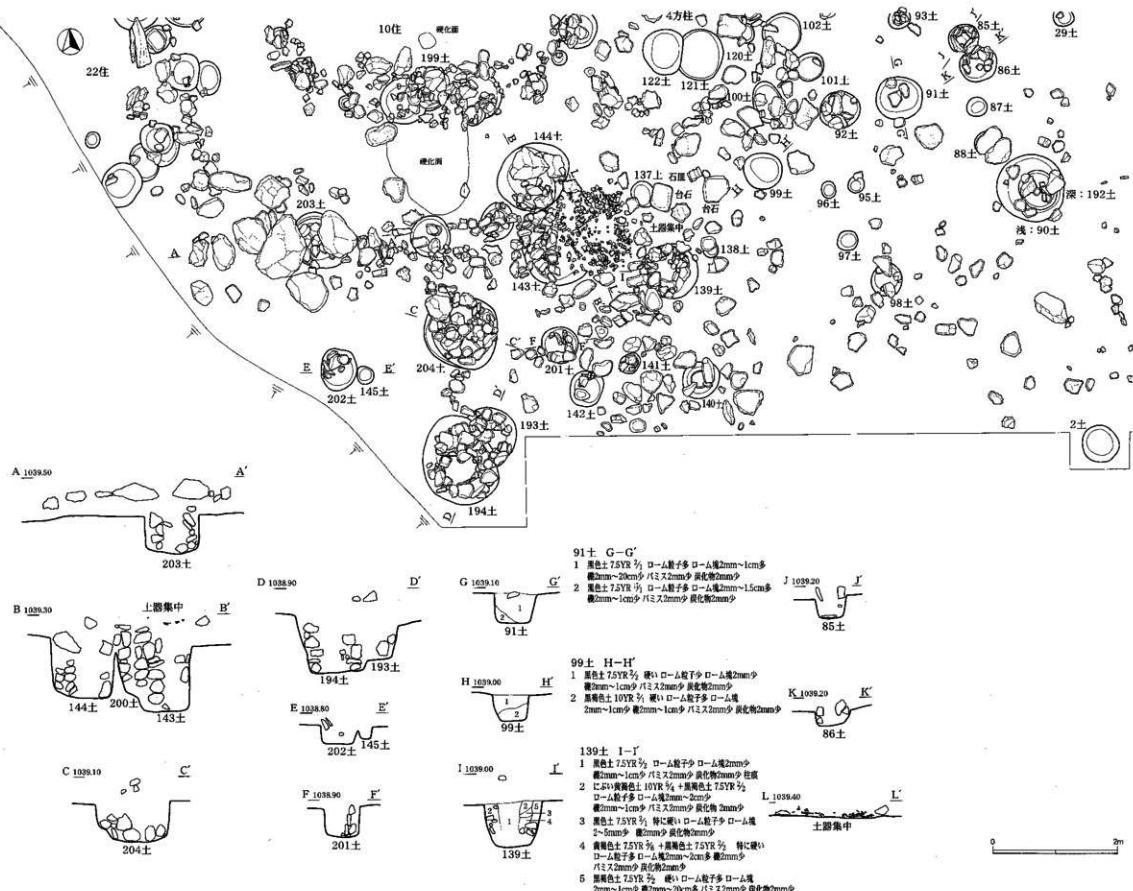
- 位 置：低地、G～K-106～109グリッドに位置する。
- 重複関係：10住と重複する。126土が10住の礫堤を切るために、本址が新と考えられる。4方柱の柱穴に重複する土坑、および柱穴を結んだ範囲内にある土坑は15基ほどで、焼土址が2基ある。122土と121土は122土が古である。
- 検出状態：柱穴検出面より高い位置にある礫は黒色土層から黒褐色土層で検出された。また、柱穴は暗褐色土層で検出された。調査時に方形柱穴列の認識はなく、整理においてその存在が確



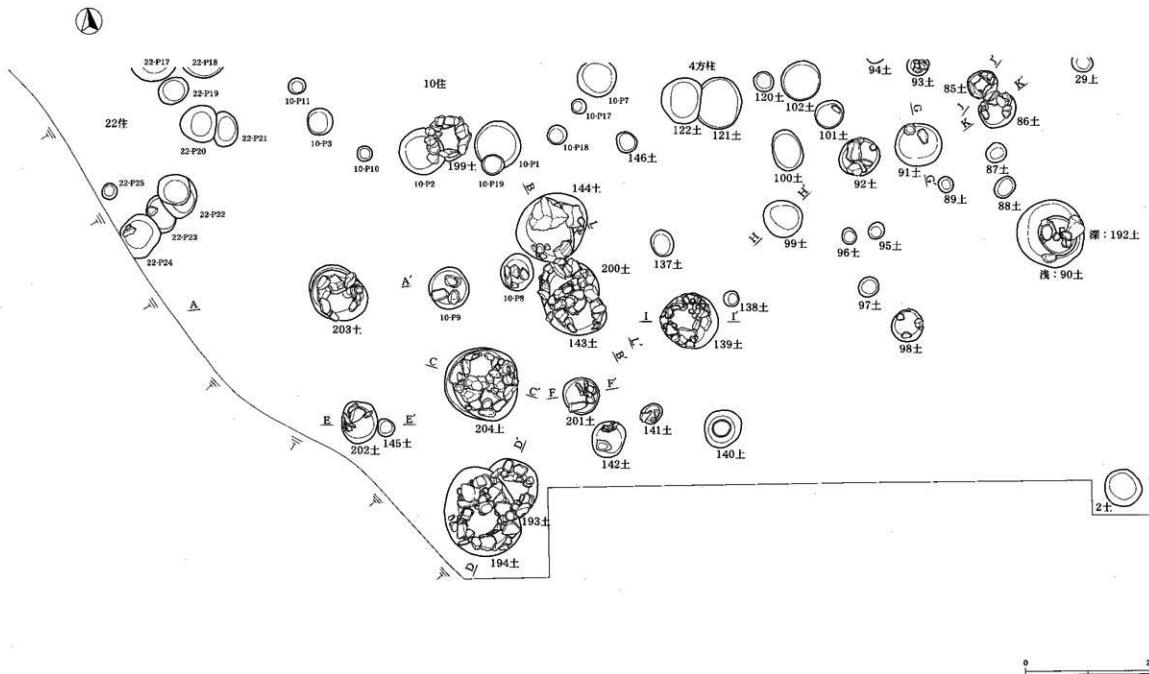
第41図 3区3号方形柱穴列と周辺の土壤・燒土跡 (1/60)



第42図 3区4号方形柱列と周辺の土坑・焼土坑 (1/60)



第43図 3区低地の土坑(根固めを伴う柱穴群)、土器集中、上面の縛(1/60)



第44図 3区低地の土坑（根固めを伴う柱穴群）(1/60)

認された。

形態・規模：柱穴配置は南北に長い六角形（亀甲形）を呈す。柱間は長軸2間、短軸1間である。平面規模は長軸長5.2m、短軸長3.4mを測る。長軸線上にある102土と132土は「棟持柱」と考えられ、その間隔は7.5mを測る。長軸方向はN-39°-Wである。

柱 穴：8基で構成される。平面規模は直径60~90cmを測る。3方柱のような柱の根固めは不明瞭である。覆土の断ち割りで柱痕が確認されたものは116土のみである。

付属施設：1焼土は本址のほぼ中央に位置する。平面規模は長軸80cm、短軸50cmを測る。約1m東に2焼土（80×40cm）、約2m北東に3焼土（90×70cm）があり、これらと関連するものならば本址に伴わない焼上量となる。長軸方向が3方柱と同じであることを重視し、本址に伴う焼上量と考えたい。検出面は黒色土層である。

時 期：堀之内I式以降と考えられる。

### ③ 配石・列石

#### 1配石（第24・25回）

位 置：斜面、G～I-88・89グリッドに位置する。

重複関係：187・188土と重複し、本址が新と考えられる。また、県埋蔵文化財センター調査の住居址と重複し、本址が新である。

検出状態：表土直下の黒色土層で存在が明らかとなった。保存状態は良好である。

形態・規模：北東から南西に長い指円形を呈す。長軸約3.8m、短軸約2.5mを測る。礫の密集度により北東と南西の配石に区分することも可能である。その場合、配石北側の掘方の括れと対応することとなり、切り合い関係をもつ配石となる可能性もある。角の丸い礫が主体を占めるが、傾斜に面して立てられた数枚の平石は注意される。

時 期：堀之内II式（～加曾利B I式）併行と考えられる。

#### 2配石（第24・25回）

位 置：斜面、H～J-89～91グリッドに位置する。

重複関係：18住と重複する。本址が新である。1列石に接するが、新旧関係があるのか判然としない。

検出状態：表土直下の黒色土層で存在が明らかとなった。保存状態は良好である。

形態・規模：南北に長い不整形を呈す。長軸約4m、短軸約2.5mを測る。空間を囲む北と南の配石に区分することも可能である。角の丸い礫が主体である。

備 考：2つの空間から土器が出土し、北側では一括土器が出土している。1配石との境界と、北側掘方の下端の括れが対応する可能性もある。1配石と同様に、掘方が単位または時間差を示すのかもしれない。

時 期：堀之内II式（～加曾利B I式）併行と考えられる。

#### 3配石（第24・25・28・32回）

位 置：斜面、G～I-92～98グリッドに位置する。

重複関係：12・13住参照。6焼土と重複する。礫が焼土に食い込むため、本址が新である。

- 検出状態**：道路建設と開田工事の法面にかかり、多くの礫が抜き取られていると考えられる。
- 形態・規模**：東西に延びる配石で、12・13住に伴う配石と考えられる。5配石につながる可能性もある。
- 12・13住の出入口部の南には、柱状の礫が立てられている。
- 備考**：配石は13住の床面から継ぐ面を切り、構築されたと考えられる。
- 時期**：堀之内Ⅱ式併行と考えられる。

#### 4配石（第24・25図）

- 位置**：斜面、J・K-98~100グリッドに位置する。
- 重複関係**：2列石に接するが、新旧関係があるのか判然としない。
- 検出状態**：配石の南側は削平され、一段低い面となっている。その際に多量の礫が抜き取られたものと思われる。また、配石から約2m南が開田工事で生じた法面となるが、表工を除去する際に、法面にかかり南側へ傾斜する多量の礫が確認されている。配石が残存部の南へ延びていたことは明白である。残存部では保存状態が良い。
- 形態・規模**：残存する長さは約5m、幅は約1.8mを測る。積み重ねられた礫が多く、据わりの良い礫を組み板状の礫を立てるものもみられる。
- 時期**：堀之内Ⅱ式（～加曾利BⅠ式）併行と考えられる。

#### 5配石（第24・25・27図）

2住参照

#### 6配石（第24・25・39・40図）

- 位置**：斜面、I～K-100～106グリッドに位置する。
- 重複関係**：11・22・25住と重複し、配石が新と考えられる。また、111・190・191・207・212土は、配石に沿って位置するため、配石と関係する土坑と考えられる。土坑は形状からみて、柱穴と判断される。
- 検出状態**：開田工事の客土に覆われ保存状態は非常に良い。ただし、西端は開田工事で生じた法面にかかり礫が失われていると考えられる。
- 形態・規模**：第Ⅲ章の冒頭で記したとおり、「斜面」と「低地」を画す配石である。
- 東西に長く、残存する長さは9m、最大幅は3mを測る。礫の大きさは30～80cmで、平均40～50cmである。配石は台地側の地山（整地面）を60cmほど掘り下げて構築されている。その法尻に板状の礫が石積みされる。3段積みまで確認できる。
- 石積みされた礫の西側に2住の出入口部へ通じる礫の「階段」がある。また石積みされた礫に接し、2箇所の礫集中がある。1箇所は10住へ向かってU字状に張り出す。南北2.5m、東西2mを測る。もう1箇所は「階段」の南で、配石中最大級の礫の周囲を大小の礫で囲むものである。
- 時期**：堀之内Ⅱ式（～加曾利BⅠ式）併行と考えられる。

#### ④ 埋設土器

##### 1号埋設土器（第39図）

位 置：斜面と低地の境、J-104グリッドに位置する。

重複関係：6配石と重複する。疊下から検出されたため本址が古と考えられる。

検出状態：6配石の疊を取り除いたところ、土器が確認された。

形態・規模：土器周囲の精査により掘方が確認されたため埋設土器とした。土器は正位に埋設される。

底部に高台がつくとみられ、この部分が欠落している。口縁部には対をなす突起がある。

口縁部の形は円形で、底部は四角形となる。外面ともに良く磨かれている。突起までの残存高は約10.5cm、口径は約11.5cm、底部は約7.5cm角を測る。

時 期：堀之内Ⅱ式併行と考えられる。

#### ⑤ 土器集中

##### 1号土器集中（第43図）

位 置：低地、F・G-107グリッドに位置する。

重複関係：143・200土と重複する。本址が新である。

検出状態：手掘りのレンチ調査で確認された。

形態・規模：約1.4m四方に土器片が集中する。その周囲に20~40cm大の角疊や亜角疊があり、土器片を開み据えられたように見えるが、位置関係以外に本址に伴う疊とする根拠は見出せない。それよりも、1箇所に土器がまとまり過ぎていることが注目される。まるで仕切板でも存在したかのようである。土器は最大15cmのレベル差をもち、その間に折り重なっている。総量は約25.5kgを測る。その中で図上復元できるものは僅かに4個体である。接合するものが少ないとみ、風化の進んだ土器が多いという特徴がある。地下水位の高い地点に位置することが影響しているのであろうか。

備 考：本址の東50~150cmの地点から、台石2点と石皿1点が出土した。台石は正位、石皿は逆位である。とともに原位置を保つ遺物と考えられる。また、重複する143・200土を含め、本址の南から西にかけて根固めの疊を伴う柱穴が群をなして検出された。現場では方形柱穴列と考えていたが、規則性をもつて配列する柱穴が見当たらないため、単独の土坑と考えている。本址とともに、低地の空間利用を考えるための良好な資料である。

時 期：堀之内Ⅱ式併行と考えられる。

#### ④ 平安時代

##### ① 住居址

###### 1号住居址（第45・46図）

位 置：J-L-93・94グリッドに位置する。

重複関係：3・12・23・24住を切っている。

検出状態：遺構の存在は平成8年度の試掘で確認されていたが、時代不明の落ち込みと報告されている。敷石住居址に伴う疊が露出し始めた面で、黒みの強い黒色土の落ち込みが検出された。覆土から平安時代の土器が出土し、帰属する時代が明らかとなった。遺構検出面は縄文時

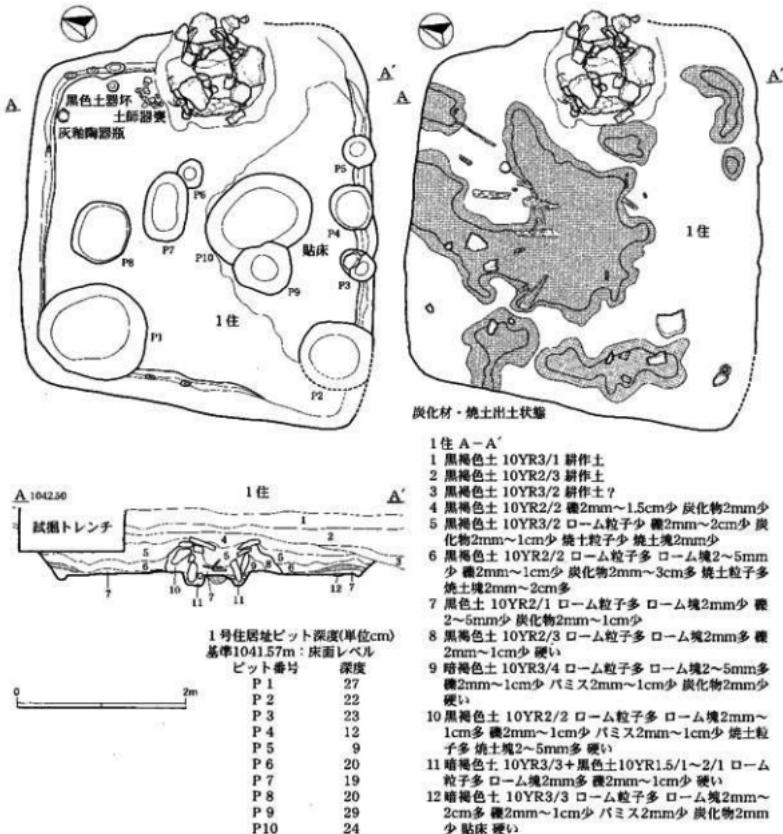
代後期前半の敷石住居址の覆土で、北側は暗褐色～褐色土層、他は黒色～黒褐色土層である。東壁と南壁の一部をレンチで削平している。

**形態・規模：**平面形態は隅丸方形を呈す。平面規模は南北長4.7m、東西長が4.7mを測る。カマドがある壁に直交する方向はN-75°-Eである。

**覆土：**カマドを含め、12層に分層された(A-A')。住居のほぼ全域に焼土層が確認された。

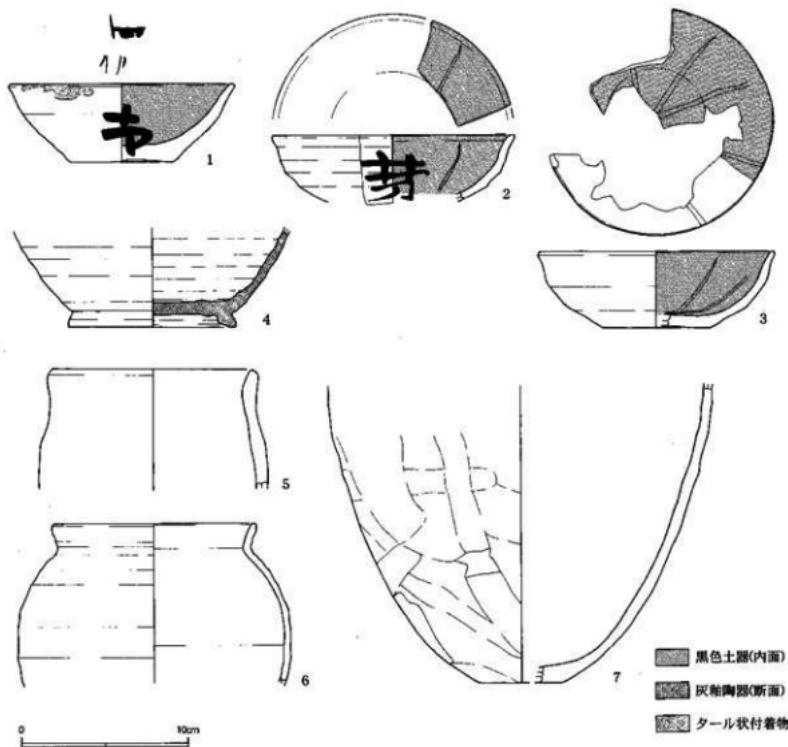
床面との間に厚さ10cm前後の黒色土層があり、焼土層はその上にのっている。焼土層内には炭化材が残存し、平面分布は放射状である。

**壁：**北壁と東壁の立ち上がりは明瞭であるが、南壁と西壁は黒色土層への掘り込みであり不明瞭である。壁の残存高は床面上5~45cmを測る。



第45図 3区1号住居址 (1/60)

- 周溝：東壁と西壁の一部を除き、周溝が検出された。深さもあり掘方は良好である。
- 床面：北側半分はローム漸移層からローム層につくられ、南側半分は黒色土層から黒褐色土層に  
ローム塊を多量に含む黒褐色土で貼床してつくられている。ほぼ平らで、全面硬い。
- カマド：石組みで、ローム塊を多量に含む黒褐色土で覆われている。天井にのせられた磚の一部が  
崩落しているが、袖の石は構築状態のまま残存している。火床は床面と同レベルで、焼土  
の残りは明瞭である。
- 柱穴：いわゆる「床下上坑」を含め、10基にピット番号を付した。P6からP10では貼床が確認  
された。柱穴は位置と規模からみてP3からP6と考えられる。
- 付属施設：ピット番号を付したP1・2などは貯蔵穴であろうか（小池）。
- 出土遺物：平安時代の遺物の出土量は非常に少ない。供膳具は土師器壺が2個体・黒色土器壺3個体分、  
貯蔵具は灰釉陶器瓶1個体、煮沸具は土師器小型壺3個体、長胴壺4個体分が出土している。  
そのうち6点を図示した。1～3は黒色土器壺である。うち、1・2は墨書き器であり、2・



第46図 3区1号住居址出土土器 (1/3)

3に暗文が施されている。1は内面を放射状に研磨しており滑らかである。口縁部にタル状の付着物が見られる。墨書きは外側の2ヶ所に、対面に書かれている。両面とも字の半分が消えているため、字は不明である。底部には糸切り痕があり、成形はなされていない。2は内面がよく磨かれており、放射状に暗文が施されている。外側に墨書きがあり、「井刀」とも読めそうだ。3は放射状に暗文が施されている。破片の一部が焼成を受けているようで、黒色が飛んでいる。底部に糸切りが残っている。4は灰釉陶器瓶で、胎土は須恵器に酷似している。高台は付高台で、底部はロクロで成形がなされている。体部にナデ痕がある。5・6は小型壺で、5は上部が割れたため、研磨して平にして再利用している。6はロクロ引きで作られている。7は長颈壺で、体部から底部まで木口削りで成形している。壺上部は横ナデ成形をしており、体部の削りはされていない。

本遺構の出土遺物の特徴は、出土量が少なく、供膳具の主体が黒色土器壺であることである。これらの黒色土器は墨書きと暗文がなされている（柳川）。

備考：本址は火災住居址であると考えられるが、床面と同様に壁面にも焼けた痕跡は見られない。  
時期：出土した土器からみて、9世紀中葉であると考えられる。

## 第4節 4区の遺構と遺物

### (1) 概要

遺構は住居址と土坑がある。住居址は1軒で縄文時代と考えられる。土坑は46基検出されている（第47～51図）。出土した土器は縄文土器に限定されるため、土器を伴う土坑は縄文時代と判断される。また、覆土の色調と縄目具合などから、他の土坑も縄文時代と考えられる。焼土址は1基ある（第48図）。土坑の一部を埋め戻し、2面で火が焚かれている。形態・覆土などからみて、貯蔵穴（1・6・20・22土など）・落し穴（2土）といった用途を推測できるものがある。4区では貯蔵穴とみられる土坑の数が突出している。一括土器や土器片を出土したものがあり、帰属時期を特定または推測できている。1土は曾利IV式併行、6・22・46土は曾利V式併行、20土は称名寺式併行と考えられ、4・7・8・10～12・23・28・32・40土は曾利III式～V式併行の間と考えられる。

### (2) 縄文時代

#### ①住居址

##### 27号住居址（第47図）

位置：K・L-177・178グリッドに位置する。

重複関係：46土と重複し、本址を切ることが確認されている。

検出状態：遺構検出面はローム層である。台地の南側肩部に位置し、約1/2が失われている。

形態・規模：形態は円形を呈し、規模は直径5m前後と推測される。出入口部が特定できず、主軸方向は不明である。

覆土：褐色に近い暗褐色土の單一層である（A-A'）。

壁：立ち上がりは不明瞭で、壁の残存高は床上5cm前後を測る。

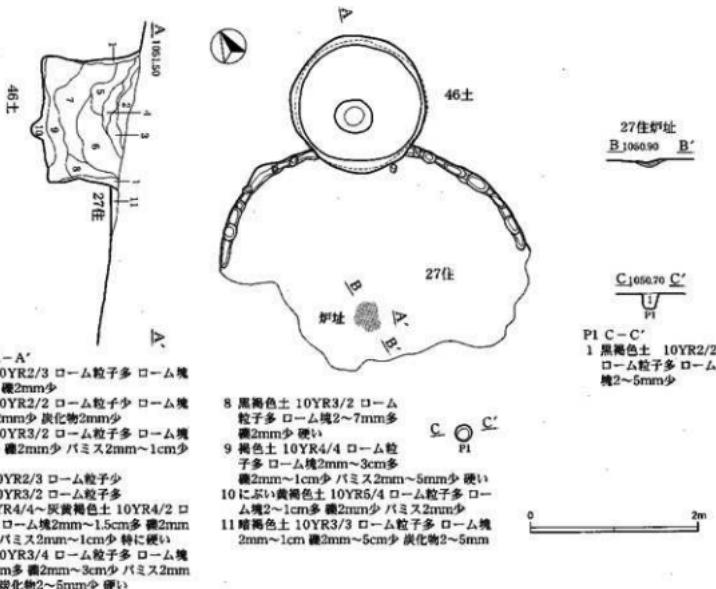
- 周 溝：深さがあり明瞭である。周溝内に小穴が連続している。
- 床 面：南側に緩傾斜する。残存部全面が硬い。
- 炉 址：地床炉である。火床は床面より若干低い。焼土は明瞭である。
- 柱 穴：床面が残存しない部分から小穴が検出された。位置と規模からみて本量の柱穴であると考えられる (27-P1)。

付属施設：なし。

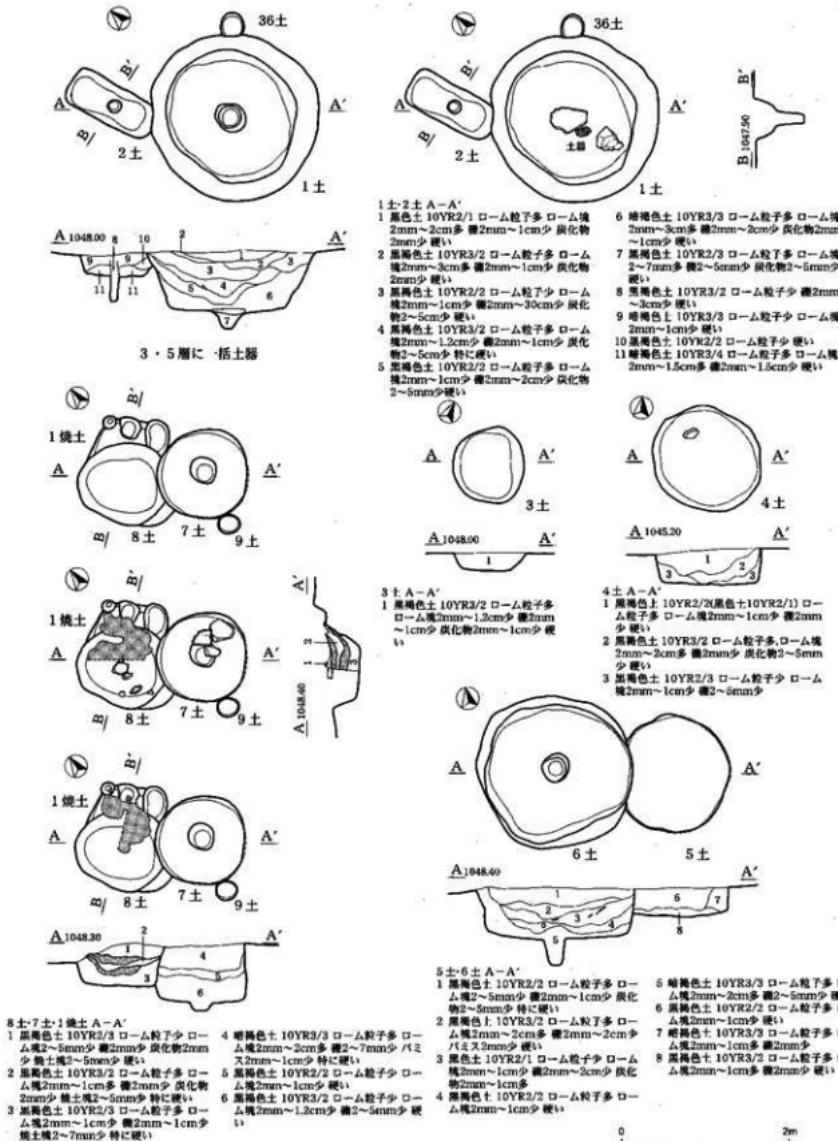
出土遺物：周溝から上器が1点出土している。

時期：出土した上器は称名寺式併行とみられるが、本址を切る46土は曾利V式併行と考えられる。

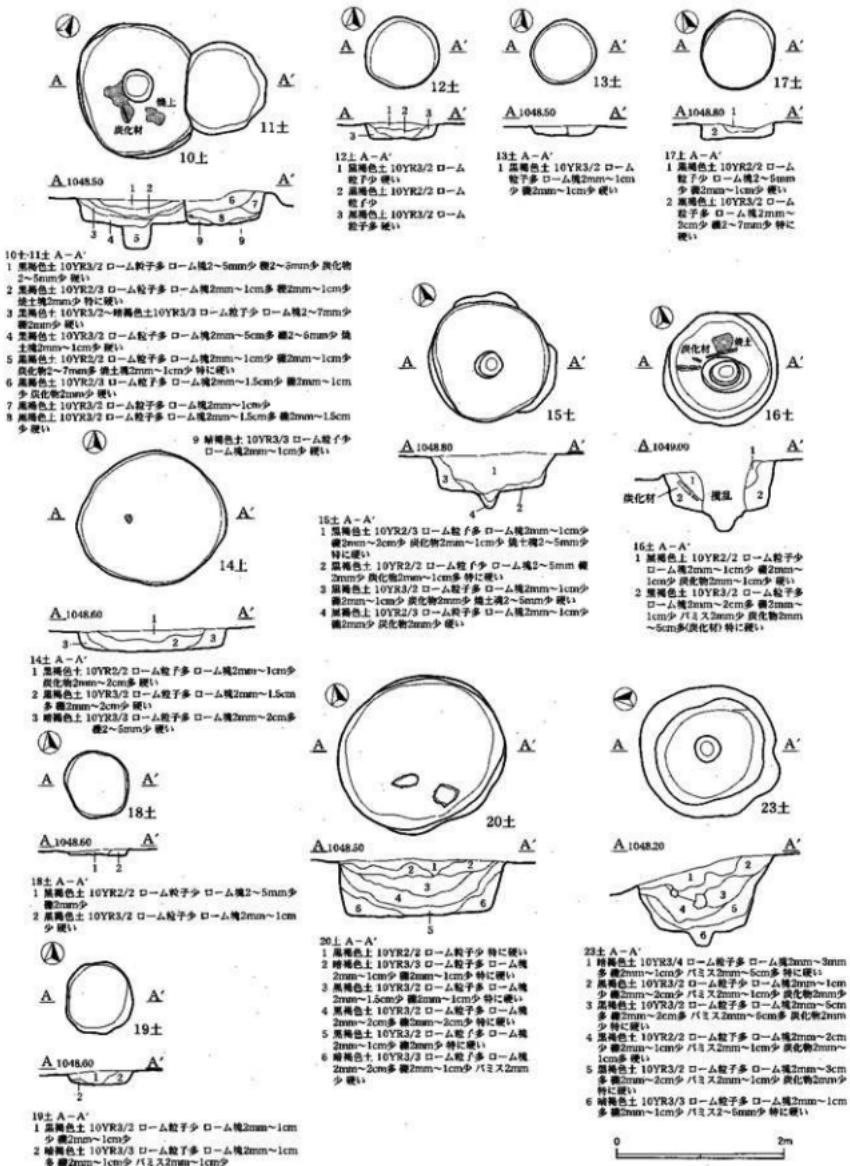
46土との切り合いを重視し、曾利V式併行以前と考えておく。



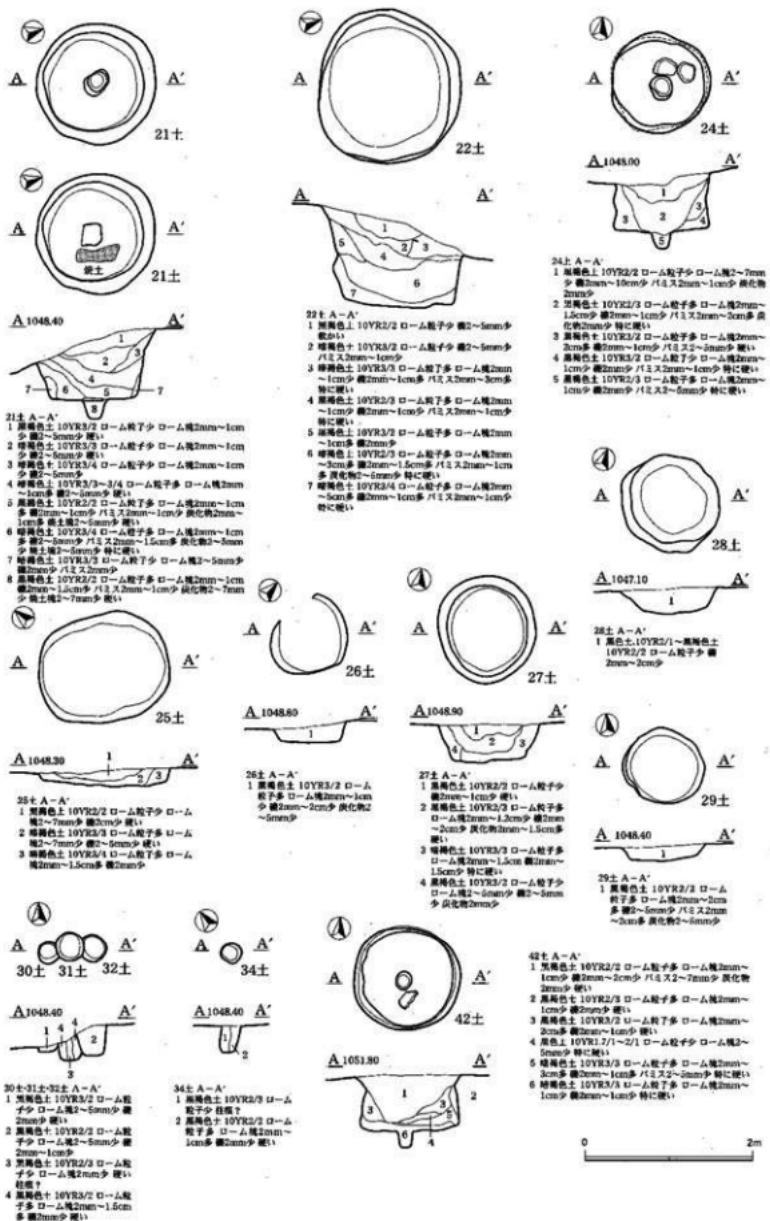
第47図 4区27号住居址、46号上坑 (1/60)



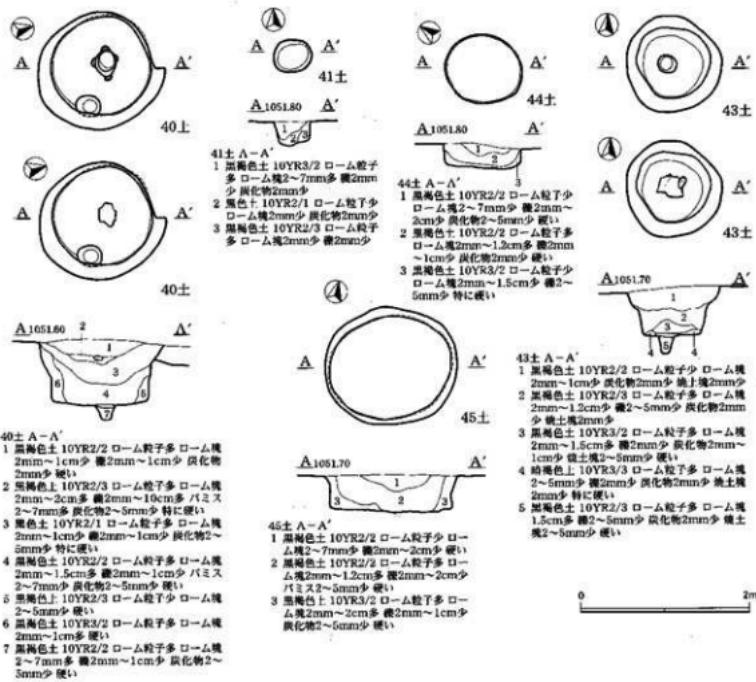
第48図 4区土坑(1)、1号焼上址 (1/60)



第49図 4区土坑(2) (1/60)



第50図 4区坑(3) (1/60)



第51図 4区土坑(4) (1/60)

表1 土坑計測表(1)

地区 地点	遺構 番号	位 置	口徑(cm)		底径(cm)		深さ (cm)	備 考
			長軸	短軸	長軸	短軸		
1A区	1土	シー(-50)	137	112	112	100	17	
	2土	シー(-50)	141	134	120	115	20	
1B区	3上	ルー(-46)	116	108	97	90	21	
	4下	ルー(-46)	192	175	137	136	33	
	5土	リ-(42)	23	22	12	10	28	
	6土	リ-(42)	28	23	18	12	19	
1C区	7下	7-(8)	99	95	91	77	19	
2区	1土	イ-114	173	144	160	136	22	
	2土	オカ-145	73	71	63	61	11	
	3土	イ-139	82	76	79	74	8	
	4上	キ-143	88	78	81	70	8	
	5土	イ-137-138	118	65	87	40	41	
	6土	キ-140	102	96	92	88	16	
	7土	キ-139	120		110		36	
	8土	キ-141	115	110	103	88	20	
	9土	ウ-139-140	133		108		37	
	10上	X-Y-135-136	102	81	97	77	36	
	11下	Y-134-135	89	78	76	73	15	
	12土	Z-7-131	119	110	105	101	27	
	13下	7-130	101	85	75	60	85	
	14土	エ-131	72	67	52	47	64	1方柱の柱穴
	15上	ウ-130	84	77	73	69	4	
	16土	カ-4-132	119	112	104	100	25	
	17土	キ-131	105	97	90	80	18	
	18上	キ-130	154	83	146	66	23	
	19土	キ-130-131	79	76	51	50	66	1方柱の柱穴
	20土	キ-130	80	79	57	45	55	1方柱の柱穴
	21土	エ-131	41	37	33	29	17	
	22下	キ-131-132	70	53	45	33	60	1方柱の柱穴
	23土	ウ-132	70	57	43	43	39	1方柱の柱穴
	24土	ウ-131	67	60	38	37	53	1方柱の柱穴
	25土	キ-131	46	40	35	27	20	
	26土	ウ-130	85	56	74	50	18	
	27下	キ-129	102	93	94	73	18	
	28土	キ-129	39	36	28	26	22	2方柱の柱穴
	29土	カ-127-128	158	113	90	42	66	
	30土	ウ-128	111	110	88	88	26	
	31土	エ-130	52	51	34	31	69	1方柱の柱穴
	32下	ウ-129	26	23	19	18	23	
	33土	ウ-129	41	36	29	28	27	2方柱の柱穴
	34土	コ-128-129	61	57	20	17	25	
	35土	キ-129	101	87	87	76	24	
	36土	コ-128	39	35	32	23	25	
	37下	キ-128	76	52	57	27	16	
	38土	キ-128	41	38	29	24	18	
	39土	コ-129	79	37	55	30	18	
	40下	キ-128	43	35	34	28	21	2方柱の柱穴
	41土	キ-128	53	40	45	31	25	2方柱の柱穴
	42下	キ-128	38	35	27	24	20	
	43土	Z-131	82	54	73	35	4	
	44下	Z-130	39	37	32	29	15	
	45土	7-126	134	127	106	90	49	
	46土	ウ-124-125	124		67	60	52	
	47下	コ-127	54	41	33	23	24	
	48土	コ-126	95	94	77	66	31	
	49上	キ-126	49	48	41	38	18	
	50土	ウ-127	50	38	33	24	19	
	51土	シ-125	55	53	36	35	20	
	52土	キ-124	126	125	98	95	51	
	53土							欠番
	54土							欠番
	55土							欠番
	56土							欠番
	57土	イ-125	130	126	124	110	25	

表2 土坑計測表(2)

58土	キ-130	26	22	23	17	8	2方柱の柱穴
59土	キ-130	35	32	26	26	21	2方柱の柱穴
60土	シ-126	32	24	18	12	22	
61土	キ-124	41	36	32	28	22	
62土	キ-126	41	33	28	23	14	
63土	シ-125	38	26	30	18	17	
64土	タ-124	42	41	31	23	26	
65土	#-119-120	156	145	116	116	55	
66土	キ-119	191	146	152	97	67	
67土	エ-121	88	84	66	66	39	
68土	イ-119						欠番、2区1塊土に改名
69土	Y-113	125	124	80	73	46	
70土	キ-115	99	75	85	65	21	
71土	キ-119	154	145	96	93	70	
72土	キ-112	147	130	133	113	16	
73土	キ-127	36	36	31	27	10	
74土							欠番
75土	Z-131	35	30	24	21	20	
76土	タ-130	31	22	17	10	23	
77土	タ-130	29	17	14	11	14	
78土	エ-117	108	104	66	62	52	
79土	キ-117	145	129	97	91	53	
80土	タ-116-117	205	146	110	72	96	
81土	タ-115	213	188	120	80	95	
82土	シ-118	150	120	87	42	68	
83土	タ-124	127	117			22	
84土							欠番
85土	タ-イ-125	88	72	70	64	62	深度基準：6往來面
86土	キ-115	55	49	46	30	23	
87土	エ-114	93	52	88	46	13	
88土							欠番
89土	キ-110	168	127	104	68	76	
90土	タ-108	178	162	164	152	18	
91土	タ-107	150	143	143	129	10	
92土	タ-109	130	92	90	63	55	
93土	タ-109	228	178	121	63	83	
94土	タ-107	227	190	132	80	96	
95土	キ-112	203	70	163	30	41	
96土	キ-128	43	41	31	29	13	
97土	Z-116	84	74	61	35	29	
98土	タ-105	206	160	127	77	93	
99土	タ-114	90	88	71	71	47	
100土	エ-139-140	101	100	86	84	20	
101土	シ-127	24	22	18	14	23	
102土	キ-129-130	40	36	29	28	14	
103土	タ-121	123	75	80	33	53	
104土	Y-106	48	47	38	28	11	
105土	Y-105	41	40	34	31	10	
106土	Y-105	37	37	29	27	10	
107土	X-105	50	45	35	32	35	
108土	X-105	45	40	33	30	17	
109土	Y-106	32	27	25	23	4	
110土	タ-119	49	38	25	21	34	
111土							欠番
112土	タ-105					26	
113土	キ-タ-104-105	90	88	52	45	35	
114土	キ-104	121	68	101	58	34	
115土	タ-117	88	71	57	53	30	
116土	タ-113	70	64	61	50	23	
3区	1土	E-113	54	47	44	42	27
2土	D-E-111	60	58	45	38	28	
3土	I-115	23	23	16	15	19	
4土	J-115	35	30	20	19	22	
5土	H-113	30	29	23	21	27	
6土	H-113	40	37	28	27	43	
7土	I-113	51	45	35	32	41	
8土	J-114	76	75	66	66	71	3方柱の柱穴、深度基準1039.68m：67土検出レベル

表3 土坑計測表(3)

9±	J・K-113	25	25	17	16	6
10±	J・K-113	35	35	25	24	48
11±	J-113	32	31	20	20	31
12±	I・J-113	63	61	52	46	77 3方柱の柱穴、深度基準1039.68m : 67土検出レベル
13±	I-113	34	29	23	19	25
14±	I-113	38	35	26	26	24
15±	I-112	37	35	27	25	13
16±	G-112	37	31	22	22	21
17±	G・H-112	33	32	25	21	30
18±	H-112	27	26	18	17	19
19±	I-112	33	28	21	19	23
20±	I-112	40	38	28	23	48
21±	I-112	94	92	73	72	93 3方柱の柱穴、深度基準1039.68m : 67土検出レベル
22±	J-112	30	28	22	20	12
23±	J-112	19	17	14	13	13
24±	J-112	25	24	17	16	25
25±	J-112	73	70	55	52	21
26±	I-112	28	20	20	15	10
27±	I-111	28	27	22	21	12
28±	I-111	39	35	29	25	18
29±	H-111	35	29	22	20	23
30±	I-111	40	36	23	21	34
31±	I-111	39	28	19	19	12
32±	I-111	48	41	32	27	16
33±	J-111	45	43	30	28	27
34±	J-111	28	24	29	17	7
35±	J-111	26	24	17	17	15
36±	J・K-111	57	52	50	46	79 3方柱の柱穴、深度基準1039.68m : 67土検出レベル
37±	K-111-112	40	35	33	24	
38±	K-112	29	27	18	17	11
39±	K-112	38	35	25	25	30
40±	K-112	38	38	32	26	29
41±	L-113	33	32	23	23	26
42±	L・M-113	98	96	78	76	64 3方柱の柱穴、深度基準1039.68m : 67土検出レベル
43±	N-114	55	51	39	39	10
44±	N114	40	38	27	24	12
45±	P-115	40	39	27	24	15
46±	P-114	30	28	22	19	11
47±	P-114	37	34	26	23	18
48±	P-113	31	29	22	20	6
49±	M-112	29	28	20	20	20
50±	O-111	39	37	27	25	31
51±	N-110	26	24	18	16	22
52±	N-110	34	26	26	18	17
53±	Q-114	34	33	23	20	11
54±	M-110	26	24	16	14	22
55±	M-111	35	34	25	23	19
56±	M-111	30	26	22	19	8
57±	M-112	31	29	22	18	15
58±	L-112	64	60	43	42	71 3方柱の柱穴、深度基準1039.68m : 67土検出レベル
59±	L-112	25	22	13	13	10
60±	I-110				10	
61±	K-112	39	37	28	27	28
62±	K-112	35	33	28	24	19
63±	K-113	61	55	52	47	45 3方柱の柱穴、深度基準1039.68m : 67土検出レベル
64±	L-112	39	35	25	19	27
65±	L-112	29	27	20	18	6
66±	L-111	27	26	19	18	19
67±	L-111	109	102	101	95	66 3方柱の柱穴、深度基準1039.68m : 67土検出レベル
68±	K-111	43	43	29	28	43
69±	K-111	29	24	22	18	17
70±	K-111	38	34	28	25	28
71±	K-111	35	33	24	23	15
72±	K-111	34	29	21	18	23
73±	K-110	22	21	14	13	11
74±	J-110	34	33	23	23	18
75±	J-110	27	26	16	14	13

表4 土坑計測表(4)

76土	J-110	60	50	41	39	52	
77土	I-111	48	45	32	29	21	
78土	I-110	48	40	40	32	37	
79土	I-110	25	24	22	20	15	
80土	I-110	44	36	30	24	22	
81土	I-110	37	32	23	19	38	
82土	I-110	52	50	43	38	44	
83土	H-110	44	42	25	24	52	
84土	H-110	40	35	25	23	46	
85土	H-110	46	42	35	33	39	
86土	G・H-110	60	52	44	38	29	
87土	G-110	30	28	21	20	14	
88土	G-110	38	30	33	22	15	
89土	G-110	27	24	16	15	24	
90土	F・G-111	103	98	87	84	52	
91土	G-110	77	68	62	51	52	
92土	G-109	67	60	58	47	36	
93土	H-110	36	32	25	21	29	
94土	H-109	34	32	25	23	37	
95土	G-109	28	24	18	17	17	
96土	G-109	23	22	17	17	25	
97土	F-109	35	31	24	22	37	
98土	F-110	50	48	39	38	68	
99土	G-109	62	59	47	38	41	
100土	G-109	57	46	55	40	40	
101土	G-109	48	43	39	36	42	
102土	H-109	66	62	57	54	4方柱の柱穴、深度基準1039.39m：130土検出レベル	
103土	H-109	79	67	68	59	56	
104土	I-109	24	22	16	19	13	
105土	I-109	33	30	20	18	35	
106土	J-109	35	33	23	22	31	
107土	K-109	46	40	35	30	25	
108土	L-109	42	38	32	27	27	
109土	L-109	50	45	39	36	20	
110土	L-109	53	51	38	38	28	
111土	L-106	57	47	21	21	40	
112土	M-107	46	43	37	31	19	
113土	K-108	44	41	32	29	22	
114土	J-109	29	26	19	18	14	
115土	J-108	33	29	24	21	19	
116土	J-108	62	61	48	47	4方柱の柱穴、深度基準1039.39m：130土検出レベル	
117土	I-108	34	31	18	16	27	
118土	I-108	29	27	20	18	16	
119土	H・I-108	83	70	58	58	56	
120土	H-108	33	30	24	22	28	
121土	H-108	83	80	75	68	79	
122土	H-108	73	71	53	50	4方柱の柱穴、深度基準1039.39m：130土検出レベル	
123土	H-107	39	33	27	23	24	
124土	H-107	40	34	27	23	17	
125土	H-107	33	33	20	9		
126土	J-107	73	68	62	56	4方柱の柱穴、深度基準1039.39m：130土検出レベル	
127土	I-107	40	35	28	25	11	
128土	I-107	43	39	32	29	20	
129土	J-108	35	34	25	25	14	
130土	K-107	62	57	61	57	4方柱の柱穴、深度基準1039.39m：130土検出レベル	
131土	K-107	27	26	20	19	28	
132土	K-106	70	66	52	50	4方柱の柱穴、深度基準1039.39m：130土検出レベル	
133土	J-107	36	32	27	23	17	
134土	I-106	45	45	36	34	38	
135土	J-106	90	75	77	64	4方柱の柱穴、深度基準1039.39m：130土検出レベル	
136土	I-109	68	60	42	42	4方柱の柱穴、深度基準1039.39m：130土検出レベル	
137土	F-108	42	37	32	27	27	
138土	F-108	25	24	17	14	24	
139土	F-108	89	85	71	59	72	
140土	E-108	65	56	42	41	50	
141土	E-107・108	36	31	27	22	23	
142土	E-107	61	53	43	41	40	

表5 土坑計測表(5)

143土	F-107	90	87	73	70	120	
144土	F・G-107	119	105	77	65	99	
145土	E-105	28	27	20	19	25	
146土	G-107	34	33	27	23	20	
147土	I-108	34	30	21	19	26	
148土							欠番 新: 22-P24
149上							欠番 新: 22-P22
150土							欠番 新: 22-P20
151土							欠番 新: 22-P21
152土							欠番 新: 22-P23
153土							欠番 新: 22-P18
154土							欠番 新: 22-P19
155土							欠番 新: 22-P17
156土							欠番 新: 22-P16
157土							欠番 新: 22-P13
158土							欠番 新: 22-P15
159土							欠番 新: 22-P9
160土							欠番 新: 22-P12
161土							欠番 新: 22-P8
162土							欠番 新: 22-P25
163土							欠番 新: 22-P7
164土							欠番 新: 22-P2
165土							欠番 新: 22-P1
166上							欠番 新: 22-P3
167土							欠番 新: 22-P6
168土							欠番 新: 22-P10
169上							欠番 新: 22-P5
170土	J-102	66	63	46	44	81	
171土							欠番 新: 22-P11
172土							欠番 新: 22-P14
173土	I-108	37		27		37	
174土	J-98	49	42	33	31	78	
175上							欠番 新: 22-P4
176土	A-90	114	100	85	70	63	
177土	H-I-108-109	299	195	264	166	48	
178土	H-103					47	
179土	M-96	20	18	21	13	76	
180土	M-97	88	87	87	83	58	
181土	M-98	36	32	25	24	100	
182土	N-100	47	46	48	41	91	
183土	N-104-105	117	117	127	125	26	
184土	K-100	32	23	21	15	23	
185土	L-99	52	48	35	33	71	
186土	K・L-98	61	50	37	34	64	
187土	H-89	29	28	19	19	25	
188土	H-89	34	32	26	24	8	
189土	I-98	18	15	16	13	24	
190土	J-103	66	62	51	49	60	
191土	J-102	34	30	23	20	48	
192土	F-111	65	57	57	50	73	
193土	D・E-106	85		62		74	
194土	D・E-106	147	117	105	80	96	
195土	J-101	45		32		44	
196土	F-113	50	33	30	25	28	
197土	I-97	67	56	53	42	26	
198土	S-113	98	85	57	48	19	
199土	G-106	70		50		45	回: 1方柱 P1 深度基準: 1039.15m: 検出レベル
200土	F-107	93		68		120	回: 1方柱 P2 深度基準: 1039.16m: 検出レベル
201土	E-107	60	58	54	52	85	回: 1方柱 P3 深度基準: 1039.17m: 検出レベル
202土	E-105	70	67	50	48	84	回: 1方柱 P4 深度基準: 1039.18m: 検出レベル
203土	F-105	90	86	80	59	98	回: 1方柱 P5 深度基準: 1039.19m: 検出レベル
204土	E-106	121	113	96	89	110	回: 1方柱 P6 深度基準: 1039.20m: 検出レベル
205土	J-103						伏堀
206土	H-89-90	42	32	23	21	25	
207土	K-104	41	37	30	28	27	回: 11-P25
208土	L-101	107	100	83	75	29	
209土	L-102-103	98	80	83	65	42	

表6 土坑計測表(6)

210±	L-95-96	64	62	48	46	52	田:3c-P 59
211±	M-102	34	32	25	25	54	田:2-P 17
212±	J-105	57	53	48	46	46	田:11-P 27
213±	J-105	36	33	23	22	21	田:11-P 26
214±	M-102	40		35		15	
215±	M-103	37	34	27	25	57	田:2-P r
216±	M-102	62		40	40	40	田:2-P t
217±	L-102	46		35		19	田:2-P s
218±	L-102	61	56	52	50	30	
219±	K-99	40	38	31	31	14	
4A区	1±	4-148	205	197	146	134	83
2±	4-148	112	48	93	28	30	
3±	2-4-147	91	86	78	61	27	
4±	2-4-148	131	125	119	107	43	
5±	2-4-149-150	140	136	137	132	37	
6±	2-4-149	185	131	160	140	64	
7±	2-4-149	112	107	103	101	64	
8±	2-4-149	111	97	83	63	46	
9±	2-4-149	26	23	24	18	19	
10±	2-151	169	149	150	140	33	
11±	2-150-152	112	105	97	94	32	
12±	2-151	88	87	80	76	25	
13±	2-152	79	76	70	68	11	
14±	2-154	183	166	168	154	29	
15±	2-156	155	153	138	124	46	
16±	2-158	137	137	108	107	61	
17±	2-158	94	87	84	84	22	
18±	2-158	83	74	78	70	7	
19±	2-7-159	87	82	78	68	16	
20±	2-154-155	200	188	175	160	76	
21±	2-153	145	143	108	105	86	
22±	2-151-152	185	170	142	132	120	
23±	2-150	164	160	144	97	93	
24±	2-148-149	122	118	115	110	70	
25±	2-150	156	129	147	111	25	
26±	2-155	93	90	85	73	26	
27±	2-2-156	130	117	100	86	48	
28±	2-157	116	116	82	79	47	
29±	Y-163	99	90	80	79	22	
30±	2-149	36	27	20	18	14	
31±	2-149	34	33	30	24	41	
32±	2-149	33	31	28	23	40	
33±	2-149	21	21	18	16	10	
34±	2-149	24	23	19	16	33	
35±	2-149	26	21	19	16		
36±	2-148	30	29	25	25	21	
37±	2-149	23	21	18	15		
38±	2-149	27	27	22	19	13	
39±	2-147	34	28	25	18	21	
4B区	40±	T-177-178	152	141	118	115	81
41±	S-178	45	38	36	30	23	
42±	R-178-179	130	129	122	120	67	
43±	Q·R-177	115	114	73	72	61	
44±	Q-178	93	83	88	80	31	
45±	P·Q-179	158	143	148	124	44	
46±	L-177-178	167	160	157	153	121	

表7 3区住居址ピット計測表(I)

地区 地点	造構 番号	位 置	口径(cm)		底径(cm)		深さ (cm)	備 考
			長袖	短袖	長袖	短袖		
1住	P1	L-93	130	112	92	76	27	深度基準1041.57m:床面
	P2	J-K-93-94	91	86	57	52	22	
	P3	J-K-94	44	35	19	13	23	
	P4	K-94	52	51	43	37	13	
	P5	K-95	39	36	20	16	9	
	P6	L-94	35	30	15	13	20	
	P7	L-94	84	50	59	28	19	
	P8	L-94	68	60	32	31	20	
	P9	K-94	130	98	91	65	29	
	P10	K-94	73	68	54	35	24	
2住	P1	L-102	49	40	30	26	119	I:2-Pg、深度基準1041.70m:2-P10検出レベル
	P2	L-102	61	—	27	—	105	I:2-Pi
	P3	L-101	42	39	21	21	115	I:2-Pe
	P4	K-101-102	48	46	19	19	102	I:2-Pf
	P5	L-101	41	32	24	18	105	I:2-Pb
	P6	L-100	20	18	14	11	70	I:2-Pa
	P7	L-100	35	28	22	18	65	I:2-P18
	P8	L-100	20	18	12	11	65	I:2-Pk
	P9	M-100	35	31	18	18	85	I:2-P1
	P10	M-101	24	21	13	11	57	I:2-P7
	P11	M-101	27	23	12	10	73	I:2-P12
	P12	M-101	22	21	12	12	53	I:2-Pz
	P13	M-102	33	—	25	—	91	I:2-P13
	P14	M-102	42	—	30	—	68	I:2-Pn
	P15	L-102	45	43	32	30	88	I:2-Pm
	P16	L-102	30	24	28	22	92	I:2-Pz
2-17-26住	P1	M-102	28	25	24	16	92	I:2-P9、深度基準1041.70m:2-P10検出レベル
	P2	M-102	20	17	9	9	42	I:2-P11・Pた
	P3	M-102	21	20	11	8	61	I:2-P11
3住	P1	I-95	51	46	35	32	124	I:3c-P32、深度基準1041.18m:出入口部の敷石レベル
	P2	I-94	73	54	39	34	127	I:3c-P50
	P3	I-93-94	68	61	42	41	121	I:3c-P40
	P4	J-K-93	64	61	31	26	101	I:3c-PA
	P5	K-94	48	44	25	24	100	I:3c-PB
	P6	K-95	62	54	30	30	113	I:3c-PC
	P7	J-95	58	57	53	49	114	I:3c-P44
10住	P1	G-106	75	73	63	61	101	I:10-P1A、深度基準1039.38m:第3南の硬化面レベル
	P2	G-106	73	68	51	49	104	I:10-P2
	P3	G-105	43	40	33	30	94	I:10-P4
	P4	I-105	62	58	45	44	81	I:10-P8
	P5	I-106	62	53	30	28	90	I:10-P10
	P6	I-107	52	50	33	31	84	I:10-P12
	P7	H-107	62	60	48	43	84	I:10-P14
	P8	F-106	60	52	38	38	110	I:10-P17
	P9	F-106	67	65	55	53	93	I:10-P18
	P10	G-105	25	24	17	17	76	I:10-P3
	P11	H-105	28	25	18	17	65	I:10-P5
	P12	H-105	29	27	21	20	62	I:10-P6
	P13	H-105	30	28	21	20	80	I:10-P7
	P14	I-105	32	30	23	21	38	I:10-P9
	P15	I-106	22	20	14	14	43	I:10-P11
	P16	H-107	30	28	20	20	36	I:10-P13
	P17	H-107	24	24	15	13	52	I:10-P15
	P18	G-107	32	31	22	22	63	I:10-P16
	P19	G-106	37	32	28	28	102	I:10-P18
12住	P1	I-95	104	93	87	75	156	I:12-P1、深度基準1041.48m:12-P5検出レベル
	P2	I-94	105	79	98	73	243	I:12-PH
	P3	I-93	117	111	95	87	153	I:12-PF
	P4	J-92	112	103	65	64	146	I:12-PD
	P5	K-L-92	130	109	70	69	152	I:12-PA
	P6	L-93	143	120	93	92	146	I:12-PB
	P7	L-95	127	121	62	60	147	I:12-PC
	P8	K-96	129	112	42	37	136	I:12-PE
	P9	J-96	147	123	77	71	176	I:12-PG

表8 3区住居址ピット計測表(2)

	P10	I-94					IH: 3c-P 55
	P11	I-93	28	26	18	16	74
	P12	I-92	35	30	20	15	78
	P13	J-92	39	33	22	21	67
	P14	K-92	41	36	20	18	53
	P15	K-92	38	37	19	17	56
	P16	L-92	40	35	26	18	55
	P17	L-93	36	31	17	16	49
	P18	L-93	42	38	25	22	55
	P19	M-94	40	38	16	15	75
	P20	M-94	47	45	20	20	78
	P21	M-94	45	40	27	20	68
	P22	L-95	27	26	15	14	53
	P23	L-95	22	20	14	13	75
	P24	L-96	27	20	10	9	79
	P25	K-96	30	16	18	12	95
	P26	I-95	28		18		123 IH: 3c-36
	P27	P	I-95	77	57		128
	P28	K-96-97	138	124	94	93	101
	P29	H-I-92	162	147	160	102	75
	P30	M-95	36	30	31	23	130
	P31	L-92	43	42	27	25	82
13住	P1	I-95	104	93	87	75	202 IH: 12-P1、深度基準1040.94m : 13-P6南の敷石レベル
	P2	I-94	105	79	98	73	189 IH: 12-PH
	P3	I-93	97	82	64	58	189 IH: 13-P14
	P4	J-93	102	89	48	47	157 IH: 13-P9
	P5	K-93	73	67	50	44	103
	P6	K-94	77	68	43	41	92
	P7	K-95	103	93	43	37	130
	P8	J-K-96	82	70	79	65	184 IH: 13-PC
	P9	I-96	102	98	76	71	211 IH: 13-P11
	P10	J-93	42	39	23	22	26 IH: 13-P12
	P11	K-93	33	30	19	17	2 IH: 13-P1
	P12	K-93	31	28	15	13	12 IH: 13-P2
	P13	K-94	29	28	13	13	11 IH: 13-P3
	P14	K-94	40		25		13 IH: 13-P4
	P15	K-94	30	28	16	14	4 IH: 13-P10
	P16	L-94	33	29	22	19	9 IH: 3c-P23
	P17	K-94	24	21	13	11	42 IH: 13-P8
	P18	K-L-95	30	28	19	18	33 IH: 3c-P52
	P19	K-95	25		21		28 IH: 3c-P51
	P20	K-95	31	25	16	14	51 IH: 3c-P49
	P21	K-96	32	29	23	19	73 IH: 3c-P33
	P22	I-95	77		57		74
14住	P1	H-95	93	58	58	39	144 IH: 14-P7、深度基準1040.80m : 14-P19検出レベル
	P2	H-95	82	61	56	40	146 IH: 14-P6
	P3	H-94	95	76	61	48	156 IH: 14-P5
	P4	J-93	73	56	35	31	126 IH: 3c-P35
	P5	J-K-94	75	68	47	40	143 IH: 14-P1
	P6	J-k-96	86		83		124 IH: 14-P4
	P7	I-96	73	66	43	38	160 IH: 14-P8
	P8	H-95	30	38	16	16	123 IH: 16住内支柱穴2
	P9	H-95	51		39		122 IH: 15住東側P
	P10	H-94	36	35	24	23	126 IH: 15-16住内支柱穴3
	P11	H-93	31	21	21	18	103 IH: 15-16住内支柱穴1
	P12	J-94	45	38	17	15	64 IH: 14-P2
	P13	K-95	32		18		62 IH: 14-P3
	P14	H-96	30	30	20	19	118 IH: 16住内支柱穴3
	P15	J-93	23	20	15	15	12 IH: 3c-P63
	P16	J-93	26	24	17	16	4 IH: 3c-P64
	P17	K-94	29	23	22	17	11 IH: 3c-P62
	P18	K-95	29	26	21	19	11 IH: 3c-P61
	P19	K-95	25	23	18	16	2 IH: 3c-P60
15住	P1	F-G-92	108	104	68	58	149 IH: 南断面P1、深度基準1040.33m : 15-P2東脇敷石レベル
	P2	H-91	81	78	53	50	114 IH: 15-P1
	P3	H-I-92	87	83	52	41	120 IH: 15-P2
	P4	H-I-93-94	78	70	46	46	146 IH: 15-P3

表9 3区住居址ピット計測表(3)

	P5	G-94	62	50	34	34	155	IH: 15-P4
	P6	I-92	25	21	15	14	56	IH: 15住支柱穴
	P7	H-91		32			22	
	P8	H-91	33	28	15	14	38	IH: 15住支柱穴1
	P9	H-91	31		12		12	
	P10	H-92	31	28	26	20	37	IH: 15住支柱穴2
	P11	I-92	38	38	31	30	49	IH: 15住支柱穴3
	P12	G-91	33	31	25	23	47	IH: 15住支柱穴
16住	P1	H-93	85	76	43	41	104	IH: 16-P3、深度基準1040.03m: 16-P2東脇敷石レベル
	P2	I-94	60	47	37	32	128	IH: 16-P2
	P3	I-95-96	78	64	34	28	117	IH: 16-P1
	P4	H-97	46	39	23	22	109	IH: 南断面P3
	P5	G-93	25	25	16	26	70	IH: 南断面P4
	P6	H-94	28	27	18	18	45	IH: 15-16住内の支柱穴2
	P7	I-95-96	26				56	IH: 16住支柱穴1
	P8	I-96	31	29	23	22	56	IH: 16住支柱穴Pa
17住	P1	L-102	50	46	22	20	119	IH: 2-Pv、深度基準1041.70m: 2-P10検出レベル
	P2	L-102	37	34	27	24	101	IH: 2-Pu
	P3	L-102	53	43	23	23	119	IH: 2-Ph
	P4	L-101	51	40	22	20	103	IH: 2-P17
	P5	L-101	24	20	13	12	87	IH: 2-P15
	P6	L·M-101	38	36	20	18	96	IH: 2-Pc
	P7	M-101	36	28	25	25	82	IH: 2-Ps
	P8	M-101	30	25	15	14	102	IH: 2-P3·Pch
	P9	M-101	31		22		83	IH: 2-Pse
	P10	M-101	32	29	15	14	84	IH: 2-P4
	P11	M-101	33	28	22	20	109	
	P12	M-101	20	17	13	12	65	IH: 2-Ps
	P13	M-102	47	39	39	35	92	IH: 2-P10
	P14	M-102	19	18	12	12	41	IH: 2-Pki
	P15	M-102	67	54	46	42	90	
	P16	M-102	32	30	15	15	66	IH: 2-Po
	P17	M-103	28	23	18	15	95	IH: 2-Pz
	P18	M-102-103	48	38	32	27	81	IH: 2-Pp
	P19	M-103	22	21	14	13	72	IH: 2-Poh
	P20	L-103	36	28	21	19	81	IH: 2-Pz
	P21	L-103	32	26	25	19	116	IH: 2-Pka
	P22	L-103	72	65	53	35	108	IH: 2-Px
	P23	L-103	43	38	31	24	101	IH: 2-Pw
18住	P1	G-92	54	44	31	28	183	IH: 18-P2、深度基準1040.90m: 18-P5検出レベル
	P2	F-G-92	108	104	68	58	193	IH: 南断面P1
	P3	G-91	62	57	48	47	136	
	P4	H-90-91	81	70	35	34	127	IH: 18-P1
	P5	H-1-91	93	75	41	37	141	IH: 15住内PA
	P6	H-92	65	54			153	IH: 15住内PB
	P7	G-93	68	59	54	40	179	IH: 南断面P5
19住	P1	P-111-112	60	53	50	44	60	深度基準1041.85m: 19-P5南の敷石レベル
	P2	Q-111-112	48	47	36	35	59	
	P3	Q-112	52	49	42	39	57	
	P4	Q-112	50	46	39	37	55	
	P5	R-113	46	45	37	35	56	
	P6	R-113	51	47	40	36	57	
	P7	Q-114	42	40	30	28	64	
20住	P1	P-111-112	57	55	46	43	74	深度基準1040.85m: 20-P2南の敷石レベル
	P2	P-110-111	68	66	56	54	64	
21住	P1	Q-117	78	68	40	39	141	深度基準1041.20m: 21-P4上の敷石レベル
	P2	R-118	76	65	43	38	130	
	P3	S-119	67	61	54	42	114	
	P4	R-120	72	69	56	47	125	
	P5	Q-120	67	64	43	41	149	
	P6	Q-119	90	78	51	43	162	
	P7	Q-118	91	78	45	37	163	
22住	P1	I-102	58	53	34	31	93	IH: 165十、深度基準1039.40m: 22-P4検出レベル
	P2	I-102	33	30	18	18	76	IH: 164土
	P3	I-102	72		42		83	IH: 166上
	P4	I-102	78	50	38	34	88	IH: 175土
	P5	I-102	54	47	28	25	96	IH: 169土

表10 3区住居址ビット計測表(4)

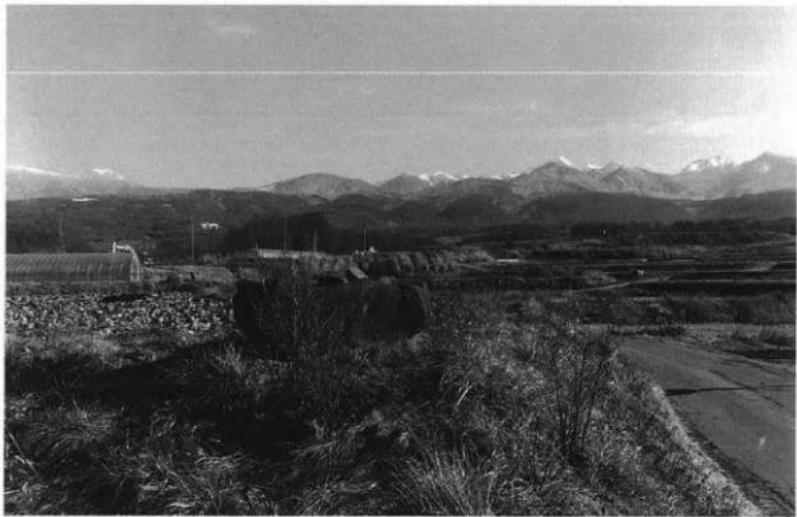
P6	I-103	66	63	46	43	78	112	167±	
P7	I-102	40	36	23	23	83	92	163±	
P8	H-I-103	46	45	26	25	92	92	161±	
P9	H-103	54	43	37	28	100	91	159±	
P10	I-103	54	52	27	23	89	90	168±	
P11	I-103	56	56	31	31	94	94	171±	
P12	I-103	74	48	38	28	98	98	160±	
P13	H-103-104	52	46	34	32	90	90	157±	
P14	H-I-104	46	42	33	33	91	91	172±	
P15	I-104	46	40	30	25	79	79	158±	
P16	H-104	35	35	24	23	90	90	156±	
P17	H-103-104	79	71	52	51	89	89	155±	
P18	H-104	71	53	60	44	90	90	153±	
P19	H-104	50	42	33	33	97	97	154±	
P20	G-104	60	57	38	32	89	89	150±	
P21	G-104	56	40	38	28	85	85	151±	
P22	G-104	70	58	38	37	110	110	149±	
P23	G-104	61	47	49	42	97	97	152±	
P24	G-103	71	64	46	44	109	109	148±	
P25	G-103	26	24	17	16	84	84	162±	
23住	P1	J-93	53	50	34	27	112	3b±3cのP、深度基準1041.30m：奥壁掘方底面レベル	
	P2	K-92-93	69	42		65	65	3c-P14b	
	P3	K-93	68		48		68	3c-P14a	
	P4	K-L-94	58	52	39	33	81	81	3c-P22
	P5	L-95	60	59	56	54	96	96	3c-P28
	P6	K-95	63	62	38	36	114	114	3c-P47
	P7	K-93		28		13	40	3c-P17	
	P8	K-93	30		16		41	3c-P16	
	P9	K-63	19		13		30	3c-P25	
	P10	K-63	38	33	26	23	32	3c-P15	
	P11	L-93	43	38	32	22	35	3c-P21	
	P12	L-94	36	28	26	18	27	3c-P29	
	P13	L-94	33	30	19	19	40	3c-P20	
	P14	K-95		28		20		3c-P19	
24住	P1	J-K-93	53	50	39	37	88	3c-P38、深度基準1041.20m：奥壁掘方底面レベル	
	P2	K-93	63	61	44	40	74	3c-P12	
	P3	L-94	69	61	39	37	94	3c-P7	
	P4	L-95	73	54	51	49	79	3c-P26	
	P5	K-95	64	60	52	44	85	85	3c-P48
	P6	k-93	33	30	17	16	40	3c-P24	
	P7	K-93	34	30	17	16	39	3c-P18	
	P8	K-93	27		19		36	3c-P13	
	P9	L-93	26	23	13	13	28	3c-P11	
	P10	L-93	32	29	22	15	39	3c-P10	
	P11	L-93	37	33	28	28	44	3c-P9	
	P12	L-93	34	33	23	23	45	3c-P8	
	P13	L-94	32	22	18	12	46	3c-P6	
	P14	L-94	30	27	18	17	40	3c-P5	
	P15	L-94	19	16	9	8	17	3c-P4	
	P16	L-94	35	33	21	19	46	3c-P3	
	P17	L-95	20	17	10	10	18	3c-P2	
	P18	L-95	32	28	19	16	33	3c-P1	
	P19	L-95	35	32	16	15	67	3c-P27	
23-24住	P1	J-95	72	66	58	53	101	3c-P42、深度基準1041.30m：23住奥壁掘方底面レベル	
	P2	J-95	57	51	44	39	117	3c-P6	
	P3	J-95	83	83	88	88	126	3c-P43	
	P4	J-95	118	94	100	77	147	3c-P54	
	P5	J-95	135		110		95	3c-P59	
	P6	J-94	44	36	31	25	72	3c-P39	
	P7	J-94	81		53		98	3c-P65	
	P8	I-J-94	83	74	73	60	135	3c-P57	
	P9	I-94	68		57		125	3c-P58	
	P10	I-J-94	113		103		120	3c-P56	
	P11	I-93-94	50	42	35	26	125	3c-P41	
	P12	I-94	51	45	42	39	86	3c-P31	
	P13	I-93-94		46		25		3a-PD	
	P14	J-93	36	34	25	22	66	3c-P34	

表11 3区住居址ビット計測表(5)

	P 15	J - 93	28	18	66	IJ : 3c - P 45		
	P 16	J - 93	36	21	64	IJ : 3c - P 30		
	P 17	J - 93	27	25	18	16	70	IJ : 3c - P 46
25住	P 1	L - 106	50	48	37	35	115	IJ : 11 - P 1, 深度基準1040.58m : 25 - P 12検出レベル
	P 2	L - 106	27	27	19	18	77	IJ : 11 - P 2
	P 3	L - 105	41	34	28	27	90	IJ : 11 - P 3
	P 4	L - 105	43	39	24	22	84	IJ : 11 - P 4
	P 5	L - 105	35	34	24	21	56	IJ : 11 - P 5
	P 6	L - 105	39	36	30	22	92	IJ : 11 - P 6
	P 7	L - 105	35		23		91	IJ : 11 - P 7
	P 8	L - 105	47	46	33	31	100	IJ : 11 - P 8
	P 9	L - 105	38		25		79	IJ : 11 - P 9
	P 10	L - 106	31	25	17	16	109	IJ : 11 - P 10
	P 11	L - 105	27	25	16	14	108	IJ : 11 - P 11
	P 12	L - 104	35	33	19	17	61	IJ : 11 - P 12
	P 13	L - 104	40		26		82	IJ : 11 - P 13
	P 14	L - 104	43	39	29	26	98	IJ : 11 - P 14
	P 15	L - 105	37	32	25	22	95	IJ : 11 - P 15
	P 16	L - 104	22		13		77	IJ : 11 - P 16
	P 17	K - 104	32		21		94	IJ : 11 - P 17
	P 18	L - 104	33		24	23	79	IJ : 11 - P 18
	P 19	K - 104	33		19		100	IJ : 11 - P 19
	P 20	K - L - 104	40		21	17	72	IJ : 11 - P 20
	P 21	K - 104	37	30	24	20	103	IJ : 11 - P 21
	P 22	K - 104	23	18	13	11	114	IJ : 11 - P 22
	P 23	K - 104	35	33	23	21	101	IJ : 11 - P 23
	P 24	K - 104	23	22	13	12	68	IJ : 11 - P 24
	P 25	L - 104	43	40	29	20	47	IJ : 11 - P 27
	P 26	L - 105	33	30	22	21	89	IJ : 11 - P 28
26住	P 1	L - 102	42	42	30	25	103	IJ : 2 - Pk, 深度基準1041.70m : 2 - P 10検出レベル
	P 2	K - 102	43	31	16	16	112	IJ : 2 - Pj
	P 3	L - 101	20	17	13	13	106	IJ : 2 - Pd
	P 4	L - 101	33	30	23	23	100	IJ : 2 - Pe
	P 5	L - 101	23		16		74	IJ : 2 - P 16
	P 6	L - 101	23	21	13	12	70	IJ : 2 - P 14
	P 7	M - 101	23	21	13	10	73	IJ : 2 - P 13
	P 8	M - 101	47	35	28	24	106	IJ : 2 - P 2
	P 9	M - 101	23	22	13	19	72	IJ : 2 - P し
	P 10	M - 102	49	32	21	18	86	IJ : 2 - P 5
	P 11	M - 102	32		18		53	IJ : 2 - P あ
	P 12	M - 102	26		16		63	IJ : 2 - P q
	P 13	L - 103	23	20	13	11	88	IJ : 2 - P う
	P 14	L - 103	25	22	16	14	94	IJ : 2 - P い
27住	P 1	J - 177	20	19	13	13	19	

表12 黒曜石集計測表

法量 (最大値)				種別	番号
長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
69.1	51.5	24.1	71.3	原石	No 1
48.6	42.1	23.3	54.0	原石	No 2
61.0	48.5	29.3	86.0	原石	No 3
41.0	34.3	27.3	47.8	原石	No 4
40.0	37.8	29.5	53.0	原石	No 5
56.9	50.3	27.3	66.2	原石	No 6
39.7	37.4	27.9	62.7	原石	No 7
40.8	31.8	41.6	89.7	原石	No 8
37.1	34.4	20.3	35.5	原石	No 9



ヒシリ石



ベッタ沢と 3 区（北東から）

図版 2



1 A区 1・2号土坑 半截 (西から)



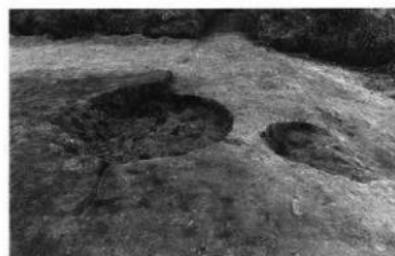
1 A区 1・2号土坑 (西から)



1 B区 4号土坑 半截 (西から)



1 B区 3・4号土坑 (南西から)



1 B区 3・4号土坑 (北から)



1 B区 5・6号土坑 (西から)



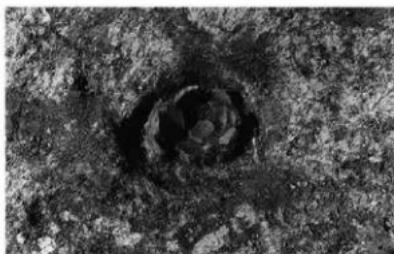
1 C区 全景 (西から)



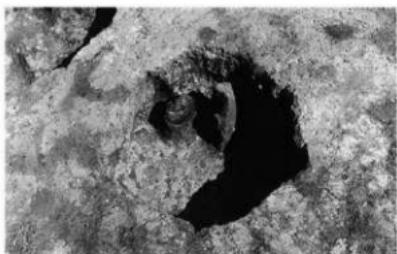
1 C区 7号土坑 (東から)



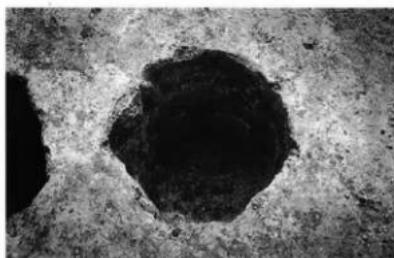
2区4号住居址（南から）



2区4号住居址炉址（南東から）



2区4号住居址P6（南西から）



2区4号住居址P4（西から）

図版 4



2区 5号住居址 (南から)



2区 5号住居址炉址 (北から)



2区 5号住居址埋壙 1 (西から)



2区 5号住居址埋壙 1 (西から)



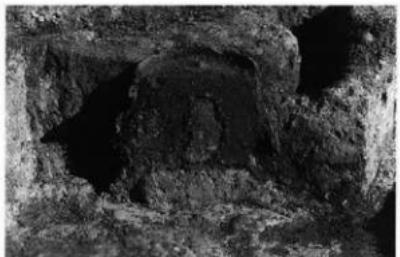
2区 5号住居址埋壙 1 半截 (西から)



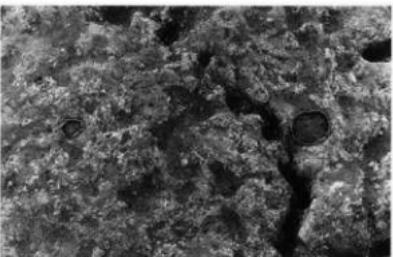
2区5号住居址埋壺2（西から）



2区5号住居址埋壺3（西から）



2区5号住居址埋壺3半截（南東から）

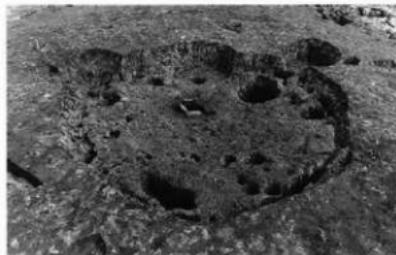


2区5号住居址埋壺2・3（東から）



2区6号住居址（南東から）

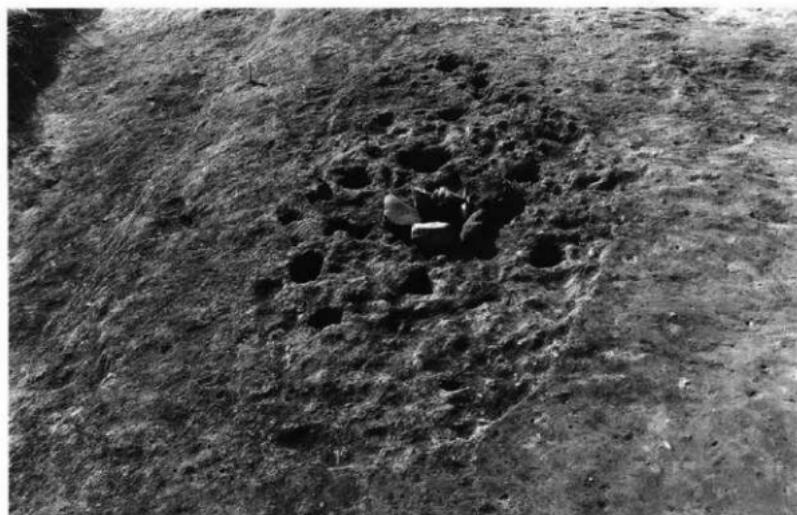
図版 6



2区 6号住居址45・46・57・85号土坑（南西から）



2区 6号住居址炉址（南から）



2区 7号住居址（東から）



2区 7号住居址炉址と伏窯（北西から）



2区 7号住居址埋窯（西から）



2区8号住居址（南西から）



2区8号住居址土器・礫・焼土検出状態（西から）

図版 8



2区 8号住居址（西から）



2区 8号住居址焼土検出状態（西から）



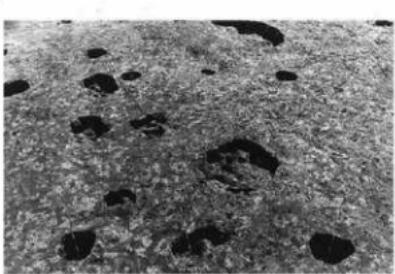
2区 9号住居址（東から）



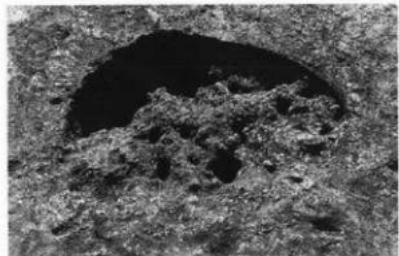
2区 8号住居址炉址（西から）



2区 1号方形柱穴列（北から）



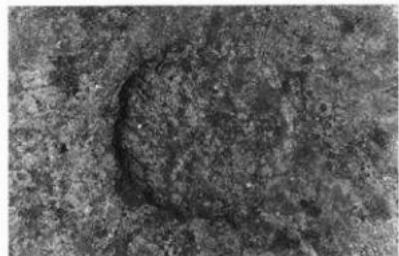
2区 2号方形柱穴列（北から）



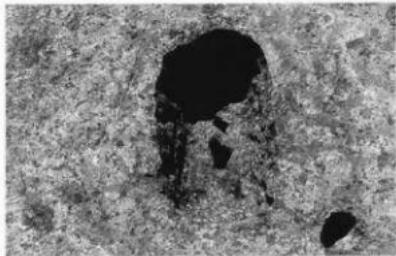
2区1号土坑（東から）



2区2号土坑（南から）



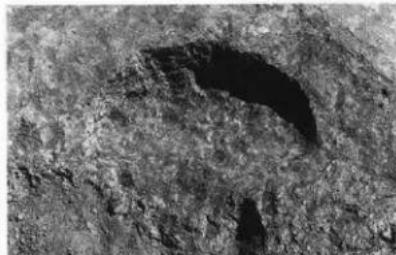
2区4号土坑（東から）



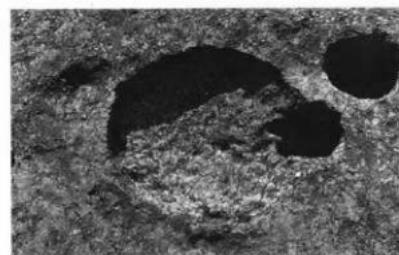
2区5号土坑（北から）



2区6号土坑（南東から）



2区7号土坑（西から）

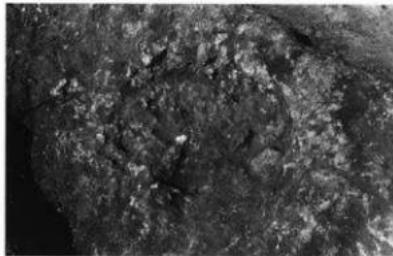


2区8号土坑・4号住居址P13（東から）



2区9号土坑（西から）

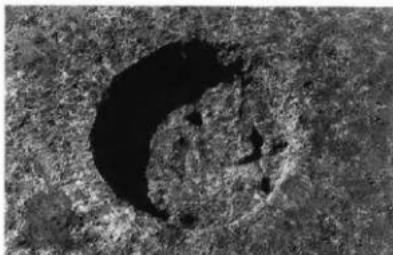
図版10



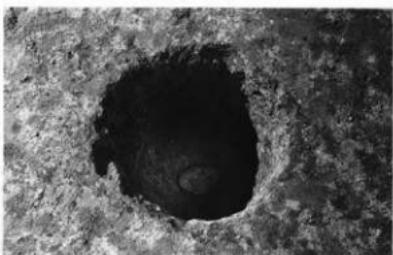
2区10号土坑（南東から）



2区11号土坑（東から）



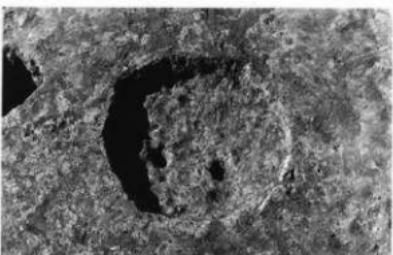
2区12号土坑（南東から）



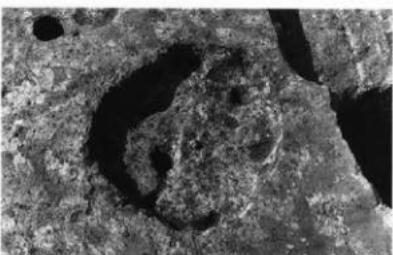
2区13号土坑（東から）



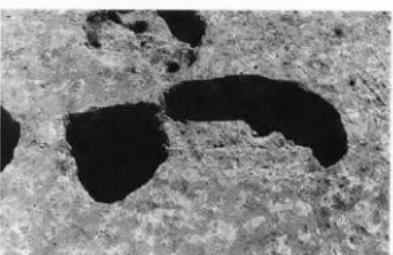
2区14号土坑（北から）



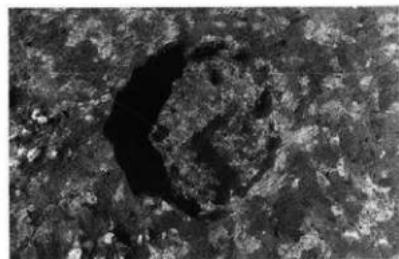
2区16号土坑（東から）



2区17号土坑（東から）



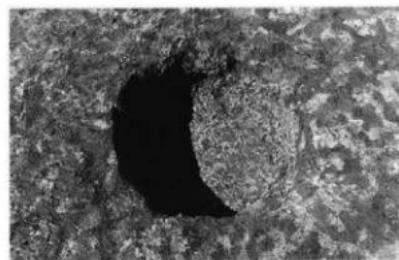
2区18・19号土坑（北から）



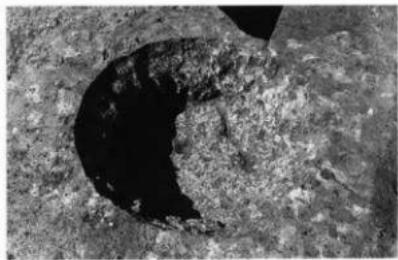
2区30号土坑（東から）



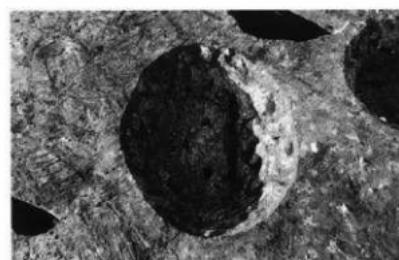
2区31号土坑（北から）



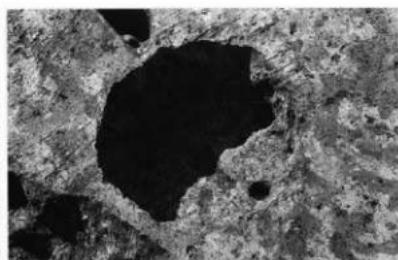
2区52号土坑（南東から）



2区65号土坑（北東から）



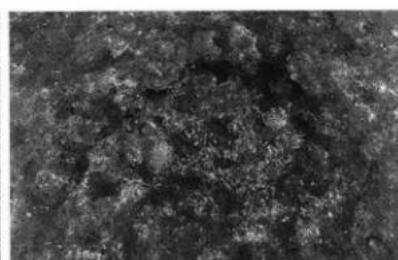
2区66号土坑（南東から）



2区67号土坑（東から）

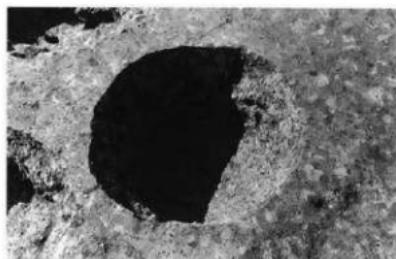


2区69号土坑（南から）



2区70号土坑（北から）

図版12



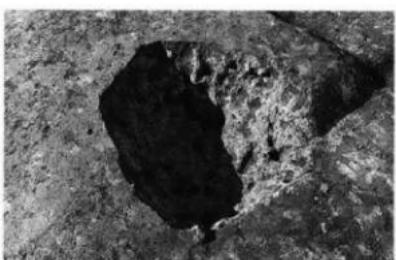
2区71号土坑（北東から）



2区79号土坑（南東から）



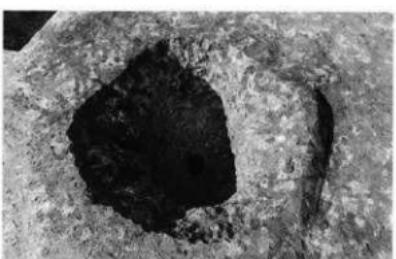
2区79号土坑（北から）



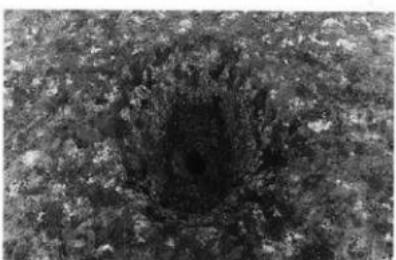
2区79号土坑（南東から）



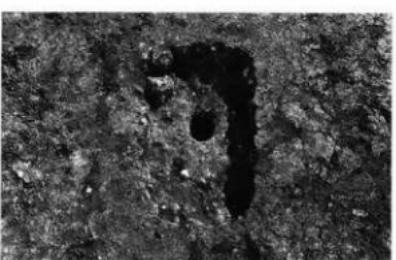
2区80号土坑（南東から）



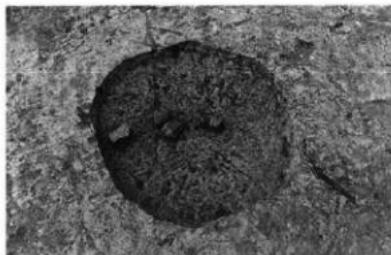
2区81号土坑（南東から）



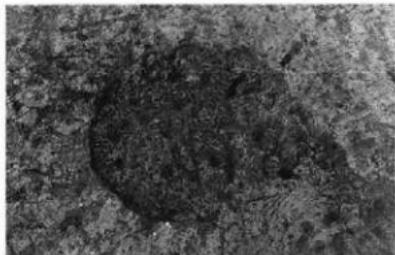
2区82号土坑（南東から）



2区87号土坑（北から）



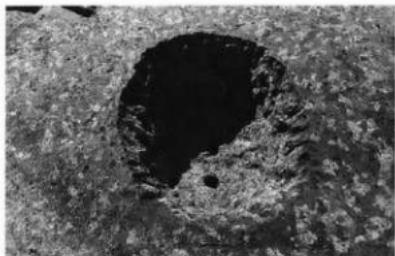
2区90号土坑（南から）



2区91号土坑（南から）



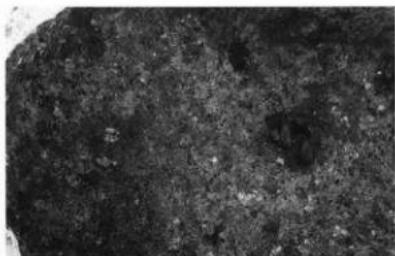
2区92号土坑（北から）



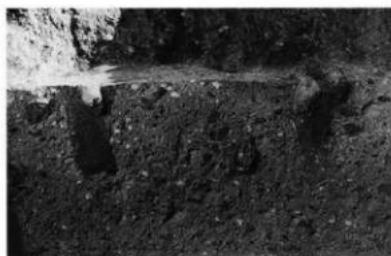
2区93号土坑（北から）



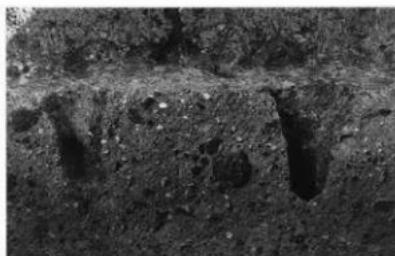
2区94号土坑（北から）



2区94号土坑底ピット検出状態（東から）



2区94号土坑底ピット半截（西から）

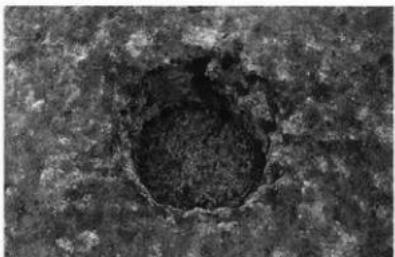


2区94号土坑底ピット（西から）

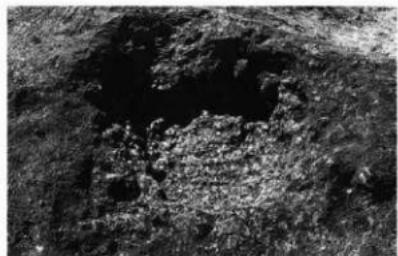
図版14



2区112・98号土坑（南東から）



2区99号土坑（北から）



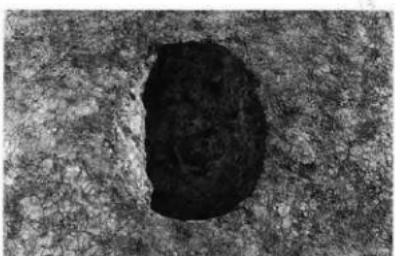
2区100号土坑（南東から）



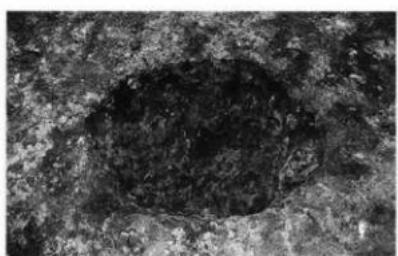
2区103号土坑（北西から）



2区104～109号土坑（東から）



2区114号土坑（北から）



2区115号土坑（北西から）



2区116号土坑（北から）



3区全景（東から）

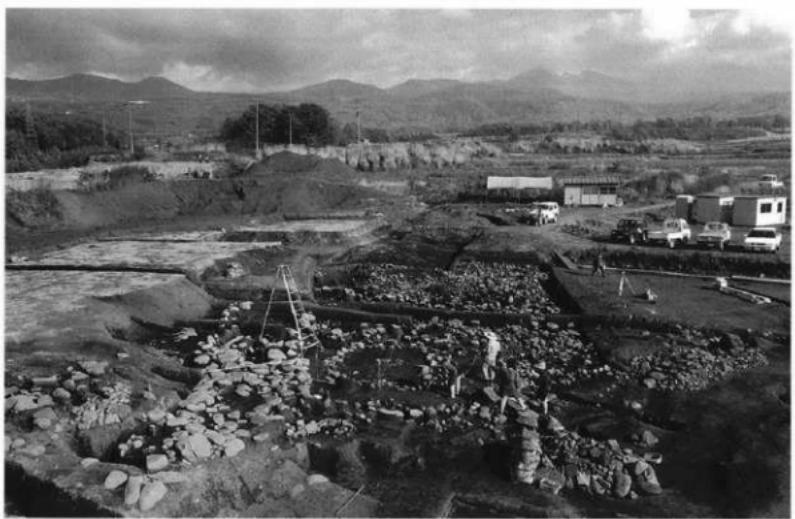


3区確認状態（東から）

図版16



3区斜面の縦検出状態（東から）



3区斜面から低地の縦検出状態（西から）



3区斜面の礫検出状態（南東から）



3区斜面（4号配石）の礫検出状態（南西から）

図版18





図版20



3区2号住居址と6号配石（南から）



3区2号住居址礫堤（東から）



3区2号住居址炉址と軽石製品（南から）



3区17号住居址炉址（南から）



3区17号住居址炉址半截（南から）

3区2号住居址検出状態（東から）



3区2号住居址と5号配石（南から）



3区2・17・26号住居址（南から）



図版22



3区3・23・24住居址内の礫（北から）



3区3・23・24住居址内の礫（南から）



3区3・23・24住居址内の石棒（西から）



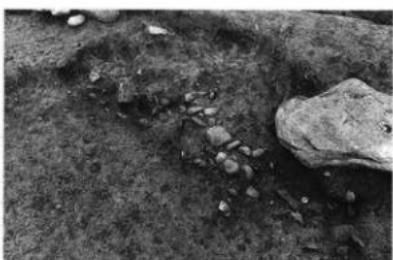
図版24



3区3号住居址土堤、12号住居址縁石、23・24号住居址礫堤（南から）



3区3・23号住居址礫堤下の土堤（北から）



3区3号住居址礫堤下の土堤（南西から）



3区3号住居址礫堤下の土堤（北から）